

596
169



2

0054809-000

596-169

黄竜船

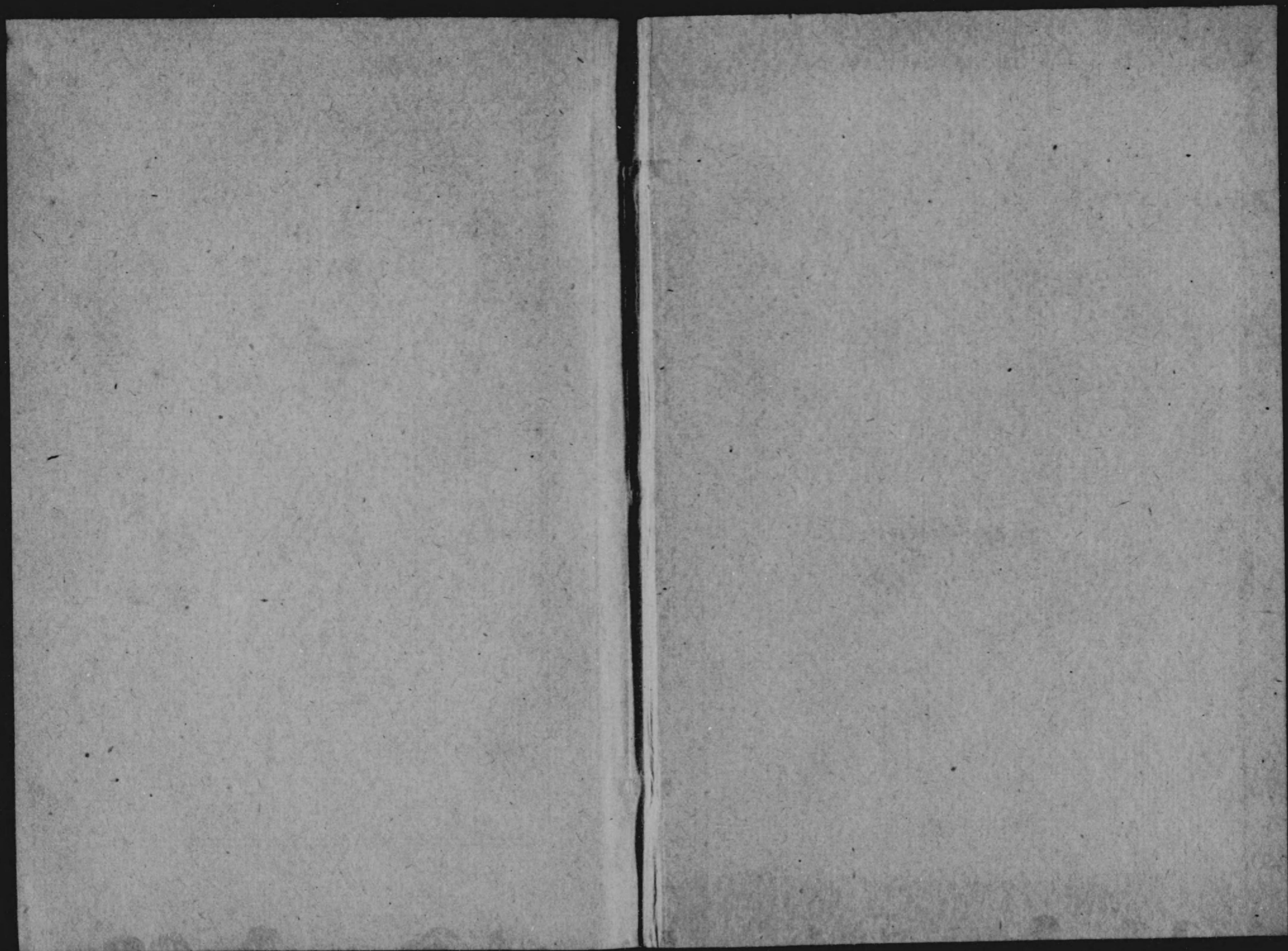
米田華紅・著

日本書院出版部

昭和4

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月21日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



米田華舫著

支那
綺談

黃龍船

東京 日本書院發行



序

謎の國と云はれる支那は、さすがに茫漠として、幕を押すと同じに張合のない國民性と共に、豫想の出來ぬ、握み所のない、珍しい物語の數々がある。

本篇には、黃龍旗から五族旗、青天白日旗の今に移る過渡期に起つた、それ等さまざまの面白い話の十數篇を蒐めてある。

つれづれな思ひ出の小品篇は除けても、物語篇に收める所の多くは、四淫の國柄と云はれる支那でなければと思はれるもの許りだ。

酒を飲み、女を買ひ、賭博を打ち、阿片を吸ふ——この四つの惡癖に淫する國民の間に、怪奇な物語を生むに不思議はない。

國民政府が首都を南京に遷してから、先づ精神的建設を宣言し、極力國內の建て直しを籌劃し、婦人解放運動につれて、迷信打破、禁娼令、斷髮令施行など、形の上から新しい支那の實現にも努めて居るが、一方に土匪や馬賊、秘密結社は依然として旺んで、白晝の強奪、婦女誘拐な

どは到る所に繰返されて居る現状である。
 國民政府もだんく〜と帝國主義的色彩を帯びると批難される昨今、再び元の混亂の支那に戻らねば幸福である。

世が亂れるにせよ、治まるにせよ、黃龍船に乗せた物語十數篇、大部分は支那を背景とし、支那人を主人公としたもので、彼等の姿をとりく〜に描いた積りだ。
 地老ひ、天荒る。哀感頑艶、卑しい金聲にその痴情を戒めるは、聖賢の專賣ではない。國風好色の尊障を映してみるのも、また徒爾でないのを知る。

著 者 識

支那談 黃龍船 (目次)

小品篇

大江の夜釣……………二

入江の繋り舟……………二
 芋虫で鯨釣……………三
 胡弓の哀音……………五
 忘八と西瓜……………七
 幽 靈 火……………九

支那奥地の旅……………二

星明りの旅籠屋……………二
 宿賃二錢也……………四

渡貨が二圓……………一六
 狩猛な蒙古犬……………一九
 氷河へ陥る……………一九
 騾馬は無事……………三三
 月謝五百文の學校……………三三
 胡坐の村夫子……………二六
 半月振の洋燈……………二七

温泉寺行

灰の降る日……………二元
 笈の降り……………三元
 野葡萄の芽……………三元
 山峽の温泉……………三元
 雪の摩天嶺越え……………四
 連山關の街……………四
 雪の繪屏風……………四

北支那の冬

岩鼻の男……………四
 嶺上の破廟……………四
 水底の静寂……………五
 十二月の雪……………五
 火鍋子……………五
 火事……………五
 火客……………六
 火客……………六

チヨンクオ語の先生

チャカ・ピン・プウ・チイ……………六
 七百の支那人……………六
 ミンバイマ先生……………六

馬龍潭の手

雪解の太子河……………七

物騒な噂……………三八
 馬賊から脅迫状……………三七
 偉大な手……………二六

支那で大統領になつた疊屋の芳公……………二八

闇黒の街に大音響……………二八
 眼の前に銃剣の光……………二五
 金モールの威容……………二九

黄海で海賊に遭つた話……………二九

出船にケチ……………二九
 怪しい黒點……………二七
 二萬圓の紙幣袋……………二〇

支那故事小話集……………二五

太公望と鮎釣り……………二五
 支那の金太郎……………二六

月宮殿に奔る嫦娥……………二八
 生命まで失ふ馬鹿正直……………二九
 小野道風と書神王右軍……………二二
 二十四孝二十四不孝……………二二
 頬の飯粒で二兒を養ふ……………二三
 髪を切つて贅澤を戒む……………二四
 驢馬の様な顔孔明の兄……………二六
 牛二題(その一)……………二七
 牛二題(その二)……………二八
 小さい梨と井戸端騒動……………二九
 死物狂ひな破釜の陣……………三〇
 讀經三昧で盜賊を撃退……………三二
 天知る地知る汝知る吾知る……………三三
 二年後に果して千里結言……………三四
 學者の穴埋め詩書の焼却……………三五
 劍舞の鼻祖項莊と壯士の荆軻……………二六
 俠客孟嘗君と子分三千人……………二七

物語篇

十萬兩の首 二九

空から舞ひ散る紙片の雨 二九

十萬兩の首二十萬兩の首 二六

彈雨の下に散る名花一輪 二四

馬賊から將軍へ 一五〇

馬賊になるまで 一五〇

村を襲ふ話 一五七

第七の戀女房 一六三

張勳と女優王克琴 一七〇

生命がけの芝居 一七〇

女優の將軍府乗込 一七七

意氣を賣つた女 一八四

戀の皇帝 一八九

女優金翠花 二二

女優の轎夫に變装 二二

刺客を送る宴會 二九

秘密の謎は解けた 三四

切腹の元祖 三三

汚れた出世 三三

國の亂れ 三五

切腹の始め 三九

苦肉の計 二四二

北原の戰 二四二

苦肉の計.....二四八
馬謖を斬る.....二五七

乾隆帝の廓ぞめき.....二五九

道樂者が師匠.....二五九

素見の講釋.....二六六

帝へ初會惚れ.....二七二

牡丹燈の女.....二八

鬪體と語る.....二八

怪しい魅惑.....二八四

死靈の城へ.....二九二

胡蝶盃物語.....二九九

船中で語る若武士と漁士の娘.....二九九

酒の香を慕ふて飛び廻る番ひの蝶.....三〇六

七年後の今日生々しい瘡跡.....三二二

六月雪物語.....三九

韓爺廟の祭.....三九

暴主の酷政.....三二

義人の諫言.....三三

六月の紅雪.....三六

宙に浮く首.....三八

天地開闢六萬年.....三九

片足で六萬年.....三九

混沌たる南瞻部洲.....三二

角の生えた怪人.....三四

白毛の天皇氏.....三六

土匪物語.....三八

名畫の怪.....三四六

閻魔化物往來.....三五〇

畫舫變化仇討

十王殿	三六〇
大地碗	三五四
上機獄	三五九
百叩嫌	三六三
百叩嫌	三六八

非人嚮宴

ガラリと變る絹商人の啖呵	三七二
父親に飲ました毒藥斷腸草	三六一
ぼつかりと蒼白い花舫	三九〇
非人嚮宴	三九七

名人と偽物李鐵丸	三九七
三十萬兩乞食の大宴	四〇六

客棧白話

客棧白話	四一三
------	-----

(目次完)



龍船

米田華舫

小品篇

大江の夜釣

入江の繋り舟

まだ若い月が、歪頭山の頂にかかつて居た。鐵嶺城壁に沿うて流れる柴河の支流が、本流に合して、その河中の廣い所は、隅田河の四五倍もあらうかと思ふ馬蜂溝の入江近く、大きな樹をくりぬいたままの獨木舟を浮べて、僕と支那人の李、それから友人のTは、黙々として、重く淀んで流れる河面に、糸を垂れて居つた。

その晩は、風が死んで、百何十度からある日中の焼けつくやうな、餘熱がいまだに消え去らないうで、むしむしと蒸すのが、夜になつても、抜けきれない。それで僕等三人は賢くも江上へと、夜釣りに逃げ出した。さすがに水の上である。直き僕たちの汗も引込んでしまひ、お互に心から

涼しさうに、話し合ふことが出来た。

舳に吊してある細い竿の尖のカンテラは、チラチラとその影を流に落して、お互ひの面は分らないが、外の二人の姿は、薄ぼんやりと輪廓だけが、光に認められる。

僕たちの船から二三町離れた、入江の岸に帆船かジャンクか、七八のカンテラの光が細く、滲むやうに河面に流れて、ほそぼそと囁き交す聲が、暗い水底からでも漏れてくるやうに、遠く聞えた。この入江に、假泊りして居る船の旅人たちの話聲であらう。

にぶい月と星の光の外、四邊は一面に、薄黒い霧が立ち罩めて居た。

芋蟲で鯰釣

「今夜は一向、駄目ですね。」

李は舳の方に腰かけて居りながら、僕とも、Tにともなく聲をかけた。

「釣よりは涼みに出かけて來たのだから、かうやつて水の上にぼんやりして居るだけでも、目的は達しられた譯だ。」

釣の下手な僕は云つた。

「石油の空罐をさげて来て居る近所の手前、三人がかりで、またあの空罐を提げては歸られますまいが……」

「あれは、李君が頑張つて提げて来たのだから、空罐の責任は李君にありさ。」

「私はきつと、罐一杯になるほど、釣つて御覽に入れます」

と、李は頗る眞面目で云つた。

「しかし芋蟲では、太公望の眞直ぐな釣よりは危いものですよ」と、T君がまぜつ返すと、薩摩芋よりは大丈夫です」と、確信があるらしく云つた。

その日は、日でり續きで、餌のみみずも少ししか得られなかつたので、吾々は薩摩芋の細く刻んだのを、持つて来て居た。

李のは、鯨を釣ると云ふ主張の下に、小指大の芋蟲を十幾つか、探して、餌として持つて来て居る、それに釣竿も普通の太い竹で、釣のない糸で、芋蟲の腹を固く結へつけ、錘の代りに手頃の小石が結へてあらうと云ふ、頗る原始的な、始めて見る釣方であつた。

釣手の少い河魚でも、薩摩芋と芋蟲の餌では、さつぱりと寄りつかず、景氣の悪いことが、此の上もなかつた。

僕とTとで、みみずの餌で釣りあげた、柳の葉のやうに細い鮎やはぜが八九尾、空罐の底に泳いで居るきりで、暗い獨木舟の上、三人の男が河面に糸を垂れて、切りに竿持つ手先へ心を集めて居る譯であつた。

胡弓の哀音

そよそよと風が出て来て、舷をなめる波の音が、低くびたびたと響いてくる。

「いい按配に、風が出てきましたね。」

「さう、この分だと、今夜は家に歸つても、快い眠がとれるかも知れない。」

Tとこんな話をして居る時、入江に泊る船旅の人が、無聊を慰めるつれづれからであらう。時調を弾く胡弓の音色が、高く、細く、斷續して、河面を傳ひ、忍び泣くやうな哀音が流れて来た。

「胡弓を弾いて居るな。」

李もちつと耳を澄して居たが、

「笛でも、胡弓でも、あの賑かな絃子でも、旅の夜、それも船でなど聞くと、耐らなく喉の熱く

なるのを覚えます。」
と、暫くしてからしんみりとして云つた。

「ヤツ」と、李が急に、大袈裟な聲をあげて、どたりと短い、丸太棒のやうな黒いものを、手にした竹竿と一緒に、舟の中へ投げ落した。

「釣れたか？」吾々は立ち上つて、李の側へ寄つた。

彼はカンテラの光を右手にかざして、どんなものですと云はんばかりの得意な笑を面に浮べて居た。

舟底には、頭の大きい、一尺四五寸もあらうかと思ふ鯰が、大い糸を呑み込んだまま、びちびちと動いて居る。

「薩摩芋が、芋蟲に負けた譯か」と、Tはいまいましたうに「芋蟲に釣られる鯰なんかは、餘程どうかして居るぞ。」

「この地方の人は、みな芋蟲で釣ります。」と、相變らず済したものである。

「郷に入つては郷に従へか、僕も芋蟲黨にならうかしら……」

「まア廢せ廢せ。薩摩芋でもよく釣れるのだから。」と、Tは負け惜しみを云つて、僕を切りに留

めた。

それから涼しい河風に面を撫でられて、釣よりは雑談に興を覚えて居た。

その中に僕は、烈しい力で糸を引くもののあるのを覚えて、ぐツと竿から糸をたぐり寄せて「大なきものが掛つたらしいぞ。」

「どれ」と、Tも倚つて来て「此奴は魚ではないらしいな。何しても糸を切らないやうにしろ。」

忘八と西瓜

僕が釣りあげたのは、ちやうど掌を擴げた位の小さな忘八であつた。

忘八と云ふのは、孝悌忠信禮義廉恥の内の第八の恥を知らない龜の一族である、すつぽんのことである。

日本では龜は目出たいものとしてあるが、支那では恥を忘れたものとして、最も忌み嫌ふ動物である。人のことを、忘八と罵るのは、馬鹿と云ふのよりは、激しい痛罵を意味する。

「忘八を釣つた。あははははは、忘八を釣つた。」と、李は手を叩いて叫んだ。

その忘八は、石油罐の中へ入れると、がりがりと、勢よく音立てて這ひすり廻つて居つた。

「兎に角、日本であると、すつぽんは高いものだから……」

「支那人は、すつぽんなんかは喰べません」と、李は僕の言葉に押冠せて云つた。

それから、釣の方は一しきり切りあげて、船から流に冷してある、二ツの西瓜を引きあげて、平げることにした。

ここへ来る途中、畑から買つて来たのだが、低い峯とは云へ、支流の柴河は峽を流れてくる、氷のやうに冷たい水である。そこへ彼此小三時間も漬けてあつた。

「あツ」と、云ふ李の叫び聲と、ボカンと云ふ水の音とが、同時であつた。李は狼狽で、水にぬれた爲めに、手から滑つて、暗い河面へ落ちて、ボツカリと浮き上つた黒い丸を、手にした杓子のやうな襦で押へたが、つろりと抜けた西瓜は、何とも云はずに、黒い河下へ姿を消した。

僕たちは早速に錨を引きあげて、流れた西瓜の跡を追つたが、その行方は到頭分らなかつた。

杓子の形の襦で、水を掻きながら、元の所へと流を廻つてくる時、李の悄氣込んで居るのよ、Tのぶつぶつ聲の方が、可笑しかつた。

もう一つの西瓜は、Tが得意の拳骨で、ひびをいせ、唇と船底を滴たり落ちる、冷い、甘い汁にぬらして、齒に沁み、腸に沁み込む冷感に顫へながら、三人は貪り喰つた。

「折角、三時間も流に漬けて置いた、もう一つのがあつたら……」と、Tは思ひ切れない風で、流して了つた西瓜の事を吝んだ。

胡弓の音は止んでしまつたが、夜が更けて行くと共に、水の底のやうな、ひいやりとする風が肌を粟立たせるほどで、腹の中まで沁み込んだ冷い汁に、單衣では涼し過ぎる位だつた。

「少し寒くなつて来たね」と、Tは襟をかき合せて云つた。

幽 靈 火

入江に泊る船のカンテラも一つ消え、二つ消えして、今では眞暗闇になつてしまひ、旅人たちの囁く話聲さへも、もう聞えて来なかつた。

五日六日と大江に船旅をした経験は私にもあつた。日本ではとても見ることも出来ない風物の推移と、それから湧いて来る旅愁とは、偶然にも船を同じくした東西南北の旅人の心をいつか互ひに頼り合はせ親しませる。情も知らぬやうにさへ見える苦力までが、船を去らうとする私に、別離を惜んで、涙を光らせた思ひ出もある。あの、靜かに寢静つたやうに見える假泊の船の中で、はまだほんとは眠られぬ旅人たちが、ひそひそと舷に音のする水音を心細くも聞きながら、

遠い故郷の妻や子を偲んでゐる人もあるだらう。「幸ひあれよ。」と呟かすにはゐられなかつた。月つきは山頂さんていを落ちて、星明りの暗くらは刻々と吾々の身近みぢかに迫つて、黒い淀よどんで流れる河面かへづらから、何者ものかが躍り出でては来まいかと云ふ、無氣味ぶきみをさへ覺おぼえて來た。

「そろそろ、歸るとしやうか」李りが云つてボチアンと水面すゐめんに入れた、櫂かの音ねも、妙まじに淋しみしく響ひびいた。

ぼうと、黄色味きいろみを帯びて居る光ひかりが、河原道の暗くらに滲にじむやうに、ぼつかりと浮うみ出でて、ふらふらとして居る。

「あれは何だ？」と、僕は訊たづねた。

「鬼火こいび、一定是鬼火いぢんし」と、李りは云つた。

幽靈火いうれいびなどと云ふ處を見ると、李りも同じやうな無氣味ぶきみな怖おそれを感じて居つたと見える。

しかし、それは間もなく、村人むらびとが手にして行く角燈かんとであると云ふ見當けんたうがついて、大笑おほはなひをしたが、先方さきでもこんな夜遅よるおそく、露つゆを多く含む江上かうじやうの闇やみに、怪あやしい火ひのちらつくを見たら、氣味きみ悪わるがつて居るかも知れないと、思おもつた。やがて舟ふねは、入江いゑの岸きしに着ついた。

空鐘あそくわんの中では、すつぽんががりと瓜うりの音ねを立てて、這はひ廻まはつて居る。

李りがカンテラの光ひかりをあげ、僕たちを呼よんで、鐘かねの中なかを指さしたから覗のぞいて見ると、小さな魚うなはみな嚙かみつかれて、白い腹はらを見せて浮うき上あつて居り、すつぽんは今いま、鯨くじらの尾おしに嚙かみついて、離はなれた所ところであつた。

「成程なるほど、忘八わんぱとは、よく言いつた」と私は笑わらつた。

支那奥地の旅

星明りの旅籠屋

その日は丁度ちょうど、日が暮くれてから清河城せいかいじやうの町まちへ入いつた。町まちと云つても小さなもので、四五百戸位しひやくごしかない淋しみしい所ところであつた。

滿洲まんしゅうの炭礦地たんくわうちとして有名ゆうめいな本溪湖ほんせいかうを距とる東北百里とうほくひゃくりとは離はなれてゐないが、家いえを出でてから十何日じふなんにちと云ふもの、日本人にほんじんの顔かほ一つ見みない。

かうなると、人間にんげんと云ふものは無性むじやうに意氣地いきぢのなくなるものだのだと云ふ事を沁しみ々と感かんじたが、縛しばられたやうに豫定よていの旅たびを續つけなくてはならない僕は、三分さんぶんでも五分ごぶんでもいいから、日本語にほんごで愉快ゆきわい

に話して見たいなどと考へて居つた。

いつも町は往還に沿うて、まばらに人家が散つて居つた。

日が暮れると共に店の戸を下してしまふ商家は、何所が宿屋で、何所が何稼業であるかそんな事はてんで分らない。

内地では櫻の季節だが、ここは、未だ零點下何度と云ふ嚴寒、凍てた雪路にすべり、轍の凸凹して居る跡につまづきなどしながら、毛皮の外套にくるまり、豚毛の防寒帽から眼計り光らして、重い支那靴の足をひきずつて行つた。

そしてたまに行き遇ふ人に「店沒有」(旅宿は有りませんか)と繰り返して訊ねては行つたが、「有是有還有半里路」(まだ三町計りありますよ)と云ふ答へは一つであつて、その半里路の宿屋へはなかなかに行きつけなかつた。

それから餘程歩いた時分である。往還へと、門側から空高く突き出した竿の尖にびらびらする小片——宿屋の印を冷い星明りに見つけた時には、ホツとして、荷かつぎの苦力と二人で、その扉口に立つた。

支那人は夜具を持つて旅行をする、と言ふが、それは無理もない事だ。田舎の村を旅する時に

宿屋によつては夜具一枚、貸しては呉れない。

この宿屋もその一つであつて、東京の場末にある木賃宿よりも汚いが、一間しかない客室には別に相宿の客も居なかつた。

ランプなどは今まで、何所の宿屋でも見た事もない。ただ宵の中だけは細いカンテラの光りが薄ぼんやりと黄色く、蠟燭一つないので、何時も食事する時だけは御持參の蠟燭をつけて辛棒をした。

かう云ふ宿になると、ただ泊ると云ふだけであつて、客の用事は何一つ辨じては呉れないので御飯も作る、豆腐の汁も作る、炕の下も焚きつけると云ふ譯で、何もかも自分でやらなくてはならない。苦痛ではあるが、又楽しい所でもある。

手製の粗末な料理でも、苦力と二人で向ひ合つて、鑪詰を突つきながら満腹する時、腰の下から炕が、いい按配にぽかぽかと暖かくなつてくる。

蠟燭の光に、その日の行程を認める事が漸くで、後は打ち倒れるやうに着た儘、其所へ毛布をかぶつて休んで了ふ。

宿賃二錢也

堅い石のやうな炕も、木枕も、馴れば始めての晩程に寝苦しくはない。晝の疲れもあらうかぐつすりと寝込んで了つた僕を、真夜中頃であつたらうか、側に枕を並べて休んで居る苦力が烈しくゆり起した。

「先生先生！ 外邊見有人來」

いかにも低い、囁く聲で、先生！ 外に誰かきましたぜと、ふるえ聲で言つた。

室の内は眞黒闇である。旅人の泊る宿屋を賊の襲ふ話はたびたび聞いて居たので、チツと耳を立てた。

何か物を引きするやうな音が微にした。

枕元の懐中電燈を執つて、ポケットの時計を照して見ると、午前四時半を過ぎて居る。

「もう直きに夜明けぢやないか。」

「へえ、でも……」と、苦力は尙も耳を済して居つた。

その時、扉口へ凍てた土を踏む、みきみきと云ふ足音が近づいて、軽く戸を叩きながら何か叫

んで居る人の聲がした。

「おう」と、向ふの室から宿の者が返辭をして、起き上つて扉口へと下りて行く様子であつた。

「何の事だ」と、馬鹿馬鹿しくなつて、再び眠らうとしたが、もうどうしても寝つかれなかつた。

村の遠くへ行く人の早出の訪れから、苦力に起されたのがいまましくて、仕方がなかつた。

驛馬の鳴聲が聞えて、往還を時折ごとんとと車に行くのが、枕に響いて來た。

まもなく狐色になつた窓の障子が白みそめて來たので、苦力に湯だけを沸かさせ、拳大の饅頭三つの簡単な朝飯を済ませて、出立の用意をした。

その宿泊料は左の通りである。

宿泊料 銅四錢（一人二錢宛）

燃料 銅七錢（高粱殻代）

すつかりで、二人の費用が銅貨十一錢。十錢銀貨を出した所が三錢の釣銭を寄越した。そこで茶錢——茶代を二錢置いたが苦力は頻りに「不要不要」と言ひながら止めさせやうとした位だ。

十錢銀貨が銅貨十四錢に通用するのは、支那でなければ見られない事で、これとても一定して

ゐる譯でなく、銀の値段の高い時には十八銭にさへ通用をする。今日はこれから水洞の難所へ向ふ。

渡賃が一圓

清河の流域に沿うて、河原の石ころ道のやうな所を東へ東へと進んだ。

何所まで行つても、山と山とに追られた峽のやう、低く匂ふ枯柳の茂るのが、行手をふさぐかと思ふ許りで、四方を取り圍む峯はみな白く雪を載せて居つた。

昨日に比べると、風もなく、大層暖かであつた。この分であると、河の氷も存外早く解けはせぬかと、これが又心配の種であつた。

この旅は太子河と云ふの上流へと調査をして行くので、一日の内に何回となく河を縫ふやうに渡つたが、今までは大抵歩いて越せる程に厚く氷にとざされて居つた。

三月末からは支那奥地の旅は稍不適當になつて来る。どうしても十二月から二月頃までの最も嚴寒の候が一番よいのだ。

河に橋とか、渡船とかの便利の少ない田舎では、河の氷が解けて了つた爲めに、土地に不案内な

旅人は、一日の内に何度か豪い廻り道をしなくてはならない事が多い。歩きながら「董！」と、後から来る苦力を呼んだ僕は「今夜は一つ御馳走を喰はうな。玉子と鶏は何所でも見つけ次第に買つて置いたらよ。」

「へえ」と、董はニヤニヤ笑ひながら「今日は屹度手に入るでせうよ。」

「清河城から二里以上も来たのに、家一軒ない道だから、朝から可笑いが、夕飯の料理を考へて置いてくれ！」

「えへえへえへ」と、董は人の好きさうな笑ひ方をして居るが、僕は朝も晝も饅頭、夜は豆腐の汁と福神漬に三四日祟られて、聊かうんざりして居つた。

やがて北西に山を背負うてゐる富家樓子の村近くへ来ると、案の定、河の兩岸の氷は解けて、暖かい所と見え、久しぶりに水の流れる聲を聞いた。この河の渡賃を一人前、二圓宛呉れと、足下へつけ込んだ事を言つて居ると、董は眼を見張つて報告に来た。

「そんな馬鹿にした事があるものか。普通は一人前の渡賃が一錢か二錢ぢやないか。幾ら雪解け水で、量が増したからとは言へ、百倍の増額とは無法だ。よしッ。」

と、僕は董を連れて、河原道を下の方へ、河幅の狭い、氷の厚さうな所を探して歩いた。

渡場の近くには、村の人達が十数人、中には小高い丘の上に登つて、東洋鬼（日本人を罵る異名）がどうして、河を向ふ岸へ渡るかを興深さうに眺めて居る。

これを見ると、尙いまいましくなつて、岸に立つては、大きな石を河氷の上へ打ちつけるやうに轉しては、割れて落ちこまない所を探して行つた。

河幅は二十間以上もあらうか、好い按配に厚さうな所を見つけたので、岸の所は膝ぐらゐまで水に入つて、氷の上に乗つた。みちみちと音がする。もう愚圖愚圖はして居られない。軽い足取りで向ふ岸へと、河氷の上を走つた。その下には渦まわく流れが透いて見える。

みちみちと、氷が足下で割れる音がする。落ち込んだなら、それ切りである。足迅に、軽く踏んで、漸くの思ひで向ふ岸にたどり着いた時には、ホツとして思はずも嬉しさに跳ねあがつた。しかし荷を肩にして、僕よりも重量のある董が未だ向ふに残つて居る。

やがて董も氷上を渡り出した。

今度は此方から見て居る僕がハラハラするが、彼は案外上手に、氷上を滑つて、間もなく僕の側に立つた。

遠く、向岸に集つて見て居つた村の支那人——渡賃二圓を要求した男たちに對して、出来るだ

け高く両手をあげて「萬歳萬歳」と大聲に叫んで見せた。

狩猛な蒙古犬

それから老家甸子から河を離れ、小峯子と云ふ峠を越えた。

その途中の百姓家で、今夜の晩飯の菜に玉子と生きた鶏を買つて、董が荷の後へ鶏の足を結んで括りつけた。時折羽搦きはする、妙な鳴聲を出す、本當に弱つて了つた。

それに此の邊一帶に蒙古種の猛犬が多いので、五匹も七匹もが怖ろしい勢で吠えつき、取り圍んで噛みつかうとする。辛うじて追ひ拂つては行くが、行く先々で脅迫され迷惑を感じたのは此の犬である。

警察力にふい支那の地方では、自衛の一法として猛烈な犬を飼養し、大きな家程に犬の數が多い。

氷河へ陥る。

小峯子の峠を越えてから馬家城にまで歸りの驛馬があつたので、僕だけはそれに乗る事にした。

馬夫と董は、此の地方に出没する馬賊——黃四懶王の話などをして行く。

冷く晴れた空の下、紫黑色に輝く雪の峰に圍れた水洞の村は太子河畔にあつた。

枯木林が深く、雪解け水に水車の音が高い。藁葺の家が三四、流にのぞんで、線香を作る家だ
と見えて、その香が鼻を打つた。

野鴨が何十羽も流に浮いて、僕たちが近く行つても、下手な銃獵家に驚かれて居らぬと見え、
少しも逃げやうとはしない。

氷の厚さうな所を見つけて、董と馬夫は話しながら河を又先に渡つて行く。

驛馬の手綱をくつて、その跡から美しい景に見とれながら行く時、僕はみりつと云ふ怪しい音
を聞いた。がもう遅かつた。

割れた氷、驛馬と共に僕は深い、太子河の底へ落ち込んでしまつたのだ。

「アツ」と云ふ叫びをあげたきりで、後は全てが眞暗闇に思はれた。が、直ぐにぼつかりと浮み
あがつたので、もう無我夢中で両手を力一ぱい上へ差し上げた。

ぐづぐづに崩れた氷片の間から、僕の両手が現れ、やがて首が出た時に、苦力の董は急いで、
太い杖をさし出して呉れた。

杖にしがみつくと、引っぱり上げられるのが、殆ど同じ迅さで、氷上へと立つ事が出来
た。

もしも僕の身體が重くなくて、二三尺も先へ流されたとしたら、厚い氷の下、再び此の世の光
を仰ぐことが出来なかつたらう。

ホツとして、生命拾ひをした事を喜んだが、さて困つた事には、乗つて居た驛馬の行方が分ら
なくなつて了つた。

河氷の下を流れる冷い水に、驛馬は溺れたのだらうか。

向ふ岸へたどりつくと、驛馬の持主の支那人は、到底驛馬が再び生きて、彼の手に戻る事がな
いと分ると、今までの心配さうな面は、急に怖ろしい権幕と變つて、僕に喰つてかかつて来た。

「お前が乗り方が悪いから、驛馬を溺らして了つたのだ。直ぐに驛馬を返してくれるか、それと
もあの身代金百七十元を出せ」と云ふ言ひ分である。

この男には、僕といふ日本人の命よりは、驛馬の方が大切なのだ。

董と僕とが幾ら繰り返して、災難だから諦めろと慰めてみても、頑固な百姓で、どうしても耳
にも入れないで、何所までも損害を要求する。

水に濡れた服も外套も凍つて紙子のやうで、手足を動かす度にミリミリと異様な音がするのである。

騾馬は無事

悪寒がぞくぞくと、わるく身に滲みる。

くどくどと罵りわめく騾馬の持主をなだめなだめして、近くの百姓家に入つて、高粱穀を焚いて貰ひ、濡れて居る衣服を乾す一方に、村人を三人ほど頼んで、董と一緒に河下の方へ、騾馬の生死を確かめに遣つた。

それから二時間近くも経つてからである。

一難去つて、一難来る心配に、ほとほと弱り切つて居る僕の耳に、三四人の話聲が扉口でするのが聞えた。

で飛び出して見ると、そこには董が、身代金百七十元の騾馬から下りる所であつた。

「おう、生きて居つたか。」

「へえ、此奴は強い奴でさあ、三町程河下の河原にあがつて、とほんと、俺たちの行くのを待つ

てました。河の氷は水面とは一二尺空いて居りますので、泳いで行つて、明い、氷の解けた河岸から上つて居たのでせうよ」と、董も安心して、晴々とした元氣のよい聲で話す。が、そこへニココもので出てきた騾馬の持主を見ると、

「僱的騾馬還給僱(騾馬は還してやるぜ)と、掴んで居つた手綱を、ボンとその男の方へ投げて、「一百七十元の騾馬先生(百七十圓の騾馬先生)」と、滑稽けたことを言ひ足した。洒落た董である。

もう彼此三時は廻つて居たが、そこから二里許りある馬家城子の村まで行つて宿らうと、衣服の生がはきを我慢して、出立をする事にした。

扉口につないである騾馬のシヨボシヨボする眼を見た時、何だか可哀さうになつて、

「騾馬！ 僕はお前と危く冥土の道連となる所だつた。だが、これからは頼馬なお客を乗せて、再び氷河へ陥ちて、百七十圓の身代金を要求させるなよ」と、腹の内で行つて遣つた。

そこを立つと、間もなく、僕は後から見えがくれに躑いて来る男の姿に氣づいた。

月謝五百文の學校

清河城よりも尙小さい村である馬家城子は、矢張街道の兩側にぼんぼつんと、家があつた。旅店へ着いてからは、その變な男の事も忘れて了ひ、董と二人で、久しぶりの鶏料理に舌鼓を打つた。

東洋鬼(日本人の奴)が來たと云ふので、村の人たちが入れ代り立ち代り、窓の障子の破れから僕たちを覗きに來て居る。

宿と云つても、前の日に泊つたのと同じにガランとした廣い客室一つで、相容はないが、夜になつても燈光はない。

蠟燭の光に、その日の行程を認めて居ると、扉口の帷がゆれて、幾つも幾つも小さい頭が見えて、此方を窺つて居る様子である。

「董！ あれは何だ？」

「ええ、この隣室が私塾でして、そこに寄宿して居る子供たちです。」

「さうか、此室へ皆を呼び込んでみる。」

始めの内ははにかんで尻ごみをして居た子供たちも、終ひには董の言ふままに一人入り、二人入りして、どかどかと十七八人の子供が入つて來て、僕たちの廻りで、炕に腰かけて、いろいろ

の事を問はれるままに話し出した。僕はこれで、久し振りに旅愁を忘れる事が出來た。

「先生は恐いかい？」

「うむ」と、一人の十歳位の子供は合點いて「鞭でよく叩くのだもの。」

「どうしてね？ 惡戯をするからだらう。」

「ううむ」と、首をふつて「家の父さんが公鶏を一羽持つて來た切りで、月謝の五百文を持つて來ないつて、鞭で叩かれたよ。」

「僕も明日は早く、家へ歸つて、月謝を持つてくるのだ。五百文を持つて來ないと、鞭一つづつ呉れるつて、先生が怒つてたから……。」

こんなたあいもない會話をしてゐる時、最前の怪しい男を先に、一人の巡警がヌツと顔を出した。

怪しい男はこの巡警駐在所の一人であつた。僕たちの方を反つて怪しいと睨んで、身元から所持品までも調べに遣つて來たのだ。

護照(旅行券)や縣知事の依頼状などを出して示すと、すつかりと安心して、歸りには、遊びに來たまへなどと、お世辭を言つて引きあげて行つた。

この騒ぎで、子供たちは散つて了つた。

胡坐の村夫子

この夜は何時になく安らかに眠つた。翌る朝夜が明けるか明けぬ位の早くから、隣家の私塾からは子供たちの讀書する聲ががやがやと聞えて来て、その騒々しいことと云つたら、床になど入つて居られない。

「ええ、支那の私塾はみんなこんなものですよ。夜明けから日暮れまで一日中、がやがやと言つて居るのです」と、董は外から雪の塊を持つて来ては、土鍋で湯を作りながら話してきかせた。

井戸の遠いこの宿では、冬は氷雪を解かし、夏は河の水を使用つて居るのだつた。

村を取りまく枯木林を越して、雪を戴く連峯に旭日の光が紅く照りはえて、今日も暖いよい天氣らしい。

僕は顔を洗つてから、隣家へ行つて見ると、そこには昨夜馴染になつた顔がニコニコして、三四十人位は居らうか。子供たちは炕の上で、机によりながら大きな聲で讀書をしてゐる。

炕の隅に髻髪のある老人が、胡坐を組んで、長い煙管で煙草を悠長に喫んでゐた。

僕の方をチロリと、意地悪さうな白眼がちの眼で見たので、直ぐにそこを出て了つた。それが月謝五百文の代りに鞭一つの先生であらう。

朝飯代りの饅頭三つを平けて董と二人でその宿を立つた。

今日は同じやうな河原道を一気に十二里、太子河の流を縫ふて、南甸子、大陽、後臺子の村落や、幾つかの峠を越して城廠へ近くのだ。

半月振の洋燈

李家堡子の村から四峯の峠を越すと、眼下は一望の平野が開けて、そこに遠く城廠の町——家の白壁や重り合ふ屋並が見えた。

今までは違つて、人影もチラホラと河原道に黒く、荷馬車や轎車にも時折出あつた。

この附近での大きな物産の集散地で、町としては三千戸位であるが、町筋は商家が赤い、青い、金銀の色をちりばめた看板を掲げて、軒を並べてゐた。

日暮れ前に、道を急いだので、町で一番の旅宿へと着く事が出来た。

ここは今までの木賃宿式と違ひ、一室一室が別になつてボーイも居れば、料理人も居る。十四

五日振りにランプの光に浴して、今更らしく明るいのに驚いた。

炕がある上に、火鉢があり、机も椅子もあつて、室は小じんまりとして綺麗である。

苦力の董は反つて宿りつけない宿と見えて僕たちが一流の外國のホテルに泊つた格で、聊か勝手が違つたと見えてボーイなどにまでへいこらして、可笑しいくらゐ、矢鱈にへどもどして居つた。

が、それは無理もない、苦力と云へば、支那では乞食の直ぐ上の階級である。支那では、乞食と巡査と兵士は最も無能な者のする、同列の階級として認めてゐる。

「おい、董！ この宿泊料は二錢ちやあるまい。幾何位取られる？」と訊いて見た。

「哈哈、這客棧頂好了。連房帯飯一天三角多錢了」(ははは、この宿は一番好いのですよ。室代から御飯つきで一日三十錢以上でさあ)と、笑ひながら答へた。

なつかしいランプの燈光の下で、ぬくぬくと暖い炕の上、肉を切り込んだ饅飽に珍しい料理を九皿も十皿も、董と二人で綺麗に平けてしまつた。

うまい、何を喰へても美味かつた。

二人ともに、身體を動かすも大儀になつた位、腹一杯に詰め込んで了つた。

温泉寺行

灰の降る日

蒙古灰の降る日であつた。

四月の末から五月へかけて、時折風の吹き廻しから、空一面に黄褐色の灰のやうな砂がどんよりと擴がつて、家も、樹も、丘も、あらゆるものの上へ、さらさらと積るのだ。

その朝も、蒙古灰と云はれる砂塵のために、太陽は紅く、血のやうに濁つて、嫌に薄い光を湛へて居つた。しかし支那人は、雪の多い年と、この灰の降る年を、豊年の前兆として喜んで居る。

私は、出あるくには不快な日であつたが、前からの約束でもあり、親しい李漢英と云ふ支那の友と二人で、石炭の都と云はれる本溪湖を後に、温泉寺行の旅へ出かけた。

空は濁つて居たが流石に五月である。雪と氷にとざされた萬象が、ホツト呼吸づき、潑刺たる元氣で蘇生つて、畑には高粱が、ボブラや楊柳の新しい芽と緑を競ひ、小鳥の囀りさへ生々とし

て居る。

あわただしく来る夏を迎へる春の短い粧ひは、この土地では一時に梅から桃、櫻さへも咲くやうな奇現象を呈するのだ。

私と李とは、猫柳の生茂る緑の河原を突切つて、太子河驛から紅臉溝驛まで輕便鐵道の客となつた。

一客車に六人か八人も乗つたら満員になる程の、玩具のやうな客車が三輛と、石炭運搬用の空貨車が七臺。これも、客車や貨車にふさはしいやうな小さな機關車が、廣々とした河原に、塵埃箱を置いたやうな恰好の小さな停車場から、けだるい汽笛を低くあげて走り出した。

お客は、一列車を通じて後にも先にも、私と李のたつた二人である。

薪のやうな細い枕木の上を、線路は太子河に沿つて、北へ走るのだが、ごとり／＼と行く汽車の歩みは、牛よりも早い程度であつた。

「李さん、この分だと、紅臉溝へは晝過ぎにならないかね？」

私は、この汽車にはうんざりして訊ねた。

「さア、晝過ぎになりませうよ。それにお客がないせゐるか、大變に揺れますな。」

「風のある海で小舟に乗つてるやうだ。」

「全く！ 弱りました。次の崔家驛へ着いた時、機關手の支那人に頼んで見ませうよ。」

「何を頼むのかね？」

私は不審に感じたので、窓ガラス越しに外を見てゐた眼を彼に轉じた。

「ええ、もう少し早く走つて貰ふのです。」

「へえ、そんな事が出来るのかい？」

「機關手は、私の懇意な家の息子ですから、この位の便宜は、屹度計つてくれます」李はニヤニヤと笑つて居る。

崔家驛と云ふと體裁がいいが、これがまたお話しにならぬ小さな建物。驛員一人居るわけがなく乗客の三四人の爲に、雪や風よけに造られて居る粗末な小屋、乗客は遠くから、列車が進行して来るのを見ると、手をあげて、これを留めて勝手に乗込むのだ。

崔家驛へ来た時、一人の百姓風らしい老人が、旅支度らしい大きな夜具包を背負つて、この客車に乗込まうとしたが、乗降口が狭いので、何うしても乗込めないで弱つて居た。

「お爺さん、何處へ行くのだ？」

そこへ、顔を眞黒にした汚い詰襟服の火夫らしい、若い男がやつて来て、

「その荷物は客車へは、入らないよ。此方で預かつといて遣らう。」と、親切なその火夫は、老百姓の背中の荷を取下して、機関車の次に連結してある空貨車の中へ擔いで行つて投げ込んだ。そして又、そこへ戻つて来て、

「お爺さん、紅臉溝までだね。では賃銀を貰つて置くよ。」

老人はペコ／＼と、灰白色の短い薄い辨髪頭を氣軽く幾度もさげながら、銅錢を一枚々々と念入りに數へて火夫の掌へ載せて居た。

「韓さんに話して、もう少し早く走らせて呉れよ」と、李は窓から首を出してその火夫に叫んだ。

「へい、宜しうございます。」

火夫も、白い齒を見せて、氣持ちよささうに笑ひながら、

「温泉寺行きですか。」

「ああ、日一杯に向ふへ着けないと困るから、よく頼んで呉れ。」

「へい」と、お辭儀を一つして、向ふへ行つた。

韓といふのは機關手の名前である。

筏のり

李の言葉は觀面に効果を現して、汽車は威勢よく走り出した。

が、その線路は、臥龍から下牛心寮驛まで河の縁をすれ／＼に走るので、よく機関車もろ共に客車が河へ轉り込む、有名な險呑な場所であつた。

「李さん、大丈夫かい？」

「さア、大丈夫でせうよ。」

彼も穩かでない不安の色を眼に浮べて居た。

「やはり、こんなぐら／＼の線路を走るのは、前の通り、牛の歩みの方がいいね。」

「でも貴方が、遅い遅いとおつしやるものですから……」李は迷惑さうに云つた。

氣の毒なのは、崔家驛から乗込んだ老人で、烈しい振動に身を支へることも自由でないと見え窓枠と腰掛の板へ確固としがみついて、シヨボ／＼の眼を閉ちたり開けたりしながら、唯ならぬ様子である。

その時、ごといんと急に列車が止つた。

臥龍驛にはまだ来ない途中であつたので、李は直ぐとガラス戸を開けて、外へ首を突出した。

「おい、何うしたのだ？」

「爺さんの荷物が落ちたのだよ。」

外で先刻の火夫らしい男の叫び聲が聞えた。

「は、い、い。空貨車に積んだお爺さんの荷物が、餘り振動が烈しいので跳出したのだ。でも川の方へ落ちなくつてよかつた。」

「さうですか！ 儂の荷物が落ちたのですか？ それでも直ぐに氣づいて呉れてようがした。」

老人はキョト／＼四邊を見廻した。

その内にまた列車はつと／＼と鈍い振動を立てて走り始めた。

山が迫つた溪谷。深い奥地の雪解け水らしい清冽な流に、遡つて、汽車は河岸を何所までも北へ／＼と進んで行くのだ。

汽車の窓から覗くと、流は魚の戯れるのも判るやうに綺麗で、河底の石さへ明白と透いて見える。そして向ふ岸の斷崖は、遠く流を伺ふ様に聳えてゐる峯巒の影と一緒に、深く深く、河面に黒い影を刻んで居る。

臥龍驛に停車して居る時であつた。城廓あたりから下つて来たのか、山から切出した儘の丸木の筏が一艘、驛の下河岸にやすんで居る。びた／＼と寄せる漣にゆれ乍ら、筏の上に腰を下した船頭は、長い煙管で、吞氣さうに白い煙を空に吐いて居た。

「おい。もう晝だらうがな！」

彼は振向きさま、機關車の方へ聲をかけた。

「何處まで下るのかい？」先刻の火夫の聲がした。

私と李は、停車した機關車の火夫と、河を下る筏乗りの男との會話を、嫌でも暫くは窓越しに聞かねばならなかつた。

「橋頭まで下るのだ」と筏乗りの男は、立上ると「晝飯を食ふのだが、お湯があつたら、少し呉れんかな。」

それから間もなく、火夫は割けた湯沸を手に提げて、その筏へ、傾斜して居る丘を河岸へと下つて行つた。

二人は、そこで何やら聞えぬ低い聲で、面白さうに談笑して居た。
汽車は依然として停つたままだ。

やがて、火夫の湯沸を提げた姿が河岸の丘に立つて、ぶらり／＼と機關車の方へ歸つて行き、發車を相圖する汽笛を二聲、けだるさうに短く鳴すと前の通りつとん／＼と動き出した。

野葡萄の芽

蒙古灰で濁つた空は、その頃よい按配に雲切がしたやうに、うつすりと蒼空が見えて、太陽の暖かい光が輝き出した。

「空が明るくなつて来たな。」

「え、今朝のやうに蒙古灰が降つて居ると、外歩きは耐りませんや。まるで服も何も黄粉を浴びたやうになりますから……。」と、李は嬉しさに空を仰いだ。

その落ちついた汽車は、午後一時過ぎ頃、目的地の最終驛——紅臉溝に着いた。

「紅臉子」が、滿洲名物である馬賊の別名である程、そこは「紅臉子」の巢窟であつた。

私たちの毛布や米、鑼詰などを入れた鞆を二ツ擔いで、峠越えを幾つかして難路を行くため、その村人の一人を荷かつぎに雇ひ入れた。

「温泉寺へ遊びにかね？」

李と知合であるらしい、その村人は、いかにも山育ちな頑丈な體軀の持主で、恐しい顔付に似氣なく、輕々と私たちの荷物を肩にしながら武骨な口調で話しかけた。

「ああ、この頃は温泉へ行く人があるか？」と、李は私に代つて答へた。

「いや、少しもないぞ。何うしても紅臉溝から峠を三ヶ所、これを越すのが困難だからなア。」と彼は私たちを見返つた。

「どれ、そろ／＼と出掛けやうか。」

三人は、五六十戸の村である、淋しい紅臉溝の部落を抜けて、直ぐとそり立つやうに、前面に聳えてゐる楊家嶺へとかかつた。

「日一杯には、温泉寺へ行けるだらうな。」

李は確めるやうに訊いた。

「さア、お前さんたちの脚では困難だらうよ。だが出来るだけ急ぎますべえ。」

枯草のはびこる細道を、爪さき上りに、話しながら歩いた。

三四寸もあらうかと思ふ藪が、すく／＼と到る所に芽を出して、私たちの踏みしだくの任せ

た。
「この邊一帶は、野生の葡萄といちごが多いのですよ」と、李は、親指と人指指で輪を作つて見せながら「葡萄なんか、こんな大きな粒のがあるのです。そんなものは誰も取盡せない程、山から山に一面でさア。」

「そして夫は好いかね？」

「私は好きです」と、李は、野生の葡萄から造る酒の話などを附加へて、

「一杯で葡萄が十銭か十五銭、それでも買手がないのですから……」

彼の話を裏書するやうに、行く道のかたはら、それらしい葉が、芽から返つて間もない嫩緑の手を擴げて居た。

「ほう、此所にも石炭が露出して居るな。」

「ええ、これから山の背のやうな所を行くと、ちよいくと黒く露出して居るのが判ります。」と李は、前に行く荷かつぎの男を呼びかけて、

「なア、お前の村などは炕の下まで石炭を焚いて居るな。」

「へい。石炭はボロ糞にありますから、山へ行つて、掘つて来ては焚いて居るのです。」

自然に恵れた土地として知れて居る紅臉溝附近、そこに馬賊の危険さへなければ、ほんたうに幸福な永住地であつたらうが……。

峠から峠へと、胸を突かれるやうな上り路に喘ぎながら、三人は、日が暮れてから間もなく温泉寺へと辿りついた。

宵月の影淡く、煙るやうな夜の空に、高く山門が聳えて居るのを見出だした時、私たちの脚は思はずも早くなつたのである。

山峽の温泉

その夜、荷かつぎの男も寺で泊ることになつた。

「直ぐに温泉に行かうぢやないか！」と私は李を急ぎ立てて、寺の住持の好意から、借りた庫裡の一間を出て、古びた本堂の側を廻り、裏手にあたる七八段の石段を下りた。その下には粗末な建物から、濛々と宵月を蔽ひ隠すやうな煙が立昇つて居る。

浴槽は、自然の石で圍まれた八疊間位の大きさのが、二つ並んでゐた。

裸蠟燭の光を頼りに私たちは薄暗い浴槽のひた〜と湯が充溢れて居る中へ、さぶりと疲れた

身をひたした。

綺麗な、無色無味の温泉であつたが、湯ぶねの縁に頭をのせて、湯のなかで手足を思ふさまに延ばした時、身も心もほんたうにのび／＼とする愉悅を感じた。

ちろ／＼と湯に映る蠟燭の光に、暫く眼を閉ちて居ると、湧き出しては滴り落つる湯の音らしいのが、何處からかぼたり／＼と淋しく響いてくる。

萬籟寂として、他には何の物音もしないが、風につれて、時折、遠くから太子河のせせらぎ、岩を嘯む流の音らしいのが通つてくる。

「静かな、いい土地だね。」

「ええ、ほんたうに山峽の温泉ですから、ほんやりと氣を落ちつけるには持つてこいの所です。」と李は眠さうな聲を出して、

「夏は殊にいいですよ。この寺の下を流れる河岸に、河鹿が澤山に居ましてね。」

「それでは、夏にまたもう一遍出直して来るか。」と言ふ私の言葉に冠せて、

「しかし、あの庫裡には、臭蟲が多いから閉口しますよ。」と、李はカラ／＼と笑つた。臭蟲とは南京蟲のことである。

雪の摩天嶺越え

連山關の街

蒙古風は粉雪を捲いて、どつと林をゆすりながら大地へ叩きつけて行く。昨夜から吹荒れる風にこの土地としては珍しい程の雪の積り方で、丘の下や家の陰のやうな吹きだまりの場所は、三四尺もあらうかと思ふ深さである。その吹雪は朝になつても止まらうとしなかつた。

「えらい吹雪だな。」

「この分だと、定めし嶺は雪が深からう。」

「さあ、大概はこの風で吹飛ばされてしまつて居るが、岩陰などや浅い谿間は雪で埋つてゐる。だから今日のやうな日の山登りは餘程氣を付けないといけない。一足踏み違つて、谿間の雪へ身を入れたが最期、づく／＼と何處までも沈んで行つて、全く助ける方法がないのだからな。」

「擇りに擇つて、本當に嫌な日に出掛けて来てしまつた。」

「まさか。此所まで踏出して来て、雪が深いからと引上げも出来ないしな。」

私たちの一行——それは摩天嶺の頂上にある日清、日露兩役の激戦地である關帝廟が、今度その麓の村人たちによつて、取崩されると云ふ風聞を耳にしたので、今は人の住んでゐない荒れに任せてある破廟ではあるが、有名な古戦場であるので、戦蹟保存會からの頼みで、その眞偽を確かめると共に、場合によつては、その廟と所在地を買取る相談の爲め、私の外に日本人と支那人の苦力が二人宛、總勢五人で、山麓の村である連山關といふ所へ、昨夜着いたのである。そして今晩嶺へとのぼる考へであつた。

所が、宿へ着くと間もなく、名物の蒙古風に、危険な雪まで下して寄越した。五人が鼻を揃へて、何時までも安閑と、同じやうに天の無情を繰返し、愚痴つてゐる場合では無い。

私は黒猫の帽子を目深に、毛皮の外套の襟を立てた。そして凍てた雪の山路で滑るのを防ぐ爲めに、ピロウドの支那靴を用意した。外の人たちも、同じやうに身輕な、そして十分な防寒の旅装を整へたのである。

「それでは出かけやうか。」

私は先に立つて、外の人を促した。

連山關の街——細長い一本道の兩側とも、まだ眠つてゐるらしく、表扉を下したまゝの所が多

い。見渡す限り白い布をのべたやうな上へ、私たちはさく／＼と低い音を立てながら亂れた足跡をつけて行つた。

何所の家の軒からも、四五尺もあらうかと思ふ氷柱が、地につきさうに何本もぶらりと垂れてゐる。そして道端にある樹と云ふ樹の梢や枝は、思ひ／＼な恰好をした白い塊の華をつけて、重さうに首垂れてゐた。

街を抜けてから間もなく、摩天嶺への上り口である山路にかかつた。

雪の繪屏風

麓の氷河に沿うて、道はだら／＼と雑木林を縫ひながら、爪先あがりになじつ／＼上つて行く。

その頃から吹雪はよい鹽梅に止んだ。眼をあげて行手を仰ぐと、雲切れのした空からは薄陽が射し、まるで雪にとざされた絶壁、その豁間の一枚屏風の繪の中へ突き進んで行くやうな心地がした。

路につき出てゐる小枝には、時折寒さうに、ふくれるだけ腹を脹らして居る雀が三四羽、小賢しさうな眼をパチ／＼やりながら、私たちの一行を見下してゐる。

誰の面を見ても、外氣に觸れる所は眼だけであるが、吐く息が白く外套の襟に霜のやうに凍りついて、眼ぶたさへ兎角シベくと凍りつきさうに寒かった。私は眼鏡が絶えず曇つてしまふので、餘計に他よりは困難である。

「この間嶺の奥へ逃げ込んだ馬賊たちは、もう何所かへ行つて居るだらうな。」Tは心配さうにこんなことを訊いた。

「さあ、この摩天嶺と千山が彼等の隠れ場所だから、この雪では何所へも行つてゐまいさ。」とAが云つた。

「すると、まだ居るのかしら……。」Tは餘程不安らしい調子である。

「わたつていいぢやないか。」

「この寒いのに、調査課のY君みたやうに、身ぐるみ剥がれて、素裸體にされた日には、餘りいこともなからうぢやないか。」と、先日四郎街道で、持物から洋服まですつかり強奪され、シヤツ一枚で近くの百姓家へ逃げ込んで救助を受けたYの話を持出した。

「大丈夫！ そんなケチな馬賊は、この嶺へは逃げ込んで居ないから。……もしも出遇つたら仕方がないさ。僕のする通りに真似をしたまへ！」

「どうするのだ？」

「かういふ風に両手をあげてさ。全く無抵抗である意志を表示するのだ。」と、Aは思ひ切つて、手を上へあげて見せた。

「やれ〜、そんな所爲はしたくないものだね。」と、Tは苦笑して「さうすれば無事で居られるのかい。」

「まあ生命だけはね。」

「それぢや矢張シヤツ一枚になるまで持つて行かれるのかい。」

「それは先方さまの御寛大な處置に一任する許りだ。彼等が身内を探つて、欲しいと思ふ物があれば持つて行くだらう。さういふ彼等の繩張内へ、こゝと入つて来た僕たちの不遇を嘆くばかりだ。」

「さうなつたら、一切の交渉は君にお願ひしやうぢやないか。」とTは私に言つた。

「さうだ〜。そんな掛合は、出来るだけわれ〜の被害を少くする爲めに、君に腕を振つて貰ひたい。」と、Aも嬉しさに相槌を打つた。

それで、私は、出もせぬ内から馬賊たちとの險呑な交渉係を無理強ひに押しつけられてしまつ

た形になつたのである。

岩鼻の男

雑木林をぬけると、路はさう急峻ではないが、かなりの上りで、山の腹から腹をぐるぐると廻つて行く。

灰黒色に濁つた、まだ雪を含んでゐるらしい空が、ところ／＼切れて、冷い蒼空がうつすりと覗いて見えた。

「この分だと、晴れさうだ。」Aは元氣な聲をあげた。

遠く犬の吠える聲が聞えると、そこに二三軒、樵夫の家のあるのが判つた。そして私たちがその前を通る時に、見馴れない一行に噛みつく鋭さで吠える犬の聲に驚かされたらしいその家の男たちが、慌てて外へ飛出して、怪訝さうに眼を光らして見送つた。

凍てた山路は、雪があるだけに、まだ踏みこたへがあつて歩きいいのであるが、ともすればツルリ／＼と滑つて歩き難かつた。それに、チツとしては一分も立止つて居られない。足先から滲込む寒気が凍傷でもするのではないかと思ふ位に、烈しく身内へとこたへた。足先に力を入れて

堅く踏みしめて行く時、その冷さは幾分忘れられて行くのである。

「あの岩鼻だ！」Aは、私たちの歩いて行く山と直ぐに續いて居るらしい山路の雪に蔽はれて、それらしく見える出鼻を指示して、

「あそこが馬賊のよく出る所さ。あの陰に隠れてゐて、此方を見下してゐるのだ。そしてあの岩鼻を廻つて向ふへ出やうとする旅人の鼻先へ突如五挺でも七挺でも、ピカ／＼と光る銃口を揃へて指し向けるのさ。大概は腰を抜かすさうぢやないか。」

「ほう彼所が！」とTは怖氣づいたらしく「もう譯ないやうだね。」

「ああ、この山を越すと直ぐだ。」とAは態とTに戲弄でもする風で、快活に云つた。

「T君なんか、あわてて逃出すと眞先にやられるから、注意する方がいいぜ。それよりは腰でも抜かしてゐる方がまだ安全だからな。」

Tは始めての旅であるのに、Aからさん／＼におびやかされてゐた。私よりも後から来る苦力などが、くす／＼と忍び笑ひをしてゐる位に、Aは眞偽とり混ぜて、出鱈目な馬賊の活躍をさも見てでも來たやうにTに話して聞かせ、さうでなくてもピク／＼もので跟いて來てゐるTの恐怖心をそそつた。

丁度私たちがその岩鼻を廻つた時、ヒョッコリと眼先へ立塞がつた一人の男！ 怪しい姿をして右手に銃を握んでゐる！

「あツ」とTは本當に雪路の上へ腰を落してしまつた。

流石のAも顔色を變へた。場所が場所なので、私も思はずドキリと胸を打たれたのである。

嶺上の破廟

「兎子不買呀。」

怪しの男はかういつて、樹の株か棒切のやうに堅く凍りついてゐる兎を、突如私の鼻先へ突きつけた。

彼は嶺に住む獵師であつたのだ。さう見ると、まだその腰の邊には二羽の雉子をぶら下げてゐた。

(兎を買はないか)と云ふのだが、兎よりは腰の雉子の方が、今夜の寺泊りに欲しいと考へた。後から後苦力の董に二羽の相場を聞いて見ると、

「一角半、行」(十五銭なら宜しい)と云ふ。餘りに安過ぎると思つたが、値をつけて見ると、彼は

二つ返辭で賣つて、すた／＼と山路を下つて行つたのは、また更に吃驚させられた。

そこで、苦力に擔がして來た私たちの毛布や米や罐詰などを振分けてゐる天秤の端に二羽の雉子の足を結へて逆にくくりつけ、尻の雪をはたきながら苦笑してゐるTを促して新道へと出た。

その道は、戦争當時、日本軍が砲車を引上げるために苦心して造つたもので、急ではあるが、幅が廣いため、上るに大變樂である。

左手は深く谿が落込んで、絶壁に沿つた道は九十九折しながら山から山を迂回して摩天嶺頂へとだん／＼に近よつて行く。私達が歩きながら、晝飯代りにぼ／＼の支那饅頭を嚙り、水筒や道端の雪に渴を醫して行く頃になると、空はカラリと晴渡つた。

晴れたとなると、雪の山路を行く位爽やかな氣持はない。殊に見る眼がなだらかな支那風の山々が、脚下にも、行く手にも、右にも左にも、キラ／＼と陽に藍紫色の輝きを見せて起伏してゐるのである。

枯木林のすく／＼と空をつくやうに骨立つてゐる所へくると、急にバラ／＼と梢に積る雪を蹴散しながら狩搏きの音高く、雉子であらう？ 眞一文字にサツと雪の峰の面を斜に掠め、素早く空に黒い線を描いて、雪谿の林に姿を消してしまふ。

私たちの行く道の雪に、何度か鬼らしい足跡が横ぎつて、側の林に逃込んでゐるのを見つけた。が惜しいことに、彼等の姿らしいのを遠く空しく眺めるのみであつた。

午後の三時頃であらう。少しの休みもなく歩きつづけてゐたので、早くも嶺上近くにある寺へ着くことが出来た。そこからは、直ぐ向ふの低い山上に、古戰場として有名な關帝廟が、砲弾に破られたままの残骸を止めてゐるのが見える。

水底の静寂

その夜の宿を寺の住持に頼むと、快く承諾してくれた。

昔時は此の寺に胡蘆大王と云ふ怪賊が立籠り、何百の山賊を配下に、旅人や麓の村を思ふままに苦しめてゐた。そして天險による彼等の爲めに、官兵は幾度か敗亡の憂目を見た。それを、辟仁貴將軍が奇策を用ひて、一夜の内に掃討したと云ふことを、何だかの本で讀んだ記憶がある。

そんな事は當の住持は少しも知らない見え、私が話し出すと、

「へえ、それから……」と云ふ具合で、却つて後を促す聽手になつてしまつた。

住持は、五十の上を餘程出てゐるらしい、人の好ささうな老人で、この山頂の寺で私塾を開い

て、塾生が六十人近くゐるとやら語つてゐた。

その晩私達は温かい炕の上に胡座を組み、借りた鍋で、カンテラの光を頼りにぐつぐつと雉子を煮始めると、その住持も側へ来て、勧められるままに遠慮なく肉をムシヤ〜と喰べ始めた。窓障子の破れから幼い塾生がかはる〜覗きに来ると、先生は割鐘のやうな聲を出して「來るでないぞ」と云ふ風に叱り飛ばしてゐた。そして相變らず雉子の肉をふう〜と吹きながら、さも旨さうに、私たちと一緒に喰べるのであつた。

雪の夜の山頂、寺院の一室は風がないので、私たちの話が断切れた時は、まるで水の底のやうな寂寥が皆に襲ひかかつた。

カンテラの油を吸ふ音と、ぐつぐつと雉子の肉の煮え立つ響が、一そう私たちを淋しくした。

北支那の冬

十二月の雪

ポプラや楊柳の葉が、枝と云ふ枝から振り落されてしまひ、街の並樹も、麓の林も、盡々と高

い蒼空に骨立つてくる頃になると、毎日のやうに烈しい風の吹く日が続く。そして落葉がくるくと街路に舞ひ飛んで、時には、空も太陽も、二三間さきに歩いて行く人さへ分らない位に、黄褐色の埃を舞ひ立たせる、本當に黄塵の巷と云ふことを想せる程に、自動車も、馬車も、騾車も、道行く人も、すべてが黄塵を浴びて、歩いて行く。雨のふることの少い所へ、毎日の空風であるから、外へ出て見ると、見渡す限り黄褐色の埃が積んで、風と一緒に渦を捲いては、空高く舞ひ揚るのだ。

こんな日は、幾ら嚴重に窓を閉め切つて置いても、机や道具の上は何時か白い埃でさらさらとして手觸り悪く感じる。そして道行く支那人のすべてが、黄褐色の悪い面色をして居る。大方何時もこんな埃ばかり吸つて居るからであらうが、それは支那人ばかりでなく、この土地へ來て居る日本人の色艶も、何と云ふ嫌な色なのかと云ひたくなるのが多い。

だが空風に粉雪をまじへて、大地へ叩きつけるやうな、すさまじい「蒙古風」と云ふのが吹いてくるやうになると、四邊の風物は急におつとりと、汚い黄塵の巷から遁れることが出来る。

十月の始めに降つた雪は、そのままに翌年の四月頃まで、凍てついたままに持ち越しであるので、暖い陽に解けた路上は鏡の面のやうにつる／＼としてくる。蒙古犬や驢馬に引かせたソリの

往來が、繁華な街のある城内と村との唯一の交通機關となるので、冷たい空高く、絶えず鈴の音が響いてくる。

兒童たちは、路面を巧にすい／＼と、人や橋の間を縫つて、スケート靴で滑べつて行くのだ。風が烈しいので、雪は何時もさう大して深く積らないが、十二月に降る雪については、支那人にこんな迷信がある。

この月に降つた雪を、瓶の中につめて、暗い所へ圍つて置き、翌年の夏に出して用ゐると、その家には蚊や蠅が湧かないと。

しかし餘り當にならないと見えて、十二月の雪を圍つた家が、夏になると、蚊や蠅に攻め立てられて、閉口して居る。

だが十二月は、一年中で一番に迷信行事の多い月で、二十三日の灶祭りから、この月に搾つた油は、蠶室で點すと虫除けになり、髪油として濡れ羽色の美しくさを添へ、蒸米の迷信など、いろ／＼に變つた御幣のかつき方があるのだ。

火 鍋 子

粉雪を大地へ叩きつけて行くやうな、蒙古風の荒れる吹雪の夜が、幾日か続いた後は、屹度拭つたやうな、晴々とした蒼空の日が来る。そしてそんな日は、枯木林の蔭の暖い所にちろ／＼と陽炎の立つのさへ見える位に、小春日和の思がする。

二重ガラス戸の小窓を開けて、久しぶりに冷い外気に觸れるのを喜ぶ人たちは、そこから路行く物賣りの支那人などを呼び止めて、何かと戯弄ひでもして居る風で、晴やかに笑聲をあげて居るのは、よく見受ける所だ。街を行く人の脚取も、何所か恠う輕氣に、躍るやうな調子で嬉しうである。

だが十二月も押し追つてくると、太陽の光はだん／＼に鈍く、道といふ道、林といふ林がばさばさに凍てついてしまひ、人は眼ばかり出して歩かなくてはならないやうになつてしまふ。かうなると、本當の支那の冬が来るのだ。

「烟筒掃除宜しいか。」

二人が一組になつた眞黒は支那人。煤光りのする汚い顔が、のっそり／＼と戸毎に、石油の空鏝を肩に、長い針金の先に襪褸片を捲きつけたのを挿んで、御用を訊いて歩く。

うっかりして居て、何とも返辭をしないで居ると、その儘にコツンリ無斷で、そこに脱ぎ捨て

である靴でも、洋傘でも掃除して行つてしまふ物騒な連中である。

「栗！ 栗ぬくろ。」

物悲しい叫び聲が、窓下を通るやうになると、毎晩のやうに凄い風が吹き續く。

暖爐を圍んで、故郷の話もしあきた時分、この栗賣りの見えることは、また新しい話題を提供してくれるのである。

ほか／＼と煙のあがる栗の皮をはちきながら、それからそれと、何度でも同じやうな話を繰返して行くのだ。

それで、夜を更かしてしまふことが多い。と朝、寢て居る内から、厠の掃除口の方で、岩でも叩き崩すやうな、カン／＼と鐵棒で烈しく叩く音がする。

「ははあ、もう来たな。」

繁華な街を、山のやうに箆に積んだのを平氣で擔ぎながら運んで居る支那人たちの姿が浮んで来る。桶もいらぬ。柄杓もいらぬ。ただ箆と鐵棒だけがあればいいのだ。

水氣のあるあらゆるものが、かち／＼に凍りついて居るので、支那街の雜貨屋へ行くと、大きな生の河魚は、太い丸太棒のやうに、幾本も並べて、壁の扉に立てかけてある。

牛肉も豚肉もぼそ／＼に折れさうに凍つて居るし、鶏屋の店先には、雉子や鶏が棒でも呑んだやうに、しやつちよこ張つて、幾らも釣り下げてある。そして道行く人の外套の襟は、呼吸で眞白く霜が積んで、馬の鼻面に氷柱の下がつて居るのも珍らしくないのだ。

そこで、かう寒くなつてくると、今まではとんと忘れられて居つた火鍋子が、皆に思ひ出されて、支那の料理家へ行つても、何所の家庭でも、大きな鐵砲鍋のやうな七輪が、座敷へ持ち出されて、幅を利かすことになる。

七八人から十人も上の人たちで、ぐるりと火鍋子を取り囲み、ぐつ／＼と煮え立つて行く鍋の内へ、箸を突つき合ふその味はまた格別である。

火鍋子の内には、中央のかつ／＼と燃える炭火を圍んで、澤山の汁に浮いたり沈んだりして居る豚肉の片と、鶏、鰻魚、蟹の白味、海月・白菜・筍・京菜・しひたけ・松茸などが煮えくり返つて居るのだ。

皆が、火に面を紅くほてらせながら、ふう／＼と舌を焼く程に熱い料理を味ふのは、これも支那の冬になくてならぬ風物の一であらう。

火 事

零點下何十度と云ふ寒さがくる。街を行く人がぶく／＼と着眼れて、むく犬のやうになつて往來を滑べつて行く。歩いて行くのでない。滑つて行くと云ふのが適當な脚取である。

城内の鼓楼の下や城壁側に、今日も一人、乞食が凍死して居つたなどと、殆んど毎日のやうに行き倒れの話が出る位に、凍死者が珍しくなくなつてくる。

雪模様のだんよりとした空合、風の出た晩ほど、しん／＼と寒さの耐へることはない。それが雪の日となると、割合にぼか／＼と暖であるが……

丁度、そんな空模様の日暮れてから間もない頃である。表扉をどん／＼と叩く音がする。そして聞き馴れた、あの支那人の李——この一二ヶ月許りに、山東から出稼ぎに来て居る男の聲で「ツオウ、シユイラ」と云ふことを、忙しく三四遍繰返しては、また切りに扉をどん／＼と激しく叩くのだ。

兎に角、その叩き方が普通でなく、叩き聲も何であるか分らないが、容易でないらしく想像をしたので、直ぐと掛金を外して開けた。

「ツオウ、シユイラ」

彼れは、また私の姿を見ると外を指示して恚う叫んだ。

「何だ？」

私も釣り込まれて、急ぎ込んで訊いた。が彼の返辭はやはり同じことである。折り悪く、日本語の分るボーイは不在だし、何が何だか、理由が判らないので、弱つてしまった。

早速に、何時もの式で、座敷から鉛筆と紙片を持つて来て彼に字で書いて見せるやうに示した。李は、暫らくしてから得心が行つたらしく、獨りで頷きながら、軒燈の光を頼りに覺束ない筆跡で、

「走水了」と書いて見せて、その字を指示したが、また「ツオウ、シユイラ」と云つた。

さアいよ／＼分らない。

「走る水が了る？ 或は水が走り了る？ 一體何のことだ？」と、彼を凝視して詰つて見ても、結果は同じことだ。

その内に、支那街の寺にある破鐘が、寢惚けたやうな、ぼかんと云ふ音を立て出した。

「おやつ、これは唯事でないぞ。」と云ふ氣がした。と、往來を提灯つけた人たちが、幾人も駈

けて行くのが見える。

「城内が火事ださうです」と、何時か、そこへ家のボーイが歸つて来て云つた。

「火事か。先刻から李が、ツオウシユイラと云つて、こんな字を書いて見せたのだが……。」

「ええ、これは火事のことですよ。」

「走水……走水が火事か。」と、餘りの字意の違いに、呆れてしまった。

この寒いのに、御苦勞なこととは思つたが、何にしても火元の遠い城内のことだから、人並に駈けながら出かけて見た。

支那でも彌次馬は一杯。燃えさかる雜貨店を遠巻きにして、巡捕の制止聲など耳にも入れないでデリ／＼と近くへ寄つて行く。

そこには極く舊式な手押ポンプが二臺。水は近所の井戸から、臨時雇ひの苦力の手で、一擔ぎ手桶二杯で銅貨二枚と云ふ際どい稼業。われ勝ちに汲んでは運んでくる。がその井戸端の騒動と來たならば凄い有様。義理も人情もない、烏合の寄合、火の消えない内に一杯でも多く汲んで儲けやうと云ふ譯だから、險呑な井戸の縁——岩のやうな水塊のころ／＼して居る所で、喧騒、罵聲、果ては取組み合ふのが居る。怖しい修羅場はなかく、火事場所でない。中には、これもお

雇ひか、積つた雪を運んでは、燃えしきる炎の内へ叩き込んで行く男も居るのだ。

客 棧

奥地の冬の旅位佗しいものはない。

凍てた河原や山道ばかり、紫黒色に雪焼けた面に、そり取るやうな冷たい風をうけて歩いて行くのだ。

三里も四里も歩いて、小さい木賃宿一軒ない所さへあるので、日暮方の薄暗に、村道へ突き出した竿の先、旅人の眼につくやうに、旅店の記標である小片が、はた／＼と風に吹かれて居るのを認めると、やれ／＼とホツとするのである。

さう云ふ淋しい村落になると、大抵は町端れに、一軒位の旅店はあるが、ほんの旅人を泊めるだけと云ふ、簡単な設備——ただ三坪位の炕があるだけだ。

顔を一つ洗ふ湯が沸いて居るわけではなく、ランプ一つない位であるから、飯の仕度などは自分でしなければならぬ。

驢馬も、轎車も、馬車も、長い旅には到底乗つて居られないのだ。それは激しい寒さが足先か

ら滲込むのと、轍が心棒位までも喰ひ込む凸凹の激しい道を行くので、ゆり上げ、ゆり下される動搖に、尻の方が耐らない位に痛くなつて来る。

それで、支那の道は歩く方が一番安全と云ふことになる。

朝から晩まで歩きつめて、やれ／＼宿屋へ着いたと思ふと、御飯ごしらへに取りかからなければならぬ。

一緒に連れて行つた苦力を急ぎ立てて、御持参の蠟燭の光の下で、どうやら豆腐の汁ぐらゐには有りつけるが、場合によると、今夜もまた豆腐かと、ろんざりする程に、三日も四日も、豆腐に祟られる事がある。

晝間の内に、うつかりして居つて、鶏でも、野菜でも眼につき次第に買つて、提げて歸らないと、豆油を叩き込んだ豆腐の汁で幾日でも我慢をしなくてはならないのだ。

先づこれで腹も出来たとすると、蠟燭が大事とばかりで、後は宿屋の點けてくれた細いカンテラの下、ぼか／＼と暖かくなつて来た炕の上へ、着たままごろりと横になる。

夜具一枚、枕一つさへ貸して呉れないので、これも御持参の毛布を、乞食のやうな苦力と、引張り合つて眠るのだ。

カンテラの油も、頃合で消えるやうに入れてあると見え、直に闇に吸ひ込まれるやうにデディと、糸の光を残して消えてしまふ。

よく見受ける事であるが、あのたたくと混雑をして居る驛頭を、多くの支那人たちが各自に夜具を背負つて旅するらしい滑稽な様子や、隅札口から我れ勝ちに、先を争つて列車へ乗り込まうとする際の面白い光景は、決して笑へないことだと考へた。

こんな風な宿屋から宿屋を、旅して行くとしたならば、私たちでも、彼等のやうに勇敢に持てるものなら、夜具を持つて旅をして見たい。

その内に、晝の疲れで、ぐつぐつと眠つてしまふが、炕の暖いに引きかへ、障子の破目からは外の夜気が流れ込むので、夜半になると、屹度幾度か冷い風が襟元にはひ込み、頬を撫でられして、眼ざめがちである。

三時、四時頃になると、まだ暗いのに、遠出する旅人か、村人か、馬車の鈴の音が湧えて聞えて、ごとりと行く轡の音が、枕元へ響いてくる。もう眠られないのだ。

夜が明けると、炕に焚いた高粱穀代二錢、宿泊料二錢、一人前計四錢也を請求される。安いものである。

チヨンクオ語の先生

チヤカ・ピン・フウ・チイ

A君は今度三ヶ年の螢雪の効、空しからずして、愈々かねての希望通り、チヨンクオ語の先生として、或る大きな會社へ招聘されることになつた。

チヨンクオ語！一體、それは何處の言葉なのだ？ やはりヒンドスタニーやタミル語、さては印度語のやうな變つた言葉なのかと、ちよつと頭を拵つて考へて見ても、お分りにはなるまい。實は、これは支那語のことである。

何だ？ チヤン語のことか？ などと今更、そんな詰らなさうな顔付をして戴いては困る。これからA君が、チヨンクオ語の先生として、いかに素晴らしい腕前を見せたかと云ふことをお話をするのである。

「君の發音は、英語なのか、支那語なのか」と、中學時代、英語のM先生から、彼は侮辱された位に、英語を讀んでさへ、支那人らしい發音をして居つた先天的支那語學者であつた。

「よしッ、糞ッ。俺だつて一生懸命、英語を讀んで居る積りであるに拘らず、M教師は衆生満場の中で、あんな侮辱の言葉を與へたのだ。この面當から云つてもきつと俺は立派な支那語學者になつて、M教師並びに日頃、愚弄視して居る同窓の奴等を見返してくれる。」これが、彼の支那語を専門に研究し出した動機である。

この動機から發奮したのは、彼として頗る結構なことであつたが、さてその支那語専門の學校に入學して見ると、辨髮のある舊式な支那人——時折は廊下へ出ては手涕をかむ先生に就て、チヤカ、ピン、プウ、チイ……などと云ふ言葉を習ひ始めたところ、彼も手涕をかむ階級に退化し、さうな氣持がして、大に悄氣込んでしまつた。

しかし斯うして氣乗りのしない面ながら、せつせとその學校へ通つて居つた。

「君は四聲の區別がないが、英語を讀んで居る積りなのかネ？」

或る日のこと。辨髮の支那教師が、眼を刺きながら、こんな皮肉な言葉を浴びせかけた。ここで彼は、往時、中學時代のやうに發奮の仕直しはしなかつたのである。それは、教師の侮辱から發奮することの馬鹿らしさを、熟々と感じて居たからである。

「はい、僕は今でも、英語を熱心に研究して居りますから、發音はどうしても、それに近く聞え

るかも知れません。」

「それは不可ない。支那語は四聲の區別が明瞭でないと分りません。」と、先生は口をゆがめて、不機嫌さうに叫んだ。

「はッ。」と、A君は長いものには捲れる！これ以上に辨髮先生に反抗して、肝心の學年試験に零點頂戴。もう一年間、同じ所に足踏みをさせられることは、耐らないと考へて、観念したのである。

こんな風にして、どうやらかうやらA君は、尻から二番目の成績で、世間から見ると、三ヶ年の登雪の効、空しからず、支那語學者の難として或る大きな會社へ通譯として迎へられたのだ。

七百の支那人

紺の背廣に縁なしの眼鏡、鼻下にチヨビリと刈り込んだ髷まで立てたA君は、一人前の支那語通譯らしい顔付で、その會社の椅子の一つに収まることになつた。が収まらないのは、彼の胸の内、絶えずビク／＼と、恐怖と不安に時日を消して居つた。

通譯として、聊か耳と口元が怪しいと云ふ自信があるだけ、どんな難題が飛び出して、刈り込

んだ髯の手前、縁なしの眼鏡を曇らせるやうな、ベソを掻く場面に打つからないものでもないとはら／＼して居た。

その会社には、二萬人からの支那人を使用して居たし、彼の先輩としての通譯が、何十人かが雇われて、みなそれ／＼に何でも分る支那語學者らしい態度で、氣樂さうな日を送つて居るのを見ると、一層に自分の惨めさと、あやふやな支那語の腕前に危惧の念を深くさせられるのだ。

その内に、たうとう彼が一世一代の榮ある場面が到来した。新任の支那語通譯、A君が七百名の支那労働者たちを前にして、課長の長々しい、早口な訓示を譯して聽かせなければならぬのだ。たん場である。彼は威風堂々と云ひたいのは山々であるけれど、まるで屠所に牽かれる羊か豚のやうに、元氣のない様子で、課長の後に従ひながら、大勢を見渡す、一段と高い壇上に立つたのだ。

課長が何を云ひ出すか、さつぱりと見當が着かないが、それよりは自分の譯すのが分らない場合、この水を打つたやうに静慮にして居る支那労働者たちが、どんなに騒ぎ立て、わめき立てるか、氣が氣でない。

課長は、噂に聞いた通り、流暢な言葉、いやなか／＼そんな吞氣な所ではない。憎らしい程な

早口で、べら／＼喋り出した。

彼は聽いて居る内に、何だか頭腦がボーツとなつて、課長が何を話したか、さつぱりと思ひ出せない程に、いろ／＼の事がこんがらかつて了つた。

やがて課長は、長い一節の句切りをつけてから、彼の方を振り返り、

「A君、では一つ譯して呉れ給へ！」

「はッ。」返辭はしたやうなもの。課長の今、喋べつた事だけを、日本語でもう一度繰返して見ると云はれてさへ、彼には覺束ない位であるから、何で、しかもお手並いや口並の怪しい支那語に譯せやうか。

しかし彼の前には七百の支那人、横には課長に同僚が十數人。新任通譯の試験でもする氣で控へて居る。

彼の眼前で、別にどん／＼と焚火をして居るわけではないが、嫌にボツ／＼と面が熱くほてつて來た。

「ええ僱們……うう僱們……ええと、で僱們……」彼は懸命に譯す積りで居るが、何を譯していか、分らないのであるから、口元ばかりが硬ばつて、實際しどろもどろと云ふ有様になつてゐ

た。

「A君、どうしました？ 僕があまり早口に馴れてるから、譯し難いのでせう！」
 課長も、見るに見かねて、同情のある言葉をかけて呉れたが、いくら遅く、ゆつくりと話された所が、譯し切れない事は確かである。

「どうも、まだ馴れませんものですから……」
 恐縮汗顔、大豆のやうな冷たい汗がぬらりと腋の下から横腹へ流れる。

「さうですか。ではこれはT君にお頼みませう。」

課長の一瞥で、A君はホツとして壇を下りた。

事によると、僕はお拂箱になるかも知れない。辨髪先生を馬鹿にして、尻から二番目の卒業成績の天罰は、今頃こんなにして、俺の頭に下つてきたのだ。

かう考へる下から、彼の後頭部のあたり、何の因果で、支那語の通譯になどなつたのだらうとチクリ／＼と後悔の針を刺した。

ミンバイマ先生

「A君、君はあの課長の訓示を直譯するなんて、馬鹿々々しい努力をしたもんだな。」彼と同じ學校を出た先輩のK氏は、いかにも感むやうに言つた。「あの課長は、新任の通譯が来ると、何時もあんな手でわれ／＼を試みやうとするのだ。あの人の話が譯されない事は普通で、もしも譯すことが出来たとしたならば、それこそ餘程どうかして居るのだ。何でもいい、課長が何を喋らうと構はないからその要點だけ摘んで、簡単に片附ければよかつたのさ」無造作に、K君は云つたがA君は、おど／＼した口調で、三ヶ年の支那語が、これと云つて役に立たない程に見すばらしいものである事を、繰返して零した。Kもその馬鹿正直の點に、感心したやうで、「だが君、支那語の分らない事は、さう心配にはならないぜ。今に僕のやうに横着な古強者になると、だん／＼と圖々しいことに世馴れてくるから、課長の訓示なんかはどうでも、自分でいい加減な所を喋つてやればいいのだ。どうせわれ／＼に支那語の通譯でも頼まうと云ふ輩だから、僕たちが何を喋つたつて、先生たちは譯して呉れたものと考へて居るさ。そこは彼等が尊者同然、お目出度いものだから大丈夫だ。」

A君は、このKの言葉を聽いて、空いた口が塞らない位に吃驚をしたのである。

「すると、この大きな會社の通譯の何十人かは、みんなそんな連中なのですか？」恐る／＼伺つ

てみる。

「大概は似たり寄つたり、要領のいい奴ばかりが多いのだ。」

A君は、これを聞いて、初めて大に意を安んじたのである。

「しかし、まだそんなのは上等の組さ。ひどいになると、僕と同窓のO君だ。やはり君のやうに、あの課長の手には掛つて、何か七難八苦の通譯を命じられた譯だ。そこへ行くと、先生は在學當時から圖太い事にかけては、末恐しい代物だけに、課長が早口で一節だけ喋ると、先生もそれに負けない早口で、べら／＼と譯して行つた。だが課長の云つた事なんか譯しては居られないのだ。一體、何を話したと思ふ？ 君も習つて來たらうが、例の支那語教科書を暗記して居る文句を臆面なく、立て続けに喋つたわけさ。聽いて居る澤山の支那人は、眠ばかりバチクリやるので、頗る痛快だつたよと、先生は得意さうに話して居たよ。こんなのもちと困り物だがね。けれど、課長はO君の支那語の巧なことを、後で感心して、賞めたさうだからね。」

「へえ。」A君も、何と答へていいか、やはり眠ばかりバチクリするのみだつた。

それから間もなく、再び彼に、厄介な通譯——支那労働者の賃錢値上に就いての訓示を譯することを命じられた。

今度は、彼もこの地方の支那語學者としての骨を呑み込んで居るので、かなりに流暢に、巧にべら／＼と話したので、課長と同僚を感心させたが、聽いて居る肝心の支那人はさつぱり感心をした様子がない。

彼は、二三語話しては「明白麼」(分つたか)と云ふ句を繰り返して、念を押した。

その時、それを聽いて居つた支那人たちが、後で曰く、

「あのチョンクオ語の先生は、明白麼だけが明白(分つて)で、外の事は何を喋つたのか、一向不明白(分らない)なのだ。」

それからA君は、支那人たちから明白麼先生——「分つたか先生」と云ふ別名を、蔭ながら奉られてゐる。

馬龍潭の手

雪解の太子河

雪解の太子河は水量が増して、上流にかけた高粱橋が流れ落ちたと、村人たちの騒いでゐる

頃のことである。

流は矢のやうに迅く、岩のやうな氷塊がふわり／＼と漂うて行き、渡しの船も危険なので、みな大廻りをしながら大溪湖街道の鐵橋下を越して行くのだ。

「本當に困りましたね。」

「全く！ 暖かくなつて結構ですが、また橋が落ちてしまひましてさ、それに此鐵橋下の高梁橋も御覽の通りぐら／＼して、今にも落ちさうなのですから……」

「これが落ちると、また當分は渡しが利くまで往來が出来ませんね。」

「大きな氷塊でも流れて來て一つ勢よくどしんと衝突したならば、一耐りもなくこの橋も落ちてしまふでせうよ。」

危ふげな高梁橋を積み重ねた土橋、河の上下流數里の間、唯一つ殘されたそのぐらつく橋を渡る人たちは、こんな話を繰返した。

そこは山峽の町、摺鉢の底と同じ本溪湖を貫流する北滿一の大河——遼河の支流、河幅の廣い所では、毎年今頃に繰返される年中行事の災難である。

去年の十月頃から降り積む雪が消えて、黒い地肌が見え出した峯雪は、四方からその町に迫る

やうに聳えてゐるが、輝く空を劃つて、何所か暖かい大氣が育まれてゐる感じがして、すべての人を爽快な氣分にするのだ。

道を行くのに、重い毛皮の外套も、耳覆も、猫毛の帽子も要らなくなり、何所の家でも、窓の目張りの紙をはがして、二重のガラス戸を外へ開き、すが／＼しい外氣を内へ導き入れる。そして、遭ふ人たちは各自に、過ぎた冬の寒かつたことを繰言のやうに云ふ。

「本當に近年にない寒さでしたが、もう大丈夫でせう。」

「何しろ四月ですからね。祖國ならば櫻花が咲かうと云ふ好い氣候ですのに、夜分は未だ暖爐が戀しいのですから遣り切れません。」

「此分ですと、今年は城廠方面の上流から筏の下るのが遅れるらしいですね。」

「例年に較べて、流れてくる氷塊の模様では、十日位は遅くなるだらうと云ふことです。」
町には櫓の影が無くなつて、四五頭もの驢馬の引く荷車の往來が繁くなる。

その間を縫ふやうに、いろ／＼の物賣りや路傍の床屋が稼業道具を擔いで、姿を現はしてくる。そしてカンラン、カンランと、晴れた空に透き通る鈴の音を轉がしながら、絃子と云ふ桿の長い三味線のやうな樂器を背負つた眼盲ひた四十年配の男が、九つか十位の女の子に手を引かせなが

ら、稼ぎ時の夏の近づくの喜ぶ風に、何所からともなく戸別に流して行く。

「絃子彈きの盲目が遣つて来ましたから、いよ／＼もう大丈夫でさあ。」

「あれが見えると、本當の春が来るのだ。」

或る支那人は、こんな風に語つてゐた。

物騒な噂

太子河の兩岸、一面にはびこつた猫柳の芽が淡紅色に膨らんで、陽光に美しく滲んで見える頃となつた。

丁度その年は、のんびりとした春を亂すやうに、巷から巷へ物騒な噂が傳はつた。そして遠雷の轟くやうな砲聲が遠く近く、この町へと響いて来た。

「又馬賊を威嚇する空砲を放つて居りますよ。あんな所爲をしても何にもならないのに馬鹿々々しい事です。」と、親しい間柄である劉漢英君は其町を見晴す山の中腹にあつた私の家からガラス窓越しに、音のする河原を眺めながら云つた。

「近くに馬賊でも来て居るのですかい？」

「ええ。」と、此方を振り向いた彼は「四五日前の未明に、柳家莊の全村を襲つた馬賊の一團で黄四懶王の配下四百名程が、あれ、あの向ふに高く聳えて居る山があるでせう？」と誘ふやうに、再び家へ眼を移しながら指示して「あの歪頭山の向ふに屯してゐるのです。」

「どうして、支那の官憲は追ひ拂ふことが出来ないのですか。」

「駄目です！」と劉君は、頭を強く横に振つて「支那の兵士や巡査などは、てんで役に立ちませんや。馬賊の方が生命がけであるだけに、強い位です。兵士と巡査と乞食は、支那で最下級の人間ですからね。」

「ほう！名譽ある軍人が？」

「お國とは比較になりません。怠け者で意氣地のない人間は乞食になるし、少し體裁家が兵士と巡査になる遠ひだけで、曲つた釘と兵士と云はれる位で、殊に軍人には碌な者がありません。ですから村から兵士や巡査が出てゐると、恥としか思つて居りません。」

彼は尙も語を繼いで、

「晝夜の區別なく、あゝして空砲を打つてゐるのも、つまり馬賊たちを威嚇するよりは、自分たちが恐いからですよ。つい眼と鼻の先に彼等があるのが知れて居りながら、どうする事も出来な

いで見てゐるのですから……。最近この本溪湖の町を襲ふと云ふので、一層ビクビクものです。僅か四百足らずの烏合の馬賊、それ程に恐怖するにも當りますまいが、月給六圓の雇兵や巡査では、幾ら怠け者でも、生命を差し出すには、餘りに安過ぎるからでせう。は、は、は」と、聲高に笑つた。

風の無い、ぼか／＼した暖かい晝過で、ドーン／＼と響く大砲の音にも、間近でそんな戦争でも起りさうな氣配がなく、何となく眠氣を催すやうに聞えてくる。

「實際に、この近くで戦争でも始めますかね？」私も幾らかは不安も手傳つて、訊ねて見た。

「さあ。」と、彼は思案するらしく「大抵はものになりますまい。がそれよりは面白い話があります！」と、彼は私の向ひへ来て、火鉢を中に對坐して語り出した――

馬賊からの脅迫状

「黃四懶王の名義で、この町の商務總會、つまり大きな商工業者組合へ向け、明日夕刻までに、歪頭山麓まで三十萬兩を持つてこいと云ふ通牒が、昨日馬賊の使者に依つて、組合事務所へ届けられたのでした、そして、若し三日以内にその所要の金額を拵へて来ないと、本溪湖の町を焼き

拂ひ、大舉して襲撃をすると云ふ脅迫状です。世の中にこんな不都合な話は何所にありますか。」

劉君は頗る憤慨に耐へない口調で、

「更に官憲を馬鹿にしてゐる通牒は、この町を守備する大隊へ向け、銃器彈藥を供給しろと云ふ申し込みださうです。お前たちの生命が大切ならば、即刻引渡したらどうかと云ふ譯で、大隊長は激昂して、九連城に駐屯する師團司令部、馬龍潭將軍へ援兵を請願し、彼等を剿討して呉れると、いきまいて居りますが、その實、頼りない事は此の上なのです。しかし二三日内には馬將軍の部下師團の兵も、ここへ到着の筈ださうですから、或は一戦位は交へるかも知れませんが、縣衙門――縣廳の騒ぎは、外の見る眼も氣の毒な程です。その衙門の周圍は、馬賊に襲はれるものと覺悟したと見え、城壁のやうに高い石垣を嚴重に築いてしまひ、往來からは到る所に銃口の孔が見えるだけで、今からもう籠城の積りらしく出入りは嚴禁されてしまひました。昨日、黃四懶王から三十萬兩の脅迫状が舞込んでゐるので、商務總會の重立つた人たちが連立ち、どうしたものであらうかと、縣衙門に知事殿を訪問し、その善後策を相談した所が、知事の言つたのは「沒法子」の一語だけであつて、別に他の言葉を云はないのです。此「沒法子」と云ふ言葉程都合のいい言葉は他にあるまいと思はれます。それは「仕方がない」と云ふ譯ですが、あらゆる

暖昧な態度を表示する場合に、支那人はこの言葉を使ふのであります。しかし彼等も平素使ひ馴れてゐる「没法子」ではあるが、此場合どう云ふ意味にとつていいのか「没法子がどう没法子なのか」と、突込んで詰問したが、知事どのは「仕方がないのは仕方がない」の一點張りで、此度は商務總會の連中が異口同音に、

「知事大人説没法子是没法子」だと、匙を投げたさうです。

「知事どこの云ふ仕方がないが仕方がないのだ。」と云ふ意味ですが、彼等は焦眉の急に迫つて、没法子（仕方がない）で馬賊へ三十萬兩を拵へてやるか、或はそんな脅迫状を寄越す馬賊が没法子（仕方がない）のか、何時までも迷つてゐる場合でないと、兎に角知事どこの臆病に呆れ返りながら、彼等は町中の商工業者へ、馬賊へ献納する負擔額を割當てて、持參する事になつたのでした。

偉大な手

劉漢英が話したその事を思ひ出しながら、私は、その日の午後、山を下つて外出して見た。と云ふのは、そんな模様では、定めし城内も村も大騒ぎをしてゐるであらうと考へたからである。

所が、街は案外、何時もと變りがない。郊外へ行くと、農夫たちは暖かい陽光に浴しながら、霜解の畑を驢馬に鋤を牽かせて、のつたり／＼と耕してゐる。

掘起した土塊や高粱の切株のうづ高く積んだ側で、年老いた農夫は蹲みながら長い煙管で葉煙草を甘さうに吸つて居る。此所まで馬賊を威嚇する空砲の音がドーン／＼と、間を置いて遠く響いてくるのだ。老農夫は一向平氣なもので、腰にさげた汚い袋から煙草を出して、掌でモミクチャに潰してはすばり／＼と吸つて居る。

畑や土塊からのぼる陽炎と紛ふ白い煙草の煙が、空に溶け込むやうに眞直ぐに上つては消えて行く。

「爺さん馬賊と戦争があるさうだね。」と、私は訊ねた。

「さうかね。」と無關心である。

「あの大砲の音が聞えるだらう！」

「ああ、昨日から打つてるやうだね。」と一向氣にも留めぬ。

「戦争が始まつたら、困るだらうが……」

「さうだね。俺が村の入口にも、昨日から馬賊の首が曝しものになつてるだが、兵隊さんが手功

顔にあんなものを曝されるのは困るよ。本當に馬賊の首だかどうか判りもしねえのを、あんな所爲をされるので、女や子供が恐がつて仕方がねえ。」老農夫は意外な不平を漏した。

その時、私の勤めて居つた會社の支那給仕が迎ひに来て、

「九連城から馬賊討伐に來た馬龍潭將軍が挨拶に見えて居るから、直ぐに來て呉れ。」と云ふ社長
の意を傳へて來た。

馬賊上りと云はれる將軍の風貌を心に描きながら、私は樂しみにして會社へ行くと、警衛門の張通譯の紹介で、これが馬龍潭將軍であると引合された。そこには、五十の上を越した魁偉な體軀の持主である。銀鼠色の支那普通服に瓜帽を冠つた老人が柔和な眼を向けてゐたが、通譯の言葉が終るや否や立ち上つて、つか／＼私に近より堅く握手した。偉大な手!! しびれる程に強く握つた彼の握力!

「久仰久仰(久しく御高名は拜聴して居ります)」と、私は型の如き常套語を云つた。馬將軍は微笑を浮かべながら、軽く一二度首肯して何事か二こと三こと話した。

直ぐと社長と並んで出て行く彼の後姿、それはドアの口一ぱいに廣つてゐるやうに思はれた。

と私の頭脳には、直ぐと彼の偉大なる手が聯想された。

毎年、四月が廻つてくる度に、新しく思ひ返されるのは馬龍潭將軍の偉大なる手である。

支那で大統領になつた疊屋の芳公

闇黒の街に大音響

高粱はすく／＼と伸びて、大人の背をかくす位に高く、見渡す限り涯のない畑は、一面大海原のやう、綠葉茂くざわ／＼と波立つてゐた。それは午少し過ぎから吹き出た強い風に、鈴なりについた高粱の實が、さも重さうに首垂れた頸をふるからである。

「今年は素晴らしい豊作ぢやないか?」

「へい、八月上旬にこの實の入りやうぢやア、近年にねえ出來ですよ。」と、案内に立つた支那人——土地の百姓らしい男はホク／＼と嬉しさに答へた。

私たち一行三人、他に件の案内者、眞夏の暑い日を選んで、橋頭から平頂山を越え、物好きなき三日の旅をして、今しも丁度、本溪湖の町を眼下に、遙か東に開ける太子河曠原を見晴す駱駝山

頂の樹蔭に憩ひながら、こんな話を交してゐた。

「陽のあるうちは、とても暑くてやり切れないから、ここで暫く休んで、日が暮れてからポツポツと歩き出さうぢやないか。」

「さうだ！ もうここまで来れば家へ着いたも同じことだし、宵月はある、それに日の暮れるのも間もなからうから、夜道にしやう。」

焼け爛れるやうな西日を避けて、私たちは樹蔭から樹蔭と、なるたけ涼しさうな場所を探しては、草いきれに蒸されながら休んでゐた。

「濡れ鼠になつてもいいから、一雨さつと来てくれるといいがな。」

「あの空の焼け工合では、當分雨なんか降りつこはない。」

「喉が渴いてやりきれないが、そこらに西瓜か甜瓜でもないだらうか？」

「簀澤を云ふな。水筒の水を飲んだらいいぢやないか！」

「いや、それが水どころか、生温い湯のやうになつて居るので、却つて氣持が悪く。」

「では、この支那人が胡瓜を三四本持つてゐたやうだ。それでも分けて貰つて、嚙つたらいいだらう！」

「胡瓜を！」と、一寸躊躇つたやうだが、

「嫌に青くさいなあ。」と、何時か各自にガリ／＼とそれを嚙り出してゐた。

冷い水分を持つてゐるものならば、少し位はどうあらうと、そんな事に構つてゐられなかつたのだ。

私たちが、そこで勝手なことを話し合つて居るうちに、陽は西に落ちて、残映紅く、吹く風も幾らか涼味を帯びて来た。

「それではポツ／＼と出掛けやうか。」と、一行は山の背を渡りながら、だら／＼と樂な下り路を進んだ。涼しくなると急に元氣づいて、談笑の聲も軽くはづんだ。

日がとつぷりと暮れても、宵月と星明りで路は眼をとちて居ても歩けやうと云ふ位であつた。

丁度夜の九時近く、電燈の光がちら／＼と美しく撒き散したやうに輝いてゐる本溪湖の街への下り口の、小高い丘の上に立つた。と、その時、急にどうした譯か、そのキラ／＼と輝いてゐた街の電燈が一時にぱつと消えてしまつた。

今が今まで綺麗に、明るく輝いてゐた大きな街は、まるで水の底の塊のやうに黒く、薄い宵月の下に曝されて、何とも云へぬ凄惨な氣が惻々と身に迫るのを覺えた。

「どうしたのだ？ 停電だらうか？」

「さあ、さうかも知れんな。」

その時である！

街を震はして、私たちの脚下も崩れるかと思ふ程の轟然たる一大音響！ 引續きゆらくと地響きを傳へる大音響が二度、三度と繰返され、何處ともなく、眼下にうづくまる暗闇な街から、「わあッ」と云ふ大喚聲が湧起つたのだ。

「やッ！ あれは何だ？」

私たちは本當に色を失つた。

「先刻からの音は餘程強烈な爆裂弾の破裂だが、今の喚聲と云ひ、街に何か變つたことでも起つたのかも知れないぞ。」

その中に、暗の街のあちこちに、スツ／＼とマツチを擦るやうな細い光が流れて、豆をいるやうな小銃の音が到る所に起つた。そして時折、「わあッ／＼」と喚聲が揚る。街はまるで大きな怪物でも／＼と持上つてくるやうに物凄い力を帯びてゐた。

私たちは家のことが第一に心配になつた。暗闇の街にいかなることが起らうと、私たちの家へ

通りつかねばならぬと、お互に口には出さぬが、心を決めたのである。

私たち三人は一散にその丘を駈下りる。

それは今から丁度十三年前、大正二年の本溪湖革命、たつた四人の日本人によつて、縣城が完全に占領された晩のことである。

眼の前に銃劍の光

その丘はゆるやかな勾配で、だら／＼と城跡の外、街はづれへと延びてゐた。

丁度半ぐらゐを駈下りた時、麓の方からがや／＼と馳上つてくる人影がある。私たちは無言で立止り、宵月の光にそれを透して見た。

彼等がだん／＼と近寄つてくるのを待つと、それは街の支那人達で、兒を背負つた女、籠を抱へた老人、大きな風呂敷包を重さうに背負つた若者など、その姿はとり／＼であるが、何れも激しい恐怖と狼狽に度を失つて、避難するのであると云ふことは一目で判つた。

後から後からと丘を目がけて續く、入亂れた避難民の列。どこか田舎へでも遁げて行くらしいのである。

「もし、街に何か起つたのですかい？」と、私の前を走り過ぎる若者を捉へて訊ねかけた。
 「へい、打仗です！」と、云ひ捨てる姿は、早くも二三間上へ、列に紛れ込んでしまつた。
 「戦争だ。」と云ふのである。

「もし、どこと戦争なのですか？」と、すぐ前を遁げて行く男を捉へ、迷惑さうにしてゐるのを、無理に押へつけて訊いた。

「革命黨の戦争ですよ。」と、早口に云ひすてたその支那人の顔。

「ヤツ、お前は韓ぢやないか！」

それは事務所に使つてゐるボーイの韓であつた。

「どうしたのだ！ さつぱりと様子が別らないで困つてゐるが、何が起つたのだね？」

「地獄で佛」と云ふことがあるが、この場合彼に出逢つたことは、どんなに嬉しかつたか知れなかつた。

暗の街にはあちこちで、相變らず小銃の音と爆弾の炸裂する響が反響するやうに聞えてゐた。

「何だか詳しいことは判りませんが、滿洲獨立共和國を建てる爲に、今夜の九時を合圖に、一齊に火の手を揚げたのださうです。街中は物騒で歩けませんから、貴方がたは街の外を廻つて、お

宅へ歸つた方が宜しうございます。こんな夜は巡警や兵士の掠奪と一緒に、馬賊なども入り込んで居ります。それに監獄を破壊し、囚人全部を街へ解放したさうですから、そいつ等が思ふままに暴れ廻るでせうよ。ぐづ／＼してゐて間違ひでもあつては詰りませんから、早くお宅へお歸りになつた方がよろこびます。」

韓も落ちつかぬ態度で、そは／＼してゐる。

「君はこれから何所へ行くのだね？」

「家のことも心配になりますし、富家娘子へ歸るのです。」

「知縣衙門や軍隊はどうしたのだ？」

「お國の軍隊のことは知りませんが、知縣衙門は最先に爆弾で破壊してしまひました。知事などは死んだか生きたか判りませんが、逃げ足の早い人たちですから、大方どこかへ落ちのびてゐるでせう。支那軍隊は何の役にも立ちませんよ。今では却つて革命黨の御用を勤めてゐるかも知れません。」

「さうか、有難う！ では氣をつけて行き給へ。」と、私は、その夜の事件の大體が判つたので、彼に別れの言葉を送つた。

私たち三人は、彼の云ふ通り、街を突きぬけて歸ることの危険を知つたので、遠廻りではあるが、郊外を廻つて歸る事にした。どこともなく揚る物凄しい喚聲、小銃の音、爆弾の響、犬の吠え、猛る聲が、たえ間なく聞えて、大通りから小路へ、暗を縫つて逃げ惑ふ避難民の影が、いかにも物哀れに見える。

この邊は平生だと、郊外としても繁華な、飲食店などが軒を並べて、たゞ／＼してゐる所であるのに、ひっそり閑として、どこの家にも人の氣配が感じられない。宵月の光に照し出された暗黒な街並は、皆がどこかへ遁去つた跡と見えて、時折うろつく怪しい人影を見るばかり、廢屋のやうに薄氣味の悪い淋しさを漂はしてゐる。そこをスタ／＼と歩いて行く私たちの足音が、いやに冴返つて聞えるのであつた。

「みんな遁げてしまつたと見えるな。」と、友の一人は沈んだ聲で云つた。

「この町を突切つて見やうぢやないか？」

「さあ大丈夫かね？」と、私は幾ら町端れとは云へ、城内に入つてを躊躇した。しかしそこを抜けると家へ戻るには大層近道であつたので、多少の不安はありながらも、その暗い横丁へ折れて入つた。

「站住了」と云ふ鋭い叫び聲と一緒に、突如に眼先へ、銃劍のギラ／＼輝く尖が七八本、闇から飛び出した巡警らしい服装の男共が突きつけたのだ。

私たちは云はれるままに立止つた。

「何所から何所へ行く？」

誤解されないやうに、私たちはすつかりと身の上から行先までも語つた。

「宜しい！」と云ふ許し。日本人と見て幾らか寛大な扱ひをして呉れる。が、それから幾度も、町角へくる毎にギラ／＼光る銃劍のお見舞と、「站住了(止れ)」を喰つた。

金モールの威容

眠れない、不安なその夜は明けた。朝からその日の暑さを思はせる様な太陽の輝き、夜通し聞えてゐた。あの凄しい喚聲や小銃の音は、ケロリと忘れた様に止んだ。

そこへ、疊屋の小僧である清吉と云ふ十四になる男の子が、勢よく飛込んで来て、「知縣衙門へ行つて見やう！家の芳公が素晴しく豪くなつてゐるぜ」と云つた。

「芳公がどうしたのだ？」私は、彼に訊き返した。

「それでは未だ知らないのだね！ 昨夜の革命は家の芳公なんかで行つたんだ。」

「何ッ？ 芳公が革命を！」私には思はず噴き出しさうになつた。と云ふのは、事務所裏で、社宅の畳を縫つてゐるむつくりと肥えた無口な二十七位の男、圓々とした無邪氣な眼をした彼を思ひ出したからだ。然しそれは本當だつた。

畳屋の職人である芳公が首謀となつて、それに浪人者が三人、たつた四人で、知縣衙門へ爆弾を投じたのを合圖に、かねて喋し合せた炭坑の苦力二千餘人を俄か兵士に仕立てあげて、衙門を占領し、警察廳長を監禁し、囚人を解放して、街の人心を動搖させると共に、頗る手際よく戒嚴令を布いた。そこに駐屯してゐた支那軍隊や巡警は、一も二もなく彼の手に降つて、思ふがままに動くやうになつたのである。

滿洲獨立共和國建設の宣言布告は、一夜の中に街の辻々に新聞紙大の紅紙で堂々と貼り出され兎に角、それから僅かの間ではあつたが、房總半島の三倍もの大きさのあらうと云ふ本溪縣に、畳屋の職人の芳公が大統領として君臨したわけであつた。もし日本官憲からの干渉と壓迫が加はらなかつたならば、彼は日の出の勢で、どのやうに變轉しないとも判らなかつたのである。

清吉は言葉をついで、

「昨夜はね、兵士がみんな炭坑の苦力で、鐵砲の持ち方一つ知らず、町角へ立つても自分が恐いものだから、人の影さへ見ると、矢鱈にボン／＼と打つたのだつてさ。だが家の芳公は豪いや。親方が夜明方に縣廳へ行つてみると、金モールがピカ／＼と澤山ついた立派な洋服を着て威張つてたさうだよ。芳公が豪くなれば、俺も畳屋なんかは廢めてしまふのだ」と、彼も素晴らしい鼻呼吸で話した。

「では一緒に、芳公の豪くなつた所を見に出かけやうか。」

私は清吉と共に街の衙門へと、そよ／＼と面を撫でる朝風の中を出かけて行つた。

「それに芳公は、街の商務總會へ、今日中に二百萬元の軍資金の調達を命じたのだつてさ。」

昨夜の名残を留めるやうに町のあちこちに、無慙に血に染んだ死體が幾つともなく、ごろ／＼と路上に打ちすててあつた。そしてその路を右に左に、五騎十騎ぐらゐづつ、巡警や兵士が物々しく走り過ぎてゐた。

黄海で海賊に遭つた話

出船にケチ

北支那としては、珍しく豪雨の降つた七月末の或る日のことである。

この年は、二十年來とか、三十年來の雨であると云はれただけ、梅雨に入つてから引續き晴れる日とは數へる程で、毎日のやうに本當によく降つた。

私とA警部とは、降込められた大連の宿屋で、そこから北東、三十餘里の海岸積きにある鏡子窩と云ふ街へ旅をする積りで、雨のあがるのを待つた。

唯一の交通機關である自動車は、その途中にある河が氾濫して、橋を流してしまひ、それにこの雨で道路を滅茶々に破壊したので、當分は運轉休止であるといふわけだ。さうかと云つて、支那馬車は無論駄目だし、海から行くとすれば、半月目にたつた一遍、鶴丸と云ふ百八十噸許りのボロ汽船が出るが、それに乗つて行くにしても、未だ一週間の日數があつた。

「Aさん、何うしたものでせうか？ のんびんだらりと此所で汽船の出帆を待つて居るのも馬鹿

氣て居るし、一つ思ひ切つて、ジャンクで出掛けてみては！」

私の意見に、Aも賛成し、黄海の荒波をジャンクで行く冒險を試みる事になつた。

そこで私は早速宿屋を出て、横しぶきに瀝々雨脚の中をレインコートの下までも濡る程にすぶ濡れとなつて、舊ロシア埠頭の方へ鏡子窩行のジャンクを探しに出かけたのである。

そこは、それらの集合區域とされて居るだけ、帆柱の林立した下に、薄黒い汚い色をしたジャンクが押し合ひながら岸から海一面に固まつて居る。岸に立つて幾ら聲をかけても、どこからも人の頭一つ見えないで、にぶい銀色に光る雨の海に、幾十もの黒い船が曝し物のやうにヒツソリ閑として居る。

それから小半時。街から歸つたらしい船頭風の支那人を捕まへた私は、彼から明朝鏡子窩へ行くジャンクのあることを知つた。

翌る朝になると、よい按配に、曇つた空から薄陽が射して、久し振りに雨があがつた。

A警部と私とは、幸にも、便船に乗せて貰ふことに、前の日に話を定めて置いたので、舊ロシア埠頭から、そのジャンクへと乗込んだ。

それはさう大きいものではないが、船頭が四人、主にメリケン粉の袋と雜貨とを積んで居る。

そして、私たちと同じに乗船させて貰った商人風の若い支那人が二人と、山東者らしい三十年配の苦力が一人居た。

朝から風は死んで居て、うす曇りの空合であつたが、風が出次第に何時出帆するか判らないジャンクのことであるから、支那の同船客などは前の晩から乗込んで居たのだとの事だ。

雲の切れ目から少しの蒼空が見えて、薄陽が漏れるやうになつた晝近く、そよ／＼と入江に漣が立つて、舷側を打つ水の音が微かに聞えて来た。

「おう、寒の定、南風になつたぞ。この空合ちや強く吹くかも知れない。」

舷に立つて、空を仰いでゐた船主らしい老船頭は、誰に云ふともなく叫んだ。

「親方直ぐに出しますかね？」若い船頭は艫の方から聲をかけた。

「さうよなア、直ぐ出る支度をしたらい。だが少しかふるかも知れねえから、荷物に蔽ひを敷いて置け。」

船主の命令に、三人の若い船頭は私たちの側の艫から腰をあげて、船内を身軽にあちこちと飛び廻りながら、浪をかぶつた時の用心をして居た。

「この船で浪をうけた日には、僕たちは濡貝で、遣り切れまい。」

A 警部は、不安らしい眼を私に向けた。

「ジャンクは滅多に沈みませんよ。帆さへ下して居れば、幾ら大浪を喰つてもなか／＼沈没しなうさうですよ。」

「何にしても荷を積込み過ぎたせゐか、舷が水とすれ／＼のやうな気がしますね。」

この時、艫の方の若い船頭がが／＼と何やら烈しく罵る聲が聞えた。

「何うしたのです？」

「さア……」私は立上つて、メリケン袋の積んである側を通つて、艫の方へ行つて見た。

「……お前さんたちには下りて貰ひたい。昨夜から縁起でもねえ所爲ばかりされるので、出船にケチがついて仕方がねえ。」

「へえ、どうも全く済みませんでした。」と、若い船頭の前でべ／＼と辭儀を繰返して居るのは同船して居る商人風の若い支那人。

「済むも済まねえもねえが、本當に困つてしまふよ。親方だつて、大變に氣持を悪くして居るぜ。」と、ぶり／＼と腹立ち聲で呶鳴りつけて居る。

「何うしたんだ？」私は嘴を容れた。

「なあにね！ 舳で今、この人が小便をしたのです。他の事と違つて、出船の舳でそんな所爲をされては縁起でもねえ。碌なことはありませんや。舳で小便すると、船火事に遭ふと云ふ位に忌嫌つてゐるのに、昨夜は昨夜で、茶椀に御飯のテコ盛りでさア。俺たちの仲間で飯のテコ盛りをして出船すると、難船するとさへ云つてゐます。それに未だよくねえ事は、飯を食つてしまつてから、茶椀の上へ箸を二本並べて置いたのです。これを見て、親方も氣を悪くしましたし、俺たちだつて、好い氣持はしません。」

若い船頭は、洗ひさらひに、昨夜からの不平と憤りを投げつける調子で、斯う私に語つた。

「それが……その……少しも知らないことでございまして、本當に申しわけがございません。」と若い商人は切りと詫びた。

「まア、さう怒つたつて仕方がない！ この人も知らないで爲た事だし、さうかついでみても何にもならないよ。」

「それは、おつしやる通りですが、仲間が一番に忌み嫌ふことばかり、この人は出船間際にしてみせるのですからね。第一、茶椀の上へ箸を並べて置くのなどは、暗礁に乗りあげる前兆だと云つてますからね。そして今日は今日で、舳で小便をするのだ。」

何時までも止めさうもなく、繰返して激語をならべた。

迷信と云へばそれまでであるが、海に生活する彼等のことではあり、殊に支那の船頭たちが一寸したことをいろ／＼と氣にしてかつく話は前から耳にして居たが、かうまで激しいとは思ひも寄らない。

「今度は屹度碌なことアねえぞ。」

その若い船頭は、いま／＼しさうに若い商人へ最後の怒りを叩きつけると、するりと積荷の上へ身を躍らせて働いて居た。

それから彼は他の船頭たちと、その怒りの餘沫でもあるらしい話を、大聲に嘔鳴り散らすやうに語り合つてゐた。

怪しい黒點

私たちを乗せたジャンクは、舊ロシア埠頭を離れて、船と船との間をす／＼と巧みに抜けながら、広い大連灣口へと出た。

キリ／＼と云ふ車のきしる響と一緒に、三本の柱には縫目だらけな、汚い大きな帆が引きあげ

られ、船を東へ、緑の色に包まれた柳樹屯の村を左に眺めながら、少し強く吹出した南風を一杯に孕んで、漣立つた波の面を突切つて進んだ。矢のやうな迅さと云ふほどではないが、かなり痛快な走り方である。

灣口近くに、眞黒な、威壓するやうな影を落して投錨して居る米國軍艦二隻の間を通りぬけてから、左手に高く低く起伏する連峯。

落峯の影を縫ふやうに、岸近く、帆に風を受けて走つて行く。降りつづく雨にぬれた海岸は、黒い砂地に續いて起る緑の丘。その間に點在する家などが、移り行く船から、美しく輝いて眺められた。

灣を出外れると、舷を洗ふ大うねりな波の音が高々と聞えた。船頭たちは、かうなると樂なものである。舷に舵を握る男が一人、他の者共はてんでに勝手な所爲をして居た。

船主の老船頭は、私たちの側へ来て、いろ／＼と話しかけた。

「直ぐその……」と、老船頭は顎で沖の方を指しながら「海洋島附近では、この間、東洋捕鯨會社の船が、鯨を五十三頭捕獲したさうです。豪い金高ですなア。」

「ほうー」この附近には鯨がそんなに居るのかえ？」とA警部は訊返した。

「年に依つては馬鹿に捕れる時があります。陸では雨で洪水の苦しみだと云ふに、海では鯨の大漁。人間の世界は何が何だかさっぱり判りません。もしも神さまがお出でなら、もう少し依故最良なしにして貰ひたいものです。僕たちの社會だつて、今日なんかは本當に氣樂ですが、暴風でも喰つたら悲惨なものです。この海だつて、今日ぐらゐの風ならば大したこともありませんが、兎に角、外海ですから、少しかぶるやうになると、豪い大きな浪が出てきます。」

「今のところ、陸が見えるから心丈夫だが、黄海をジャンクで行くと考へると、餘りいい氣持はしないな。」とA警部は、どこまでも不安の意をほのめかした。

彼等と雑談して居る中に、船は何時か陸地を四五海里離れた沖合へと出された。雲切れのした蒼空には、風が吹き出ると共に、珍しい晴間をみせて、陽光の面さへ現れたのである。

「久しぶりに晴れたな。」

老船頭は元氣な聲で快活に云つた。

大連港を出てから三時間ぐらゐは走つたであらうか？ 遙か遠くに陸地がうつすりと黒く見える。船は今七八里の沖合を走つて居る。

カラリと晴れ上つた沖の方、白く散る浪頭の間には、ボツ、と黒い一點が見えた。

「あれは島かね？」私は側の老船頭にそれを指示して訊ねた。

「いや、船だ。」船頭の眼には、それが明白と判るらしく、強く云ひ切った。

「汽船かね？」

「ジャンクらしいな。煙があがらぬ所をみると、この船と同じものだ。」

それから小半刻は過ぎた。老船頭が云つた通り、その黒點はジャンクであつてかなり大きなものらしく、私たちの船と二三町の距離を置いて、同じ方向へ併行して走り始めた。

「親方!! 親方!!」

舳に居つた若い船頭の一人は、普通ならぬ様子で、顔色を變へて、私たちの側へ飛んで来てか

「あの船は可怪しいですぞ。」と云つた。

「うむ。」

老船頭は、チツとその船の方を見つめてゐたが、急に狼狽した色をみせて立上り、

「舵を西へ! 陸へと突走れ!」

彼は今までの落ちつきを亂した、異様な響きを帯びた聲で叫んだ。

ギリリ、ギツと帆の急轉する音と共に、私たちの船は急速度で、舳を陸地へ向けて走り出した。と、向ふの船も同じく方向を轉じて、刻一刻にその影は黒く、大きく、私たちの船へ迫つて来た。

日の暮れるまでには、まだ幾らかの間があらうが、陽は既に西に落ちてしまつたので、残映の紅い光を浴びながら、向ふの船の上に十數人の男の黒い影! がや／＼と聲高く、動いて居る姿が、今ははつきりと判る位に近寄つたのだ。そして陸地までは、まだどうしても五六海里はあらう。

船と船とは二十間近くに迫つた。急に向ふの船からは、私たちを威嚇するやうに、パチ／＼と小銃を打ち始めた。

一萬圓の紙幣袋

どしんと激しい震動と一緒に、私たちの船はゆら／＼とした。Aも私も、メリケン粉の袋の陰に打伏して、ひゆう／＼と風を切つて飛んで行く頭上の彈丸に、絶えず首を縮めた。

急にどか／＼と入亂れた聲音が、耳元近くに聞えたので、身を起してみると、そこにはもう十

数人の見馴れぬ支那人が居た。彼等は何やらわめき立てながら、向ふの船から飛移つて來たらし、みな各自に拳銃や刃先の太い肉切刀の様なものを威嚇するやうに手に握んで、チリ／＼と近寄つた。

「東洋鬼(日本人を罵ること)……」と云ふ言葉だけが私の耳に入つたが、餘程不安と恐怖に顛倒して居つたと見え、他の言葉は何やら明瞭と判らなかつた。中で、巡警の古服を着て居るのが、私の側にづか／＼と遣つて來て、

「お前たち二人は衙門(役所)の者か？」と訊ねた。

「さうだ。」と、答へると、直ぐ矢繼早に、

「俺たちの捜査を手傳ひに行くのだらう。」と、憎惡の瞳を輝かして、嘲笑する風に云つた。

「さうぢやない。籠子窩の土地調査に出かけるものだ。」

「さうか。そんなら今日は許してやる。」

くると背中を此方に向けて、仲間たちに何やらをほそ／＼と命じた。その時艦の方で、悲鳴に似た泣聲があがつて、烈しい怒罵の叫びが耳を刺すやうに聞えて來た。

「……お前たちは籠子窩の福順錢莊の店員に違ひなからう。大連から現銀二萬元の奉天票を送

るのを知つて、わざ／＼とこの船をつけて居つたのだ。」

「ぐづ／＼して居ると、海へ叩き込んでしまふぞ。出してしまへ。出してしまへばいいのだ。」

賊たちはしきりと、私たちと同船して居る若い店員風の男二人を押へつけ、責めつけて嘔鳴り立てて居た。

その中、脅迫された船頭の一人が、その店員の荷物の所在を白状したので、賊たちは三四人で目星をつけて來た紙幣袋をば、自分たちの船へと運び込んでしまつた。

その店員たちの烈しい泣聲と共に、くど／＼と何やら訴へるらしい蚊細い聲が聞えて居つたがその間に店員の荷物ばかりでなく、彼等は手別けして、私たちの手荷物までも、すつかり内部を調べてゐたのだ。

どか／＼と再び七八人の賊たちが、私とA警部の側へ引返してきて、突然手を下して、爲すままに任せて觀念して居るのをいい事にして身内を探し始めた。服のポケットからあらゆる物を引きずり出して、一々綿密に擴げて居る。

そこへ、先刻の巡警服の男がつか／＼と戻つて來て、烈しく彼等を叱りつけた。ハツとしたやうに、一同は私たちから手を引いて、こそ／＼と自分たちの船へと戻つて行つた。

その巡警服の男は、私たちの前に突立つて、大風な口調で、

「お前たちも俸給を貰つて、衙門に勤めて居るのだらう。これからもある事だが、金の爲に、生命までも捨てぬやうに氣をつけるがよいと、歸つたら、お前たちの上官に話してくれ。俺たちの仕事の邪魔をして、餘りやかましくすると、近い中にお前たちの役所を襲撃するからな。いか、よくさう云つてくれ！」さう云捨てると、彼はのつそりとした態度で、向ふの船へ移つた。

賊たちが、私たちの船へ飛乗つてきてから引きあげるまで、僅か二十分に足らない間に、素早い行動でメリケン粉の袋や雑貨などが、かなり移し運ばれて居た。

船頭は勿論、手出しすることが出来なかつたが、私とAの財布も、ポケットなどを探すままに任して居るうち、何奴かに持つて行かれてしまつたのだ。賊の船でキリキリと帆のまき上る音がすると、二間、三間……五間と、漸々と夕霧の濃く漂ふ沖の方へ、はた／＼とはためく帆音高く人影もそれと分らない程に離れて行く。私達の船の艦の方で、急にわあつと裂け破れたやうな、大きな泣聲が聞えてきた。主人の金、二萬元を奪ひ去られた兩替屋の店員二人が、賊の船が隔つて見えなくなると、今更のやうに、悲しさを新たに増したのであらう。私とA警部とは、引入れられるやうなその泣聲に、面を見合せながら、ホツと淋しい嘆息を吐いた。そして薄墨色の沖合

へ溶込むやうに走り去つて行く海賊船の影を、チツと見守つて居た。

支那故事小話集

太公望と鯰釣り

四百餘州の大國だけに、さすがに國民もゆつたりとした所が見える支那人は、魚を釣るのに釣を用ゐないのが居るのだ。

洋々たる遼河の流れを前にして、河畔の捨石に腰うち下し、三尺もあらうかと思ふ煙管、煙をゆるく吐き出しながら糸を垂れて居る圖などは、往々にあちらを旅する者の見うくる所であるが彼等は釣のない糸を垂れて居るのが普通である。

數寄を凝した釣竿で、餌をなめる小魚の當りにさへ、神經を尖らして居る我等の國の釣道樂とは少し趣きを異にして居る。

彼等は自然の枝、そのままの太いのが釣竿代り、糸だつて麻よりの丈夫一方、その真中どこに重し代りな手頃な小石が結びつけてあり、釣のあらうと云ふ所には、芋虫が胴中を結えられて居

るのだ。

芋虫をバクリとやらうと云ふ位だから、小魚相手ではなく、大きな魚に違ひなく、鯰を釣るのだと云つて居る。そして本當に北支那の土人は、この方法で鯰を釣りあげる。

何と珍しいことでないか?! 芋虫で鯰を釣らうなんて云ふ考へは、到底われ等の想到し得ないことだ。

昔、周の呂尙、後に大公望が渭水のほとり、眞直ぐな釣で、餌一つつけないで釣をして居る七十幾つかの年、西伯侯武王に見出だされ、宰相として用ゐられることになつたが、彼は豪語して曰く「俺は小魚を釣るのでない。天下一の大魚を釣るのだから、釣や餌のやうな小細工はいらないのだ。」

成程、芋虫で鯰釣りの先祖だけあつて、本當に武王のやうな大魚を釣りあげて了つた。

支那の金太郎

足柄山の金太郎は、熊や鹿を相手に角力をとつて遊びながら、後に成人して坂田の金時となつたのかどうか、その點、頗る記憶が明白して居らぬが、兎に角、金太郎の話は、支那から流れて

行つたのかも知れない。

それが證據には昔も昔、大昔の堯の時代、箕山の巢父と云ふ男。父は樵夫で母は山姥のやうな生活を送つて居る仲へ、大鳥が巢喰ふと見て孕んで十三ヶ月目。生れ落ちてから變つて居つたがだん／＼と生長するに従ひ豪力無双、毎日のやうに鹿や熊を友達として遊んで居た。

その内、年頃になると、巢父の力は素晴らしいもので、大熊などと角力つても手もなくゴロ／＼と轉して了ふと云ふわけで、野獸一統、申し合せでもしたやうに彼の命令に唯々諾々と従ふと云ふ勢ひ。

何時かこのことが、時の帝、堯の耳に這入つたので、わざ／＼と五使を勅使とし、宮仕へするやうに勸めて來た。

すると悦ぶかと思ひの外、すつかりと冠をまけて了つた巢父。箕山の流れて、切りと耳を洗ひ出したのだ。

驚いたのは勅使の一行で、なほも言葉を下して、彼の出山宮仕への利益なのを順々と説き始めた。と巢父は返辭一つしないで、一生懸命に耳を洗つて居る。

俗事に耳を汚されるのを、大變に嫌つたわけだが、その後、たび／＼勅使がくるので、遂にだ

ん／＼と山奥へ／＼と遁げ込んだ。
この金太郎である巢父。支那では隱士の鼻祖と稱して居る。

月宮殿に奔る嫦娥

支那で代表的美人である楊貴妃。日本の小野小町と併稱されて居る程、有名な女であるが、かの女は唐の玄宗皇帝の朝へ召し出され、霓裳羽衣の曲を舞つたのでも知れて居る。

この曲が、月宮に棲む嫦娥のことを仕組んだわけで、三保の松原、羽衣の松の故事、天女の話が生れた源であるのだ。

嫦娥の夫であつた羿が、夏の帝位を奪つたのを見て、泣いて悲しんだかの女は、死を賭してその不忠を諫めたが、どうしても聞き入れられない。そればかりでなく、奢望があつて、崑崙山に西王母を訪ね、不老不死の靈藥を貰つて歸つたと知つたので、此の上、長生されて、位を簞して居るのを見て居るに忍びず、竊にその靈藥を盗み出し、外に隠して了ひ、夫の羿に飲ませないやうにした。そしてコツソリと自分でその靈藥を飲んで了つた。

この所、嫦娥不貞の罪は免れないわけだが、羿は藥が失くなつたので、大變な立腹、大勢の妃

たちを嚴重な取調べ、だん／＼と調べてみると、どうやらそれは嫦娥が盗んだものらしいと分つたので一倍の怒り。かの女を窮追、場合に依つては斬り捨てまじき權幕、巧に監視の眼を偷み、宮中を遁れ出したが、羿の掃索の手は一層に厳しく、草を分けても尋ね出さうと云ふ意氣込み。絶體絶命、さすがの嫦娥もこの世では遁げ隠れる場所を持たなくなつた。

或る月の佳い夜、追手の者に追ひつめられた嫦娥。この上は空へ、月宮殿へ遁れるより道はない。するとかの女の姿はふわ／＼と雲のやう、大勢の頭の上、明い月宮殿の方へ奔つて行く姿が見えた。

月に兎が棲んで居ると同じやう、支那では今でも月宮殿に嫦娥が棲んで居るのだと、語り傳へられて居る。

生命まで失ふ馬鹿正直

夏の靡南は、君が過あつて諫めなければ忠でなく、諫めて身を殺せば孝でない。如かず身を退いて、不忠不孝を免れやうと、山へ隠れて了つたが、これが一番に伶俐な世渡りであつた。

無道な桀王、贅澤の限りを盡して、例の有名な酒池肉林の快樂。數町もあらうかと思ふ池に滿

々と酒を湛え、宮中の男女がそれに船を浮べては、遊び呆けて居つたのだ。

或る日のことに、王の近臣三十餘人、酒池に船を浮べ、てん／＼に大盃を握り、一ツ太鼓を打つと、酌をし、二ツ太鼓を打ち込むと、一齊に酒を飲むと云ふことを繰返しながら船を漕ぎ廻つて居つたので、船中の近臣ども大へべれけに酔つて了ひ、傍若無人な騒ぎ方。その船の舵手が力自慢な飛熊と云ふ正直者、桀王の御前、興を助けるために、頃合を見計ひ、この船を轉覆して見せうと、奸臣の趙梁から内々に云ひつけられて居つたので、云はれるままに、もうよい時分と、酒池の中心で、この船を覆へすやうに横にしたのだ。

泥酔の近臣ども、何で耐らう？ 芋虫のやうにゴロ／＼と池の中へ轉り落ち、今までの興はど

こへやら手をあげ、足を突張り、悲鳴をあげる大騒動。飛熊はこれを見て、酒池に溺れさうな連中を片端から船へと引き揚げた。

桀王は面白がるどころでなく、大變な怒り方。かうなると始めに云ひつけた趙梁は知らぬ顔の半平、馬鹿正直な飛熊は、このために死刑に處せられて了つた。

無法な主人に、いくら忠實に仕へても、馬鹿を見る一例である。

小野道風と書神王右軍

柳の枝に蛙の飛びつくのを見て、翻然と心を入れ換へた、書道の祖と云はれる小野道風と、支那の書神と稱され、書家として第一に指折られる王羲之とは、その行方がよく似て居るのだ。

小鳥の巢立つのを見て、おのれの遅々として居る心を鞭ち、一生懸命に勉強した甲斐あつて、十三にして、當時の學者、周頤を驚かす程に、見事を獨持の境地、筆跡を見せた。

後に鯁骨で通るだけあつて、明けても暮れても書法ばかり。今だに右軍王羲之の筆法は、飄として浮雲の如く、矯として遊龍の如しと云はれるだけ、平易

で順容、鐵畫銀勾の片紙隻字も、當時でさへ珍重がられて居つたさうだ。東晋以後、各代に渡る支那の學者、大抵はこの王右軍の筆跡を學んで師匠として居る。

書を習ふならば、先づ王右軍につけとは、支那ばかりに云はれることでなく、われ／＼にも全くよい手本である。

さすがは文字の國、支那だけあつて、王右軍の筆跡、大部分は殘されて居つて、眞蹟そのままに刷られて居るのが、安い値で幾らでも手に入れることが出来るのだ。

二十四孝二十四不孝

二十四孝の繪を描いて、支那から自慢して寄越した時、負けず嫌ひな日本では、二十四不孝の繪を書いて、支那へお禮とし、向ふの人間を吃驚させたと言ふ笑話がある。

別に皮肉なわけではないが、日本では二十四孝位は別に自慢する必要はなく、世間に稀な二十四不孝。外の日本人は皆孝行者だよとやり返したわけである。

この二十四孝の内、王祥と云ふ男が嚴寒、氷を割つて魚を捕つて行く故事があるが、當時これと同じ孝行者、王延と云ふ者が居つた。それで彼を加へ、二十五孝にしてはと云ふ意見も出た所、孝行のやり方が同じなため、王延の方が省かれて了ひ、さつぱりと世間にその名が擴まらなかつたと云はれて居る。

忠臣蔵四十八士の内にさへ、割のよくない、世間に知られない人が多いと同じに、孝行者にさへ運不運はあると見える。

王延は九歳で母を喪ひ、三ヶ年間も悲しんで泣き續けたと云ふ變り者。忌日がくると更に新しい涙。十日は泣き暮して居ると云ふ仕末。さすがにこれでは繼母のト氏もやり切れなくなつて、

何かにつけて繼子いぢめ。所が彼は五郎正宗を地で行く素直な性質。第二の母へも孝養怠りなくよく仕へた。

支那でも繼母は邪慳な者が多いと見え、何かと無理難題を出しては、王延を苦しめた。

或る冬の寒い朝、魚を捕へてこいとの命令。彼は云はれるままに凍つた河縁へ来て、一人で鏡のやうな河面を見て、泣いて居つた。

すると怪しくも氷りの面、急にメリ／＼と音高く破れ、三尺もあらうかと思ふ大鯉、勢よく彼の前、岸へと跳ね出して來たのだ。

至誠至孝、天に通じてのこの賜物。支那正宗とでも云ふ可き、二十五孝になり損ねの王延の孝心談である。

頬の飯粒で二兒を養ふ

貧乏で名を残したのも随分と澤山に居るが、高平の鄰鑿、これはまた念の入り過ぎた貧乏で、螢の光、窓の雪どころでなく、もう少し猾い勉強の仕方、夜になると、他人の窓下、戸障子から漏れる灯影を頼りに讀書勉強を積んだ。

こんな風であるから、着る物は云ふまでもなく、喰べるものさへ食ふや食はずで居つたが、重なる不幸、兄の子の適と、甥の周翼と云ふ二人の乳飲兒が、彼の家へ轉り込んで来たのである。弱つたのは鄰鑿。自分一人でさへ持て餘して居る所へ、足手纏ひな赤兒が一遍に二人も出てきたのであるから、大抵な人なら避けて了ふのだが、流石は史上に残るだけの大人物。餓死すればそれまでの運命と、毎日のやうに乞食をして歩いた。彼の近くに、餘り豊でない家だが、大變に彼の貧乏なのを憐れんで、時折御飯を恵んで、喰べさせて呉れる所があつた。鄰鑿はそこで御飯を施されて歸り際、何時も兩方の頬一杯に飯粒をもぐぐと頬張り、口も利けないやうにしては戻つた。そして家へ入ると、その頬一杯に含んだ飯粒。急に吐き出して、二人の赤兒を養つた。彼が苦學の効なつて、その後、有名になつた時、美しい邸宅と田地とを求めて、貧困當時に恵まれた家への禮物としたさうだ。

髪を切つて贅澤を戒む

友あり遠方より來たる、また樂しからずや。借あり借金取り來たる、また苦しからずやとは、論語に書いてある孔夫子の云つた有名な言葉であるさうだが、後者の文句は兎に角として、遠方から親しい友人の訪ねてくれるのは、本當に愉快なものに違ひない。

東晋の陶侃、親しい友である范滂が訪ねてくれたが、何一つもてなすことが出きない程、苦しい貧乏であつた。

お茶一杯も出せない位であるから、陶侃の心の悲しさ。どうかして友を悦ばしたいものと考えた。

それを側から見居つた母の湛氏。何を思つたか外出をし、暫くして型ばかりの酒肴ではあるが、整へて戻つて來た。

陶侃は大變に悦んだが、母の日頃らの氣性として、他人の金を借りるのを嫌つて居るので、どうして此を求めて來たかと不審を抱いた。がそれは意外、母は髮毛を根元から、ぶつとりと切つて賣つた金であつた。

唯一人の息子の顔を立てさせるためにとは云へ、何と云ふ痛ましい、悲しいことか！友の范滂もその事を知ると、涙を流して悦んだが、その後、決して陶の家で、一杯の酒も口

にしなかつた。幾ら勤められても、盃をさへ手に取らなかつた。
 學生の身で、贅澤浮華に流れがちなのを賢婦人として命名ある湛氏が、陰に戒めたのである。

驢馬のやうな孔明の兄

孔明ほどに有名ではないが、呉王の孫權に愛されて居つた諸葛恪。
 彼の父であり、孔明の兄である瑾（字名を子瑜）に伴はれ、六歳の時、宮中の大宴會へと招かれたのだ。

ところが恪の父親である子瑜の顔。べら棒に長く、まるで驢馬のやうである。
 文士の坂本紅蓮洞か役者では守田勘彌そのけと云ふわけで、日頃から顔の長いのが評判者。
 群臣綺羅星の如く居並ぶ呉王の御前。誰が思ひついたのか座興として、大勢を笑はさうと考へた
 のであらうが、酒酣な頃を見計ひ、一頭の驢馬をその宴會場へと引き出して來た。そして馬
 頭に「諸葛子瑜」と書いた紙がぶら下げてあるのだ。

これを見た呉王孫權始め群臣。割れる程な拍手で迎へ、大笑した。

恪は僅か六歳ではあるが、父のことだけに、突如つか／＼とその驢馬の前へ歩み寄り、手に握

んで居つた筆で、「之驢」と云ふ二字を書き加へた。

今までは父の名であつた諸葛子瑜であつたのを、父が所有の驢馬と書き改めて了つた。

この突嗟の智慧、父に降りかかる嘲笑を拭くひ去つた仕打が、呉王の痛く感心する所となり、
 その驢馬を賜つた上、多くの恩賞に預つたのであつた。

牛 一一 題 (その一)

王彦方は徳厚の士として知れて居るが、若い頃、郷里に牛盗人が出沒し、到る所でその被害を
 うけた。

間もなく、その犯人は捕縛されたが、盗人が判官に向つて云ふのに、刑罰はいかに重く處断さ
 れてもいいから、どうか王彦方さまだけには、私が牛盗人であつたことを知らさないで呉れと懇
 願した。

世間に知られるより、彼一人に知られるを盗人は苦に病んで居つたのだ。それ程に徳化するこ
 とを得た彼、この話を聞いて大變に悦んで、獄中の盗人に着物や喰物を始終差し入れて居つた。
 そして人が訊ねると、盗みをしなから、その過を私が聴くの恐れるは、羞惡の心があるからだ。

羞惡の心が有れば、善心が生じやうとするのであるから、私は是非それを取り戻し、育ててやりたいからである。その後、數年たつて、或る老人が劍を道に落して了ひ、探しながら戻つてくると、路上に落ちた劍の側、一人の男が突立つて監視して居る。理由を訊ねると、落主が見えるまで待つて居つたのだと云ふわけ。晝前から日暮れ近い今まで見守つて居つたのだ。感心す可きその男こそ、往年の牛盗人であつたのである。

牛 一一 題 (その二)

右の頬を打たれたなら、左の頬も打たせろと云ふのは、聖書の文句だが、支那にも不言實行、無抵抗博愛主義で凱歌を奏して居る東漢の劉寛の如き有名な人が居る。

彼は如何なる場合でも、人を怒ると云ふことを知らなかつた。他人が無情な所爲をし、困難な境地へ陥し入れても、ただ相手を怒れみ、おのれの不徳を悲しんだ。

劉寛は或る日のこと、城へ行く街道、牛車に乗つて出かけると、向ふから走つて來た百姓風の男。突如彼の牛を捕へ、これは俺が失つた牛だ。それを公然に白晝、車を牽かせて行くとは本當に圖太い男奴と云ふわけで、さんくんに罵倒の言葉を浴びせかけ、その牛を何處かへ連れて行つ

て了つた。

そこで仕方なく、彼は牛車をそこへ留め、身一つで城内へ行き、道を戻つてくると、前の百姓は彼を見て叩頭百拜、牛が誤りであり、自分の牛が外から戻つて來たことを述べ、切りと詫びたのだ。

世間に似たものはあるし、誤りは普通のことだ。失つた牛が出たのは喜ばしいと、怨みがましいこと一つさへ云はず、その百姓と共に心から悦び合つて別れて行つた。

小さい梨と井戸端騒動

街から父が梨を買つて戻つた時。孔融の兄弟たちは、我がちに大きいのを争ひ取つた。

彼は中で、一番に小さいのを掴んで喰べたが、それは漸くと彼が四歳の時である。

父が不審に思つて、そのわけを訊ねると、私は一番に幼い弟ですから、小さい梨がよいのです。その謙讓の徳は、長ずるに従ひ、ますます發揮され、一郷から一地方、一國をも徳化して、今に名を残して居る。

同じやうに東漢の管寧も、幼い時、村の井戸端、水を汲む村人たちが絶えず先を争ふて、喧嘩

ばかりするのを情なく思つて居つた。
 それから間もなく、井戸端には幾つも／＼水を一杯に汲んである桶が並べてあるやうになり、
 村人はそれをあけては貰つて行つた。
 朝の混雑する時など、澤山の桶に水が汲み込んであり、村人は大助かり。
 しかし一體、誰がこんな所爲をするのかと、だん／＼に探つてみると、夜明け前、管寧が一人
 で一生懸命の水汲み。村人たちの水汲み争ひを止めさせやう爲めと分つた。
 後に彼の村、些細な争ひや訴訟事はすつかり跡を斷つたと云はれて居る。
 小さいことであるが、徳化の跡は素晴らしく偉大なものになるのだ。

死物狂ひな破釜の陣

背水の陣と云ふことは、よく聞くが、破釜の陣と云ふのは項羽が始めである。
 當時は出征となると、釜や甕まで世帯道具が一緒に出征したもので、秦の大軍を相手の決戦、
 勝味が少いだけに、河を渡ると破釜の陣。あらゆる船を沈めて了ひ、三日間の食糧を残した切
 り、釜や甕、すべて煮たきするに必要な道具を破り砕いて了つた。

これ以上の時日を要する時は、嫌でも敵陣地を占領して、向ふの物を拜借し、掠奪するより外
 はないのだ。

必死生還を期することが無いやうに命令して、項羽が先頭に秦の大軍と九戦。楚兵は一で十に
 當る勢ひ、遂に大勝を占むる事が出来たのである。
 向ふ見ずに進むことを、猪武者とも云ふが、これから破釜の陣を布くと云ふ言葉が生れて來た
 のだ。

讀經三昧で盜賊を撃退

真夜中に素的もなく貧乏な獨身者の家へ、盜賊が押し入り、こそ／＼とその邊を探し廻つて居
 った。

吃驚して眼を醒したのは、薄汚い布團に柏餅のやうに包まり、眠つて居つた獨身者。急に眞暗
 闇の中で、から／＼と笑ひ出したのだ。

此度は泥棒の方が躍りあがる程にぎよつとして、「な……何が可笑しいんだ?!」
 「お前はよく暗闇で物が見えるな?! 俺は眞晝間でさへ、家に物のあつたのを見たことがないの

だ」と云ふわけ、呆れ返るのは泥棒ばかりではないが、こんな間抜けなのは別として、黄巾賊の亂の當時、どこでも物騒な噂が立ち、泥棒横行次第と云ふ世の中であつた。

東漢一代の名僧・袁閎の寺院も幾度か賊徒の襲ふ所となつたが、少しも荒されなかつた。彼は決して、戸に鍵を下さぬ位であるから、盗人は自由に出入勝手なわけ、筆太に認めて、本堂の柱に貼つてある紙片に、好める物を勝手に持つて行く可し。

或る夜のこと、燭の光輝く本堂の如來の下、讀經三昧に餘念のない袁閎の眼先、凄い刃を突きつけた賊徒の群。切りと強迫の言葉を連ねて威嚇し、強迫した。

幾ら白刃をつきつけても、従容として聲さへ亂れず、一心に讀經を續けて居るのだ。

終には賊の方が氣味悪く、たち／＼の様子、一物も得ないで引きあげて了つた。

先年、鎌倉の禪寺でも、これに似た話があつたが、今まで長い盜賊生活、この時ほど恐い思をしたことはない、捕へられたその賊が懺悔話の内に白狀して居る。

天知る地知る汝知る吾知る

一眼二行を讀破する華陰の楊震は、博覽強記、群籍に明るい學者として、關西の孔子とさへ云

はれる程、當時有名であつた。

正廉の士であるだけ、どうしても上役の者から嫌はれ、荊州刺史に左遷されるやうになつたが彼はそれを一向に悲しまなかつた。

相變らず、行くさき／＼で公平な道を行つて居つたのだ。

或る夜のこと、茂才王が彼の歡心を得るために、こつそりと金帛を懷中にし、楊震の邸を訪れた。そしてそれを贈物として前にさし出したのである。

暮夜のことでもあるし、誰も知る者もございませぬ。どうか曲げてお收めを願ひたいと云ふわけ、切りに收賄を迫つた。

その時、震は大喝して云ふに、天知る地知る、汝知る吾知る。どうして知る者が無いと云ふのだ？

その金を掴んで、擲けつたので、茂はこそ／＼と遁げ歸つて了つた。

暮夜、金を却けた故事と共に、楊震が嗚鳴つた、天知る地知る……云々の言葉。支那では矢鱈に用ゐられるやうになつた。

二年後に果して千里結言

二年後の今日、もう一度お訪ねして、ゆつくりとお話をしませうと、山陽の范式は汝南の張邵と逢つて、別れ際に云ひ残した。そして彼は汝南から千里(支那里は六町一里)離れて居る郷里へと歸つて行つた。

やがてその二年後の日は来たのだ。

張邵の母は、幾らなんでも千里も遠い所から、わざ／＼と今日、話しに来やうとは考へられなかつた。あの場合、別れのお座なり、鳥渡した愛嬌の言葉を残したに過ぎまいと信じて居つた。息子の邵とは親しい間柄であるとは云へ、此と云ふ大した用事のないのに来るわけではないと、堅く考へて居つた。

ところが邵は、母に向つて、范式は信義のある人であります。決して約を違えるやうなことはありませんと云ふわけ。

そこで母は無駄になるとは思つたが、酒肴を仕度して、當てにならぬ人を待つた。しかし意外にも、范式は二年前の約束通り、はる／＼と張邵を訪ねて来たのである。

邵母子の感激と喜悅。しかも范の愛兒は瀕死の病床に居るのを捨てて、一度結んだ友との約を果しに遣つて来た事が分つた。

約束の時間を違えること位、屁とも思はぬ近頃の人たち、愧づる所はないか？！

學者の穴埋め詩書の焼却

侯生と盧生と云ふ二人の學者。秦の始皇が六國を併呑し、專制政治を行ふ非議を互に議論した。

ところがこの事、始皇の耳に入つて、甚だしい怒り方でそのやうな妖言亂語を放つ學者は皆穴埋めにして了へと云ふわけから、四百六十餘人の重なる學者を咸陽に集め、地の中へ生埋にしてしひ、李斯の言葉を用ひ、天下の人民を暗愚にさせるため、あらゆる詩書百家の藏書を焼却して了つた。そして書籍を埋藏する者は梟首の重罪で、三族にまでも及ぼすと云ふ嚴しい布告。何れも萬卷の藏書を守尉處へ運び込んで、灰にして了つたのだ。

ただ一人、伏生は始皇の無道を憤つて、こつそりと澤山な書籍、壁の中にぬり込んで隠して置いた。それが漢時代に掘り出され、齊魯學術の粹を失はないですんだのである。

時の爲政者の命令が、正しいものばかりでない事は、これを以ても知れるわけだ。殊に専制時代には一層に烈かつたものと見える。

劍舞の鼻祖項莊と壯士の荊軻

壯士と云ふと、漢の樊噲のやうに云はれるが、そのすつと前、秦に荊軻と云ふ豪壯な士が居るのだ。

漢高祖と項羽との鴻門宴。劍を持つて舞つた項莊は、支那劍舞の鼻祖と云ふわけで、知れて居るが、壯士の先祖、荊軻は燕の太子である丹の命令を受け樊於期將軍の首級と燕地方の圖面とを土産に、秦の宮中へ乗り込み、始皇に對面した。

始皇は憎んで居る樊將軍の首級に、秘密地圖さへ持つて來たと云ふので大悦び。荊軻を前に、その圖面を繰り擴げて行くと、ぐる／＼と捲いてある中に匕首が一振、ポロリと床へ落ちる。は、として色を變へる始皇の袖、荊軻は堅く捕へて、匕首を握るや、一突きと刺した。が手元が狂ひ、始皇は柱を廻つて遁げ走る。左右の群臣、どうする事も出来ない程に危急が迫つて居つた。陛下、負ふて居る劍で……と、侍臣の叫びに、ふと氣がついた始皇。背中の劍を抜いて、追ふ

てくる軻の左股へ斬りつける。彼は傷を負ひながら、なほも跛歩しつゝ始皇を追つたが、廻りを圍んだ群臣、十餘人を斬り伏せ、無念の涙を吞んで自刎するに到つた。

俠客孟嘗君と子分三千人

孟嘗君田文は、俠客肌の男であつて、來る者は拒まず、誰でも子分にした。

一度は秦の宰相にまでなつた身分であるが、官吏は身について居らないと見え、野に居つて、遙に名聲をあげて居つた。

何でもよい、一藝一技に秀でる者は、養つて居つたと云ふのだから、盜賊も居れば、鶏の鳴く聲のうまい男なども居り、例の有名人な函谷關破りの話などもあるが、ここに矢張、彼の子分である齊人、馮煖と云ふ男、食客となつたが何一つ藝がなかつた。これは本當に珍しいことであつたが、他の連中が無藝を賤しんで、一人前の食客扱ひをしないのを見ると、馮煖は變り物だけ、柱に倚りかかり、劍を弾いては、節をつけて唄ひ出すのだ。

歸らう／＼俺は歸らう。食事に魚もつかないとは！孟嘗君も此を聞くと、苦笑して他の食客同様に食膳へ魚をつける事にした。すると亦唄ふのに、出るのに車がない。更に唄つて、家がな

いと云ふわけ。どこまで圖々しい事を持ち出すか、界限がない。

他の食客連中、此を聞いて憎み始めた。無藝猿の癖にと云ふわけであつたが、孟嘗君は笑つて答へなかつた。

それから數年。孟嘗君が失脚して旅へ出た時、一郷の老幼男女數萬、いや十數萬。彼のくるのを悦び迎へる所があつた。さすがに彼も意外であつたが、それは往年の無藝猿、馮煖の郷里であつたのだ。

彼は一藝一技に秀でなかつたが、郷黨の心を孟嘗君に向けさせる力を抱いて居つた。

物語篇

十萬兩の首

空から舞ひ散る紙片の雨

それが十月上旬の或る日である。

中秋の氣、廣漠たる原野に充ちて金風は水の如く蕭條として冷く、兵士の面を流れた。

北支那は、秋あわただしく過ぎて直に冬を迎へる仕度をせねばならない。

ここ山海關を堺とし、山に溪に蜿蜒と長蛇の如く走る萬里長城を中に、奉天の張作霖軍に對峙して居る直隸派吳佩孚軍の陣中。

「おい、恁う毎日のやうに小競合許りでは、何時片着くものやら分らず這麼な原野で冬越しとなつた日には耐らないぞ。」

「全く、一日も早く結末をつけて了ひたいものだ。なる可くは戦争などしないで、好い加減の所で切りあげて貰ひたい。」

「俺たちの俸給だつて、もう二ヶ月間、纏つた金は一遍でも貰はないんだ。北京で雇ふ時には一ヶ月六十元を出すと云ふし、戦争は無論勝戦さだから、奉天軍などと戦はないでも大丈夫と云ふし、好い話に釣られて募集に應じて兵隊になると、聞いたとは雲泥の相違、給料の不渡り所か此所は一番に危険な前線で、ボン／＼打ち合つたが最後、生命に別状があらうと云ふのだからな。」

「本統に遣り切れねえ。奉天の飛行機は毎日のやうにブウ／＼と頭の上を飛び廻りやがつて、遠慮なく爆弾を擲けて行きやアがる。」

「地獄の一丁目か二丁目と云ふ所だらうよ。」

「欺されて来たが因果と、お互に諦めるが、だが諦められねえのは、母親とそれから嬢の事だ。」

「へん、この馬鹿野郎！ 今頃、嬢の事など思ひ出したつて、間に合ふものか。お前なんか死んだ者と考へて、好きな男を引張り込み甘く乳繰つてゐらア！」

「それだから、俺はそんな事を考へると、夜だつて、をち／＼と睡れないんだ。什麼かして故郷へ歸して貰ふ工夫はあるまいか。」

「さア、死んだら知らねえが、生きて居る内は覺束ねえ。上官の耳にこんな事が這入つたら銃殺かな。あの無鐵砲な奴等の事だから、ウツカリした事は吐けねえよ。」

「俺たちも歸りたいのは山々だが、逃げれば銃殺、軍律を亂し、士氣を沮喪させるやうな事を云へば銃殺。何でも銃殺で片づけられるのだから死神が尻をねらつてゐるやうなものだ。」

灰色の軍服、戦時武装をした兵士が十二三人。天幕の中で圓座して、忘れ難い故郷のことから戦争に怨嗟の聲を漏して居つた。何れも年頃は二十歳前後から五十上の老人も居らうと云ふ不揃ひなお雇兵のこと。そこには數千の天幕がはられ、戦友と交替した休養時を、こんな話を低聲で語り合つて居るのだ。

「もし皆さんえ！」と、その時、隅でうづくまつて、兩膝を抱くやうに頭を垂れ、背を圓くして居つた瘦せた兵士が、眼を尖らせながら「皆さんはお金儲けに、兵士となつたのですから、未だ諦めがつかますが、儂なんかは本統に諦めやうがありませんや。好き好んで兵隊になつた譯ぢやなし、今でこそ、恚うやつて皆さんと御同列に、軍服は着てゐますが、保定の城壁側に住んで居つた、海城の韓と云はれる乞食なんですぜ。」

「何だ？ 乞食だ!!」皆は一齊にその男に視線を注いだ。

「へい、儀等の仲間、少し足腰の丈夫で、年若い野郎でしたら、ふん捕つて否應云はさず兵隊にさせられたんでア、折角少い時から習ひ覚えた稼業は出さず、生命がけな這様な行爲をさせられては、お情ねえ事でござえますよ。」と、前身が分るやうな、憐れ氣な聲を絞つて、鼻をつまらせた。

「成程、乞食まで引きあげたのかい。」

「へい、乞食許りではありません。監獄から囚人を引張り出して、刑期のある奴を特赦する代りに、兵隊に仕立てて居るさうでア。」

「其奴は一層剣呑だな。前には敵の奉天軍。後には遁げるのを銃殺と、士官の奴が眼を光らして居るし、空からは飛行機で爆弾のお見舞、仲間は泥棒ときた日には、全く絶體絶命ぢやねえか。」

「へい。全く御同様にお情ねえことでござえますよ。念佛でも一生懸命に唱へて、佛さまのお救ひでもお待ちませうよ。南無阿彌陀佛。」と、海城の韓は地底からでも漏すやうなうめき聲を力なく吐いた。

「やい、縁儀でもねえ。今から佛さまのお迎ひなど來られて堪るものか。」と、大聲で怒鳴るのも居つた。

その時、澄んだ中空高く、爆音を轟かして二臺の飛行機。翼を揃へて直隸軍の陣營である彼等の上を飛んで行つた。

「ヤツ、また奉天軍の飛行機が來たな。」

「桑ばら／＼、爆弾の落ちませんやうに。」と、海城の韓は首を縮めながら震え聲で呟語て居る。そこに散在して居る天幕の隙間からは、何れも恐怖の眼をあげては、飛行機の行方を眺めて居た。

「おや／＼また俺たちの上へ舞ひ戻つて來やがつたぞ。」

爆音は鋭く、低空を飛んで居る事が、外を見なくとも、誰にも察しられた。

陣地の丘陵の陰から、轟然たる砲聲が一發……二發……三發……と続けざまに聞えたが、敵機を打ち落さうと試みる威嚇砲であつた。

「あの大砲は糞の役に立たんぢやないか、今までに一機をさへ打ち落した事がないから、晝日中味方を馬鹿にするやうに、あれあんなに低く、ぐる／＼と圓を描きながら、勝手に飛んで居るのだ。」

「おやツ！ 飛行機から變なものを落すぞ。」

と、空を見上げて居つた一兵士が叫んだ。

「何だツ?! 雪のやうにひら／＼と紙片を落して行くぢやねえか。」

「さうだ! 爆弾代りに紙片を降らして行きやがるぜ。」

天幕の内から一人二人と顔を出し身體を出しする者が多く、如何にも奇異な思に驅られ、蒼空高く、午後の陽光にキラ／＼と白く輝いて、舞ひ散る雪片の如き数千いや数万の紙片の落ちるのを待った。

「何だ?! 何だ?!」と、その紙片を拾ひ取つた紙片の廻りには、數十の兵士が黒山のやう輪に圍んで訊ねかけた。

飛行機の行方を失つた直軍の陣營あちこちには、到る所にその紙片を手にした一團ががや／＼と騒いでゐる。

その一片には、這麼な文句が認めてあつた――

祖國を毒する逆賊吳佩孚、曹錕一派は討討するも、我が親愛なる同胞の一兵を損う事を欲せず。

兄弟よ!! 我が軍に來れ!

然らざれば、鋒を逆まにして、賊魁吳佩孚を討て!

我は必ず兄弟の爲め、一身を賭しても安全なる計を謀るであらう!

我が軍は血で血を洗ふ如き兄弟と戦ふを欲せず。兄弟も亦、我が兵を敵とするを喜ぶまじ、

我が同胞をかかる死地に導く者は誰ぞ? 兄弟が將軍と仰ぎ 司令と呼ぶ吳佩孚の野望より

出でしにあらすや。

兄弟よ!! 我が軍に來れ!

兄弟 牆にせめぐは、國の亡ぶる原因なれと知れ。

兄弟が若しも武器を捨て、郷里に歸るを欲するならば、我は契つて希望通り送還し得させん。

此の數句、神明に契ひ布告す。

奉天第一軍司令 王 景 林

この布告を見た陣中の兵士たちは、寄ると觸ると、飛行機上より撒いた紙片の事で持ち切りである。そして尙外に、下のやうな文句を書いたのもあつた。

賊將吳佩孚を生擒する者へ賞金二十萬兩 同じく暗殺する者へ賞金五萬兩 同人の首級を持參する者へ賞金十萬兩

「豪い布告を出したものだ。」と、一兵士は嘆ずる口調で「流石は元が馬賊上りだけに、我が呉將軍の首へ十萬兩を掛けた譯だ。」

「將軍も物騒で、一寸外出も出さなくなろう。」

「しかし豪膽な呉將軍のことだ。これ位の事は屁とも思ふまいさ。」

彼等は勝手な事を喋りながら、此所に一團、彼所に一團と寄り集つて居る所へ、傳令の一騎は忙しく飛んで、士官の休憩して居る天幕から天幕へと、何事かを傳へて走せ去つた。

「また何か起つたのかな？」

恐怖と不安をこつちやにした感情を各自に面に露して、探り合ふやうに眼で話した。

その内に、各小營毎に、集合する合圖の喇叭は入り亂れて、囂と鳴り渡つた。

十萬兩の首二十萬兩の首

「將軍閣下が第一戦線の御巡視を遊ばされ、お前たちの勞を犒ひにお見えになるのだ。」と、天幕前に整列した兵士に向ひ、士官は口を切つて、「さて改めて云ふまでもないが、お前たちの内には

兎角に生命許りを惜しがり卑怯な振舞に出る者が多い。殊に將軍閣下御巡視の砌り、如何なる事をお訊ねになるかも知れないが平素も云ふてある通り、「男子一度戰場に臨まば、國家の爲め一命は顧みる所でありませぬ」と云ふ事だけを忘れずに復命しろ！ よいか。」と、形通り模範軍隊となるやうな復命方に念を入れた。

「はッ。」と、お雇兵たちは、異に同音に情ない様子で返辭をした。

「氣をつけッ。」士官の叫びと一緒にキラリ／＼と抜劍され、不動の姿勢に整列する小營に馬首を揃へた三騎、後からは入り亂れた副官隨行が十數騎。次から次と閱兵式のやうな態度で、蹄の音低く進んでくる。

前に進む三騎の中央が呉佩孚將軍であらう。時折に粗野な兵士の面に鋭い眼を落しては、輕く擧手の禮をしては過ぎた。

丁度、海城の韓の居る小營前に來た時、二列に整列する兵士たちの中に、如何にも元氣なく、青瓢箪のやうに悄れ返つて居る、瘦せた彼の姿に眼を留めて、びつたりと馬の手綱を締めながら「おい、お前は何處か悪いのか。」と訊ねた。

海城の韓はここだと考へた。と云ふのは、日頃隊長から云はれて居る軍人精神の第一條。おと

がめを受けては大變とばかりに、

「へい。」ペコリと頭を下げて「へい、その男子一度、戦場に臨まば、國家の爲め一命は顧みる所でありません。へい。」またペコリと頭を下げた。

吳將軍はニヤリと笑ひながら、

「お前の名は何と云ふか？」

「海城の韓と申します。」

「海城の韓か?! 海城の生れである韓と申すのか。」

「いえ、海城の韓で……」

「分らん奴だな。韓は苗字であらうが、海城は故郷であらう!」

「へい。その仲間が何時も、餓鬼の時分から海城の韓と呼びました通り名でござえまして、大方そんな所でござえませう。」

「軍隊に這入る前は何を致して居つたのか?!」

「へい。その乞食でござえまして。」

「何ツ? 乞食だ?」意外さうに「乞食とは云へ、心を入れ變へて、國家の爲めに働かうとは健

氣なことだ。」

吳將軍は苦笑しながら、幕僚を顧みて、先へ馬を進めやうとしたその時。その小營の列の端れから、帛を裂くやうな叱咤する叫び。

「逆賊吳佩孚! 覺悟せよ!」

ズドンと一發。續いて又一發。拳銃は放たれた。

「わあツ」と云ふ騒ぎ、營兵はバラ／＼と西に東に走り散るのだ。

吳將軍の代りに、右に居つた幕僚の一人は紅に染んで、仰向けさまに馬上から落ちた。とその時には、銃聲を聞きつけた各營の兵士たち、士官の指揮の下に何時か、その現場へと馳せ集り、十重二十重にその廻りを取りまいて警戒した。

「そ……其奴ぢや。」

馬上にキツト憤怒の眼を、或る男に据えた吳佩孚將軍は「直ぐに引捕へて、本營へ引連れてまゐれツ!」

その男は、矢張同じ直軍の兵士姿であつたが、全てを観念したと見え素直に縛について、蹴られやうが、叩かれやうがヂツと一語も云はずに眼を閉ぢて居る。

「李參謀を直ぐと病院へ連れて行き出きるだけの手當を加へよ。」將軍は己の身代りとなつた幕僚を痛々し氣に見遣りながら、顎で指圖するやうに他の者を見返つた。そして再び緩く、手綱を握んで戦線の巡視を續けた。

「將軍閣下！ 御巡視は御取廢めになつては如何でせうか？」と、幕僚の一人は後から訊ねかけた。

「何でな？」

「唯今のやうな馬鹿者が、此の先に居らんとも計られませぬ。閣下が御覽の通り、あの男など女のやうな優しい姿をして居りながら、奉天軍の廻し者でした。殊に張作霖は閣下を覗ふ六十餘人の刺客を、北京から山海關の陣中にまで放してあると耳にして居ります。幾ら閣下が豪膽で居らつしやつても、味方の兵服を纏ひ閣下が手兵の如く装ふて居る獅子身中の虫は、見破る事が困難でございます。どうぞ今日は此の儘、本營へお引取を頂きたいと存じます。」

「そんな事は意に介する程でないぞ。一兵卒も、俺も戰場に出た以上何時如何なる所で一命を落すのも皆それまでの運命ぢや。」

「いや、その上に先刻、奉天の飛行機が味方の士氣を沮喪させる如き紙片を撒き散してまゐり、

しかも閣下の首級に十萬兩の賞金をさへ掛けて居ります。」

「俺の首に十萬兩か！」吳佩孚は苦笑しながら「作霖もケチな値をかけたものぢや。吳の首がたつた十萬兩かハツハツハ、。」と大笑した。更に語を繼いで、

「作霖が俺の首に十萬兩をかけるならば、俺も作霖の首に二十萬の賞金を掛けてやらうかい。誰か物好きに取つて見やうとする者が、出てくるかな。」

「はい。世間には案外と馬鹿者が多うございます。それだけ又閣下のお身を御心配申しあげるのです。」と、その幕僚は誠心籠めて云つた。

そこへ再び本營の方面から、馬を飛ばした吳將軍の幕下らしい將軍が一騎、

「閣下！ 奉天軍は今夜、二狼廟を總攻撃の準備をいたして居ります。」

「うむ。そんな知らせでも入つたか。」

「はい、騎兵を入れて、左翼方面の状況を探らせ、更に先刻も飛行機上から本營の兵數配置を偵察してまゐつた如く思はれます。敵は必ず手薄な左翼方面に當り、全力を瀆ぐらしく、かれらの大部隊がその方面へ動く模様のあるのが、察知致されます。なほ間者の齷す報告によるも、これは確實と信じられるのです。」

「さうか。」と、吳將軍は今までの晴れた顔を曇らして、困惑の色を浮べたが、「秦皇島へ上陸部隊は、未だ當分はこの方面へ出動は覺束ないな。」

「左様、三四日間は掛らうと存じます。」

「よしッ、敵の動靜に従ひ、左翼方面へ全力を灑げ！あの二狼廟を敵手に奪取されたならば、我が軍の第一線は破れたも同じ事ぢや。」

第一戦の敗報は、將來士氣を沮喪させる絶大な原因となる。俺は敗るも、ここ山海關の第一線から一步も退かぬ覺悟ぢやから、皆もその積りで、充分に奮闘をして呉れ！」

吳將軍は、激動する調子で、キツとなりながら、皆に決意の程を仄めかしたのだ。

奉直百萬の大軍、山海關の關ヶ原である二狼廟を先途として、その夜支那をあげての激戦は開かれる氣運は熟した。

雲か雨が果た風か！山雨到らんとして風樓に充つるの模様で、續々と大部隊がその方面へ繰出されて行く。

彈雨の下に散る名花一輪

その日暮れ方のことである。

奉軍の攻撃によつて、火蓋の第一砲は切られた。

殷々たる砲聲、彈丸の爆裂する音光、夜の帷の深くなるに連れて、兩軍から打ち出す大砲小銃の音は、物凄に程に連続した。

吳佩孚は、本營の天幕内に在つて、長びくらしい戦況を氣にしながら、遠く聞える砲聲に耳を傾けて居つた。

「おおさうだ！先刻、俺が巡視の際、暗殺しやうと企てた奴を呼んで、今の内に片づけて置かう。」と、心を定め、コト／＼と卓の上を叩いた。

「お呼びでございますか。」

從卒が天幕の口に面を入れて、直立した。

「うむ。先刻の男は何れへ監視してある？張宗揚を呼んで、この所へ引きずり出し、嚴重に取調べさせよ！」

「はッ。」從卒が引き下がると、細い角燈の光を先に、間もなく、どか／＼と多人數の足音が入り亂れ、高手小手に縛めた眉目清秀、女のやうな姿をして居る奉天軍からの刺客と、副官格の張

宗楊が、吳將軍の本營近く近寄つて來た。

「閣下！ 刺客を引ッ連れましました。」宗楊は天幕の内へ向ひ、大聲に叫んだ。

「さうか。一通り、お前の手から取調べ、暇取るやうなら、例の所へ引き出して、直ぐと銃刑に處して了へ！」

「はい。」と、宗楊は返辭はしたが、吳將軍が什麼した譯か、天幕から姿を見せぬので、聊か物足らぬ感を抱いたが、直ぐと氣を取り直し、側に控えて居る兵士たちに向ひ、

「此奴をそこへ引き据え！ 將軍閣下は天幕内で審問の模様をお聴取の筈だ。こらッ」と、その男を見下し「貴様は張作霖から頼まれて、閣下を打たうとしたのだな？」

「……」黙々として大地に膝を揃へ、一語も發しないで、首垂れて居る。

「やい、貴様は何所から我が軍の募兵に應じて、此所まで欺いて來たのだ？」

「……」依然として同じ態度である。

「おのれは強情い奴ぢや。」ピシヤリと平手で、力一杯に彼の頬を打つて「吐さぬか？ 吐さぬと處刑の際に、出きる丈の苦痛を見せて呉れるぞ。どうせ死ぬのだが、唯一發で打ち殺して貰ふのと、長い間の苦しみを見せられると、何方がよい？」

「……………」

「よしッ。これ程に云つても、貴様には分らんのだやな。此奴の上衣を剥いで了へ。縛めを脱けられんやうに注意するのだ。」兵士たちに刺々しく命じた。

その男は、今までに捕れてから、さんくくと打擲され、迫害されたと見え、點々と黒く牡丹花のやうに滲む血潮にぬれた上衣を、七八人の兵士が寄り添ひ、ピリ／＼と各自に引きちぎり、剥ぎ去つて、上半身を裸體にして了つた。

張宗楊は、長刀の拔身を手にさげて、すか／＼と彼の側に近より、びた／＼と冷たい刃の背で、二三遍、頬を打つて、

「よいか。貴様が口を開かぬと、この刃は貴様の身に一寸、二寸と、背中から腹へと、所嫌はず喰ひ入るのだ。さア、何奴に頼れ、什麼云ふ腹でどのやうにして此の陣中まで這入り込んで來たか。それから何者の手に依つて應募したか。詳しく話して了へ！」

その男は、啞のやうに眼を閉ぢて何事も語らない。

「うむ、本統に圖太い奴だ。吳將軍閣下に無禮を働く許りか。俺まで馬鹿にするか。」烈火の憤怒は、物狂しい程に彼をカツと逆上させて、手にする長刀をぐさツと、背へ刺した。

「うむツ。」苦悶する聲鋭く、縛められた男は揃へた膝を崩して、がばツと前へ打伏しに倒れた。張宗楊は、烈しい呼吸遣ひの下から、長刀を引き抜き、血しぶきを切つた。その男の背中は見る／＼内に、どく／＼と湧き流れる血潮に染み、苦痛に耐へかねるか、肩先が激しく浪打つて居る。

宗楊は、怒りの聲を絞つて、さも憎々しげにその倒れた男を見据え、

「こらツ、貴様はこれでも、まだ何事も云はぬか。うむツ、首肯く所を見ると、屹度一語も云はぬ腹だな？ おのれ未だ苦痛が足らぬと見える。」

彼は再び、長刀を取り直し、猪突のやうに背から大地へ突き通れと許り、刺さうとした。

「張宗楊」

吳將軍の聲だ。天幕の裡から叫んで眞暗な外へ姿をのつそり現して來た。

宗楊始め兵士たちは、狼狽して直立不動の姿勢で、擧手の禮の後に恐る／＼彼を仰いだ。

「大分に手古摺るやうぢやな。」

「はい。」宗楊は額から、腋下から冷たい汗を流して恐縮の表情を面に見せた。

「誰か燈火を、近くへ持て！」

吳將軍は、さう云つてから、血みどろになつて打伏して居る男の肩を掴み、引き起すやうにして、兵士の差し出す角燈の薄い光に、絶望と憤恨と苦痛に、堅く齒を喰ひしぼつて居るその男の面を見詰めた。そして彼は血に染んで居る胸から乳へと、眼を移した時、さも意外な驚異の聲を漏して、

「宗楊！ この者を男子と思ふか?!」

「はッ。」と解しかねる返辭をした。

「この者を男子と思ふかと云ふのぢや?」

吳將軍はいら／＼した調子で訊き返した。

「はッ、男子に相違ありません。」

「女子ぢや。」將軍は吐き捨てるやうに言ひ放つて「それが證據は、こ……この乳房を見る！」

將軍の云ふ通り、血に染んで居るが、ふくよかな、ポツチリした處女の乳房。疑ふ方のない女である。

「ほう、婦人ですか。」と、飽氣に取られた宗楊は「それにしては大膽極まる女だ。」

兵士たちも、唯無言で、意外な事件に遭遇したことを吃驚して居るばかりだ。

「お前は婦人の身で、しかも未だ二十歳を幾つも出ては居らぬ若い年頃で何の恨みがあつて、この吳佩孚を殺さうと企らんだのぢや？」

將軍は、物柔かに問ひ返した。

「國賊であるから……」と、始めて口を切つたが、苦痛に耐へかねてか語尾が消えた。

「國賊で？ 意外な事を聞くものぢや。いや、さうでなからう！ 何か外にある筈ぢや。」

「十萬兩が欲しいからさ。」

「さうさ。では吳の首が十萬兩なら張作霖に二十萬金をかけるから、首級を取りに出かけるか。問ひ詰めるやうに迫つた。

「いや。私は焦うと腹を定めた上からは、さう……さう變改ることは、嫌ひです。」

「稀に見る女ぢや。袁世凱を刺さうとした婦人にも劣らぬ奴ぢや。」と讚嘆する語句をさへ漏した。

「男子であらうと、女子であらうと魂は一つもの、一旦、生命を的にしかけた仕事なら、失敗つたからとて、辯解云ふにも當らない。」とキツと微に顔をあげたが、またがつくりして、

「どうせ一つしかない生命だから、どうか一思ひに殺して下さい。何も云ふまいと、心を決めた。

が、吳將軍ともあらう方が、恨みを忘れての唯今の言葉。私も女子の悲しさ。ついホロリと情にほだされて、これだけを話しましたのさ。」と、語るのさへいかにも苦しさうである。

「什麼云ふ素性の女か。お前の言葉尻から想像もつくが、苗字だけを聴かして貰ひたいものぢや。」將軍も、先刻の怨みをさへ忘れ、憐愍の心を動かした。

「それは、將軍の首にかけた十萬兩の金が欲しさに、生命知らずの馬鹿女が一人、陣中に紛れ込んだ位で、勘忍して下さい。」

「さうか。それでは深く訊くまいよ。」と、宗楊を顧み「この婦人に手當を加へてやれ。」
「はッ。」

一同は、狐にでもつままれたと同じに、暫くは茫然として居つた。

その夜半。奉天軍の夜襲の激しい砲聲を耳にしなが、名の知れない男装の女は、野戦病院の天幕の下、ベッドの上で、舌を噛み切つて自殺して居つた。

宗楊から受けた背中の傷の苦痛に耐へかねたのでない。怨みある吳佩孚の大量と恩義に感じての謝罪であつた。

奉軍飛校陳樹藩の深い馴染を重ねた花廊の娘、艶兒が、飛行機と共に行方を失った樹藩を訪ねる冒険である。そして彼が敵地に不時着陸と共に、吳佩孚の爲め銃殺されたと知り、戀しい男の仇を報いやうとした許りだ。戀に狂熱する女は、また情にも感動し易い。最初は樹藩の爲めに、次は佩孚の意氣に動かされて山海關の狼廟下に、あたら名花一輪を無残にも弾雨に散した。

馬賊から將軍へ

馬賊になるまで

泥棒が將軍になるまで、是丈は心得置くべし、成功の最捷徑とでも云つて、支那ならば賣り出して見たいと思つてる事柄である。

泥棒と云つた所が、日本のやうなケチ臭いコソ的でない、眞鍮の洗面器を搔さらつて、あげられたり、一家をみな殺しにして、刃向つたらしい形跡のある主人に對しては三十三ヶ所の突き傷なぐり傷、腕前の頗る怪しい所の證跡を残して、大枚四十五圓と銀時計を強奪をして行つたなどと云ふ、恐ろしく割の悪い強盜などは、一緒にならないのだ。その遣り口が大陸的で、少くと

も四五十人、多いのになると二三千人が徒黨を組んで、堂々と官憲を相手に戦争もするし、武器彈藥を強奪をする爲めには、兵營をさへ襲ふのである。陸に馬賊、海に海賊、近頃の支那は又、彼等の出没横行がはげしくなつて來た。

往年、黃四懶王の一團が奉安線の鐵道附近を荒して居つた時、本溪湖驛頭で遇つた小柄なカーキ色の軍服姿、柔和な丸顔、屬官をぞろ／＼と連れて居つた張作霖や、此の間まで、四鄭鐵道の總辨をして居つた馬龍潭將軍の好々爺然たるあの溫容、いろ／＼と話をして、堅き握手を交して別れた事から、自分の恩師于忠漢氏が奉天省の顧問として、時めいて居たのに、絲をひいて、ま／＼な事が思ひ出されてくるが、什麼してもあの人たちが馬賊あがりであるとは、想見し得られない所である。

蛇は寸にして人を呑むと云ふが、張作霖は少年の時から、なか／＼に喰へない逸話を残して居るが、その時の性格の閃きが、先年、天津の三頭會議や吳佩孚との戦争當時までに見出す事が出来る。

張作霖が九歳の時であつた。

父には早く死に別れて、母の纖弱い手で、縫仕事から得る僅かの賃銀で生活をして居つた。別

に兄妹のない作霖は、母と二人で淋しい、みじめな其の日々を送つて居つたが、或る日のことその稼ぎ人である母が、ふとした事から床に就て、病の人となつて了つた。

今までは働いて居つてさへ、やうやくと生活して行つたのに、その母が倒れて了つたのであるから、幼い作霖の手では薬買ふ方法さへつかかなかつた。

「作霖や。」と、母は震れた面をあげて「家にはもう高梁も、麥もないだらう。お前が周お婆さんのお宅へ行つて、母さんが病氣で寝てゐるので、困つて居ることをお話をし、麥を二升程借りて來てお呉れ、彼所には前に、私が着物を縫つてあげてある代が、百二十文だけ貸してあるから……。」

「でも母さん、私が今までに何度も取りに行つてさへ、返して呉れないのですから、母さんが病氣になつたら、なほのこと、返しては呉れませんよ。」

「ですが這麼に困つてゐるのだから、その事を、お話をし、よくお頼みして御覽。」

そこで張作霖は濫々と、周老婆の家へと出掛けて行つて、泣くやうにして頼だが、そのお婆さんはその近所での名うての因業なので、幾ら作霖が繰り返して頼んでも、耳にもかけないで終ひには反つて睨みつけながら、

「さつさと歸つてお呉れ、家には人に貸す麥なんかは一合もないのだから。」

「そんなら仕事の代を返して下さい。」

「うるさい餓鬼だネ、それはお母さんに取りにお出でと云つとくれ。ぐづ／＼してゐると、頭から水を打ツかけるよ。」

作霖は到底この老婆から尋常一様の手段では麥も金も得る事の出きないのを知つて、家に歸つてから、無理やりに母を説きつけて、小さな背中に病氣の母を負ひ、再び周老婆の家へとづかづかと入つて來て、その炕の上へ母を休ませてから、罵り叫ぶ周老婆に向ひ、

「お婆さん、お母さんが仕事の代を取りに來ました。麥もあるのに貸しては下さらないし、お金も拂つては下さらないければ、お母さんのお世話をして下さい。」

「ば……莫迦な事をお言ひでない、這麼な病人を家へ連れ込んで、もしもの事があつたら什麼するのだい？」と老婆は怒に唇頭を顫せながら叫んだ。

それからは幾ら周老婆が何と云つても、作霖は母と、その炕の上を少しも動かかなかつた。

終には流石の老婆も根まけがして、いま／＼しさうに麥と金の幾らかを返してよこした。その事があつてから二三日後である。

作霖は村で畜畜として知れて居る或る一軒の家へ飛び込んで行つて、伯父さん、お家の一番肥えてる豚が裏の沼に落ち込んで、だん／＼と深い方へ入つて行くが早く救けてやらないと死んで了ふよ。」

これ聞いた其の家の人々は吃驚して、直ぐに下男や主人は一緒に裏の沼へと走つて行つた。すると其所には作霖の知らして来た通り、一番に肥えて居る、大切に居た豚が沼の深味にブク／＼と落ち込んで、出る事も出きないと見え、苦しさに悲鳴をあげて居つた。

その家の人々は漸くのこと、それを引きあげる事が出来たが、既にこの時には、村の人たちが大勢廻りに集つて、小気味よささうに眺めて居つたが、やがてその内の一人が、

「この豚はこれで百斤以上あるナ。」

「さうとも、百斤以上あれば、お前さんが。」と、主人に向つて

「この豚を死なして了へば豪い損害だつた。それを作霖が知らして来たのだから、五百銭位はお禮としてやらなければ不可ない。」と、催促する風に話した。

多くの人たちは、日頃から憎んで居るこの家の主人に金を出させるのを、面白さうに囁き交して居つた。

主人も大勢の人の手前、到頭五百銭を作霖にお禮として呉れたが、その實、豚をその沼の深味へ逐ひ込んで置いたのは好々と禮金をせしめた張作霖であつた。

その内に母の病氣もだん／＼に快くなつて来たが、作霖は這麼な風な事を繰り返して、それが年を取ると共に甚しくなつて行つた。

十五六歳頃のことである。

遼陽の山々を獵をしては、生活を助けて居つたが、毎日々々徒歩で山を探し廻るのが、馬鹿馬鹿しくて、よい獲物にも遇へないので、何とかして馬が一頭欲しいと望んで居つた。

所がその機會は偶然に到来した。

その日も作霖は獵銃を肩にして、深山の中へと入つて行くと、遠くから嘸々と響いてくる六七騎の蹄の音、林の樹蔭に身を忍ばせて様子を伺つて居るとは、少しも氣がつかないその人たちは高話しをしながら進んでくる。

見ると、それは一眼で普通の人でない、馬賊の一隊であると云ふ事が分つた。

「ドーン。」と、一發、烈しい獵銃の音が溪にこだまして、バツと白い、細い煙りが林に立つた、と同時に先に歩いて来た馬上の男が、

「アツ。」と云ふ魂消える叫びをあげて、どつと許りに仰向けさまに地上へ落馬した。また續けて、ドーンと云ふ銃の音、こんどは空に向けて放つたのであるが、残りの賊たちの狼狽かたは烈しいものであつた。

何所に人が何人居るか分らない、林の蔭から矢鱈に發砲するのであるから、吃驚したのしない所の騒ぎではない。

手綱をグツと締め、一散にそこを逃げ出して、一生懸命に走つて行つた。

すつくりと林の中から現れた張作霖は、煙硝の臭ひの漂うて居る内から、逃げて行く賊たちの後影を見送り、ニツコリして、傷ついて打ち倒れて居る賊の一人を尻眼にかけ、ヒラリと其の馬に跨ると、軽く鞭をくれて、落ちついて、反對の方へ歩いて行つた。

作霖が這麼な風にして、馬を得てから間もなくであつた。

矢張遼陽のもので、幼な友達の馮麟閣（馬賊となつて、後に師團長となる）が、ヒヨツコリ訊ねて来て、久淵を叙してから、

「什麼だい、吉林へ行つて見ないか、俺の義理の兄貴が人蔘採りをして居るが、這麼な所で獵などして居るのから思へば、それは面白い位に金儲けが出るのだが……」と、切りに作霖の意を

動かすやうに勧めた。

「それに馬があると云ふから、吉林へ行くにも樂だし、もつと面白い仕事もあるのだから、俺と一緒に行かう。」

「……………」作霖は暫く無言で考へて居つたが馮麟閣の云ふ人蔘採りが何であるかは、大概想像がついて居つた。

「よしッ、俺も行かう。」と、作霖は或る決心を以てきつぱりと云ひ放つた。

村を襲ふ話

張作霖は馮麟閣と二人、郷里の遼陽に母を残し、轡を並べて、吉林へと旅立つた。

日敷を重ねて来てみると、作霖が腹で考へて居た通り、麟閣の云つた人蔘採りなどと云ふ事は口から出任せであつて、吉林の山へと入つて了つた。

深い、とても遼陽などでは見られぬ位の大森林の下道を通つてから、バラツク式の大きな家のある所へと着いた。

もう前に二人の來る事がちやんと、遠くへ出だしてある見張りの哨兵から知らせがあつたと見え

バラ／＼と大勢のいろ／＼の服装をして居る男たちが現れて、

「兄貴、先刻からお歸りになるのを待つてましたよ、今朝山へお入りになつたと云ふ報告があつたので、遅くも日暮れ方には此所へ着くだらうと、首領と話してたのですが、よく早く来られましたナ。」

「ウム、道を少し急いだから。」と、後の作霖に向ひ「俺の住居は此所だよ、詳しい事は後で話さう。」

「話さなくとも、遼陽を出る時から大概は分つてる。」と、作霖は別に氣にも留めない口振で云つた。

「さうか、それならなほ好いんだが、實は俺の兄貴と云ふのが李治生と云ふ男でネ、この山寨の首領をして居るのだ、未だ配下は幾らも居らないが、見込みのある人だから一緒に居て見たらよからう。」

二人は乗つて来た馬を、出て来た男たちに渡して、この家へと入つて行つた。

家と云つても、荒削りの木板で葺いてあり、壁でも、床でも、炕でも本當に一時的の間に合せの住居であつた。その中は幾つも、小さく仕切つて、二三人宛が住へる位の室になつて居つた。

「この奥に今、手を入れて居る山寨があるのだが、そこへ移ると、此所よりは幾らか増しだらう、まア暫く辛棒するサ、だが野原に寝る事があるのから思へば、雨露を凌げるだけでも結構だ。」

そこで作霖は、この山寨の頭領である李治生に引き遇され、馬賊の一人としての生活を始める事になつた。

丁度、其の頃はロシアがどん／＼と北滿に兵を送り、飽くなき貪慾を逞うして、滿蒙を先づその領土とするの意圖を實現しやうと努めて居つた時である。

そして作霖がこの山寨に入つて、數日後のことであつた。

頭領の李治生は、配下の連中を集めて、

「どうも銃器彈藥が不足して居るし、藥品材料が十分にないで、思ふやうな活動が出きないで困る。所が幸ひにもロシアの兵が一個小隊許り、今夜、山麓の寺に宿泊する事になつたから彼奴等のをそつくりと此方に貰ひたいと思ふから、例の手段で襲ふことにしやうから、その積りで仕度をしてくれ。」と、命令をした。

その晩のことである。

附近の百姓のやうな男が五六人、強い焼酎や高粱酒の壺と、旨さうな支那料理を山と持つて

シア兵の宿泊して居る寺へ持つて来て、彼等が軍旅をねぎらふと云ふ意味から献上をして行つた。

酒に眼のないロシア兵のことであるから、その夜は小隊長はじめ、戦争と云ふのでもないので大浮れに浮れて了ひ、寺は忽ちの内に料理店かバーのやうに陽氣な叫び、唄ひ聲などが旺んに漏れて来た。

夜半近くである。

同僚の哨兵二人が、無残にも銃殺された銃音にさへ眼さめぬ位に、多くの兵はたあいもなく酔ひ倒れて居つた。中には酔眼朦朧と馬賊の姿を認めたものも居るが、澤山の銃口が扉口からのぞいて居るので、見て見ぬ振りで、再び眼を閉ちて了ひ、寝た振をして居つた横着な兵なども居つた。

それであるから、李治生の一團は赤兒の手をねぢるよりも容易に、思ふままに彼等の銃器や彈藥を強奪して引きあげて了つた。

その彈藥を利用して、二三日後に、或る村を襲ふ計畫が配下の一人から話し出されたが、それは新しい村長と代つてから、李治生の一團が附近を通過するのを知つても、以前のやうに、豚肉

とか晒木綿、酒とか金とか云ふ風に澤山の貢物を届けて寄越さないと云ふ所から、他の村への見せしめの爲めに襲撃をしようと思ふ事に決定をした。

村を襲ふ前日の日暮方から、仲間の者は旅商人や百姓など、いろいろに變装をして、その木賃宿とか、無住の寺や廟に、入り込めるだけの人數が入つた。そして翌朝、未明にはその村を取り圍んで居る小高い丘や峰に、見張りの番兵が一面に配置されて、村から逃げ出す者や官兵の來援に備へた。

先づ四五十人の馬賊の一隊は、眠れる村の空へ向つて、怖ろしい小銃の音を浴びせかけた。

「それッ、紅鬃子(馬賊)の襲來である。」と、一村の人たちが寢巻のままに起き上つて、おびえ立つた時には、後に控へた馬賊の一隊がどかどかと其の村へなだれ込んで、前から調べのついて居る、この家はどれ位、あの家は幾何位と云ふ風に、見込みをつけて置いた金額によつて、四五人宛が一組となり、村の豪農や資産家の所へ押し込んで、一方に銃器彈藥を強奪すると共にその金を村の料理家まで持つてくるやうに言ひ渡した。

料理家には、もう番兵が立つて、頭目の李治生は其所に三四の幕僚と陣取つて、各方面からの消息によつて、それ／＼に傳達し、命令を發して居る。

小一時間も過ぎたであらう。

各家から掠奪をして来た金額をよせ集めて見ると、豫定の額よりなほ三萬圓から不足である。そこで李治生は、直ぐに村長と村の長老二人を得票(人質)として連れて行くから、明日の夕方までに平頂山麓まで其の金を調達をして持つて来いと、そこへ村の重立つた人たちを呼びあつめて命じた。

村を引きあげる知らせの喇叭は、朝の氣をふるはして鳴り響いた。

あちこちから、ぞろ／＼と仲間の者が料理家のある方へと集つてくる。作霖も二人の仲間と急ぎ足にその方へ向つてくると、道側のみすぼらしい百姓家から、怖ろしい若い女の悲鳴が漏れて来た。

「何事であらうか。」と、作霖は扉を開いて、暗い土間に入つて見ると、そこには仲間の一人が娘であらうか、愛らしい十六七位の女を炕の上に押し倒して、馬乗りになつて居り、室の隅では老夫婦が跪いて、拱手をし、一生懸命に娘を許して呉れるやうに、涙聲で嘆願をして居つた。

下になつて居る娘は、あらん限りの苦しい、悲鳴を振り絞つて泣き叫んで居る。作霖の腰のピストルは何時か手に握られて、その仲間を目がけてただ一發の下、射殺をして丁

つた。

「細民を襲ひ、婦女子を姦淫しやうとする。俺たちの面汚しであり、内規を亂した奴だから俺の手で制裁を加へてやつたのだ。」と作霖が頭目の前に呼ばれた時に、豪然とうそぶいて居つた。

本當に馬賊として、這麼な嚴禁された内規を犯した者は、頭目から自殺を強ひられるか銃殺をされるのであつた。それで作霖は反つて、李治生から褒められるやうな、妙な場合となつて了つた。

「ではお前たち。」と、頭目は村の重立つた者を見渡して「官憲に報告をし、申し渡した金額を調達をしてこないと、この村長たちの命は無論村全體を焼き拂ふから、その積りで約束の時を違へず持つてこい。」と言ひ渡して、泣き叫ぶ村長や長老を馬につけ、配下を點呼して、引きあげて了つた。

跡はまるで、暴風雨の後のやうである。

第七の戀女房

張作霖は馬賊生活に入つてから、いろ／＼の經驗と苦痛を嘗めて行つた。

縣役所から中央政府へ送る税金や、銀行から銀行へ送達する、現金などを途中で横取りをした
り、槍火車と云ふ列車の襲撃なども繰り返した。そして其等の利益は頭目が一半を取つて了
ふが、これは日頃、多くの配下を養成をして居るので無理もないが、その一半は最初に仕事を報
告をして来た者が一番多くを貰ふ、次に敵の防禦に當つたもので、その外はそれ／＼に役割の難
易によつて、割り當てられる事などを知つた。

或る日のこと、李治生の配下の四五人は普通の旅客のやうな風をして、列車に乗り込んで居り
廣い満洲の廣原、丈よりも高い高粱の畑の間を走つて居る時に、後尾の車掌室の所へ入つて来た
馬賊の一人は何か書物をして居つたロシアの車掌の襟元にヒヤリとピストルを突きつけて、

「おい、この列車を直ぐに止めて了へ、もし俺の云ふ事を聞かないと、お前の生命は直ぐに貰ふ
ぞ。」

この怖ろしい言葉をきいて、車掌はがた／＼顔を出して了ひ、生命惜しさに、機關車の方に列
車を停める合圖をした。

列車は急に、茫々として際限のない、高粱の畑の中に停つて了つた。

乗客一同は何事が起つたのであらうかと、窓々から首を出して語り合つて居ると、生ひ茂る高

粱の中に待ち伏せて居つた仲間の馬賊が數百人、ばら／＼と手分けをして、列車へ目がけて身輕
く飛び乗り、押し込んで来た。そして大勢の乗客一同の端から端まで、金と云ふ旅客の金を強奪
をして行つて了つたが、それは極く短い時間——ほんの十分か十五分の間に演じて、また元の通
りに、高い高粱の畑の中に姿を没して了つた。

這麼な事がたび／＼あつたので、ロシア政府は支那の政府へ向けて、嚴重な抗議を申し込む一
面には大規模の馬賊討討の大部隊の兵を繰り出した。

支那の官憲は、馬鹿にしきつて居つた馬賊連中も、ロシアの兵には幾らか手應へがあるので彼
方此方で小戦争が繰り返され、李治生の一團も彼等と應戦をしたが、運悪くも頭目はロシア兵の
流弾の爲めに、一命を落して了つた。

この時分から作霖は、めき／＼と仲間の間に彼の豪膽と、情義の厚い點が認められて行つて、
兄弟である麟閣を越して、年の若いにもかかはらず、李治生の跡を襲うて、この一團の頭目とし
て推されるやうになつた。加之に作霖の奇謀はいよ／＼仲間の馬賊を畏服せしむる事が多くあ
つた。

日露の風雲は穩やかでなく、今にも戦争が始りさうに切迫をして来て居る時である。

ロシアも、日本も、滿洲を横行をし、地理に明い彼等を操縦をし、手馴づける事に苦心をして居たので、これ幸ひと許りに、作霖は配下を率ゐて、ロシアの軍門に降つたが、其は眞實、腹からの歸順ではなく、一時、銃器や彈藥を得んとしたの策略であつて、直ぐに寝返りを打つて、また前にも増して新しい活動を始めた。

間もなく日露の戦争は日蓋を切つた。

日本では、馬賊を集めての滿洲義軍の活躍となつて、到る所で日本軍隊の利益を計り、ロシア軍をたび／＼死地へと導いてくれた。

勇敢である日本兵士が戦捷をもたらし、呉れたものではあるが、その裏面には馬賊から成つた滿洲義軍のあの時の働きも忘る可からざるものである。

這慶な千歳一遇の機會、奇智に富んで居る張作霖の事であるから、ポーツマウスの條約で、戦争は終局を告げたやうなもの、彼の配下は素晴らしい勢で、その數を増して行つて、馬賊と謂へば、外の群小頭目を壓して、直ぐに張作霖を全ての人から考へ出すやうになつた。

その時の奉天將軍は趙爾巽であるが、到底作霖の征討などは思ひもよらない事であるので、こつそりと己の代理として王景春を派遣し、相當の官位を與へる約束の下に、表面は奉天將軍府へ

麟閣と共に歸順するやうに勧めた。

話は早く進んで、張作霖と馮麟閣は昨日までの馬賊を廢業をし、一躍して陸軍將校たる營長に任命をされ、三千人近くの配下はそれ／＼に其の配下に將校、士官、兵卒と早變りをして、了つた。

この事を傳へ聞いた多くの馬賊の大頭目連はわれも／＼と作霖の配下につく事を願つて、歸順を申し込んで來た。

張作霖の一營は忽ちの内に、生命知らずの荒武者同然たる兵をもつて満たされ、その勢はだん／＼と、將軍の趙爾巽をしのぐ程になつて行つた。

その内に、第一革命の烽火は武昌にあげられ廢れた三百年の清朝の殿堂はもろくも崩れ落ちて了ひ、奉天將軍であつた趙爾巽の勢力もすつかりと失墜をして、了つた。それと反對に實際の武力を握つて居る作霖は、ぐん／＼と己の勢力を擴張して、事ごとに頭を擡げて行き、趙爾巽に代つて奉天將軍となり、都督となり、隣りの省に居る孟恩遠を追ひ拂うて、奉天、黑龍江、吉林三省の司配を握る省巡閱使から終ひには滿洲から蒙古までも己の権力下に置いて滿蒙總略使と云ふ、素敵もない、茫大な土地を治めて、支那での一國王のやうな觀を呈して來た。先年、曹錕が支那の大總統になると、作霖は副總統に推されて、更に支那一國を背負ふて立つ大元帥にまで經

上つて行つた。

泥棒から一國の王にまでなつた、近代での幸運兒——張作霖の殺伐なる生活の裏面にはまた這麼な風な優しい所がある。

作霖の存生中、妻として愛して居る女が第七夫人まであるが、氣まぐれに日本やロシアの女を妾として圍つて居つた事は別物として、それは夫人として正位に直して居る女たちである。

第一夫人は綠林生活のかた、彼と苦痛を共にして來て居る糟糠の妻であるが、第二夫人以下は、彼が軍官となつてから、日の出の勢となるに連れて、迎へた女たちである。その第一夫人が死んだ時、第二夫人は(河南省の生れであつた)作霖の前へ出て、

「私の地方では兄の妻が死にますと、弟の嫁を兄嫁に直し、弟には又新しく他から妻を迎へる習慣であります。私もどうか第一夫人として、正室に直して戴きたうございます。」

「いや、それは不可ない。」と、作霖は嚴とした口調で「第一夫人は死んでも第一夫人だ。あれが俺と一緒に嘗めて來た苦痛を考へれば、正室は外には納れぬ考へである。」

この言葉を聞いてから、第二夫人が己の室で黒髪を根元からぶつとりと切つて了ひ、尼生活に入るなどと駄々をこね出したり、第三と第四夫人の喧嘩、流石の作霖も女は治め難いと見えて、

家庭はよくゴタついて居た。

北京の花界、當時十六の蕾の花、引く手数多の中から、張作霖に惚いたのが、その第七夫人である。

正室の第一夫人が逝いてからは、その寵愛を殆んど獨占して居るやうなのが、この第七夫人であつて、更に、老いてます、旺んである作霖が、此の夫人に飽きの來た時、第何十夫人まで進んで行くであらうかとさへ思はれた位だ。

火のやうにバツと燃えあがる戀心を、作霖は思ふままに傍若無人に振舞つてやり遂げて行く所が、彼が前身を偲ばせるやうな點がないでもないが、思ふことをどしどしと爲さねば措かないと云ふ、彼の性格から生れて來て居たのであらう。

世の中の老人と同じに、張作霖の戀も樂しむと云ふ域を脱して、相手を踏みじると云ふ方面へ入つて行つたのである。

張勳と女優王克琴

生命がけの芝居

支那の革命に、何處までも根強く、南京に蟠居して、清朝の最後に、宣統皇帝の爲めに萬丈の氣を吐いて居つた、張勳將軍も、病魔には打ち勝つことが出きないで、先年死んで了つた。一度は明智の三日天下と同じに、北京に復辟を斷行し、黃龍の旗を前清の宮城高く翻へしたのであるが、時利あらずして、失敗に終つたのである。が彼の向ふ見ずな大膽と、蠻勇は、死ぬまで辨髪で押し通し、清朝の禮服で居つた程の頑固一點ばり、支那人としては珍しい男の一人である。

しかし此の頑固な、場合によつては鬼とでも取り組み兼ねない、蠻勇の裏、張勳將軍にも優い戀の半面がある。

南京城内の北街。商家の軒を並べて、青や赤や金銀をちりばめた大看板が、もの／＼しく路面

に向つて、かけ連ねてある間に挟れて、灰色の煉瓦壁を廻らしたかなり大きな一構へがあつた。そしてその壁には、一面に新聞紙大の紅紙の劇場廣告が、べた／＼と貼りつけてある。

そこは南京一の劇場、寶永茶園であつた。

その日は、晝も夜も興行は休みと見え木戸口に人影もなく、場内はガランとして、土間の池子から、棧敷の包廂まで、人ツ子一人見えなかつた。

ただ窓から吹き込む風に、舞臺の上に澤山に下げている、新加入役者を披露するピラなどが、ばた／＼と音立ててめくられて居る。

何所を見ても、森閑として、人氣のない、午後の劇場の淋しさを思はせた。

が、表はそんなに静かで、街路や舗道を行く馬車や自動車の警笛などが、時折に遠く聞えてくる位であるけれど、その舞臺を廻つて、鳥渡裏の方へ足を運んで、劇場の小屋とは少し離れて居る、下廻り役者の寄合部屋のやうな、別な建物に足を入れて見ると、扉を開けて、八坪許りある正面の廣間、そこには八九人の男女優たちが、榻に横になつたり、中央のテーブルを圍んで、椅子に倚つたりして、各自に勝手な、亂次ない風をして談笑して居るのだ。

南支那は、北と違ひ、四月と云ふ聲をきくと、もう拾一枚で十分な、暖かさである。

彼等は、つい二日許り前に、上海から買はれて来た張奎培の一座であつた、此所に集つて居るのは、その一行中での幹部所の連中である。

「それで、今もお話をする通り、折角ああして廣告ビラまでも廻してしまひ、初日は是非共、お前さんたちが得意で、持ち廻つて居る革命劇の「新春怨」を演つて貰ひたいのだ。さうでない、お客たちを駆したやうにもなるし、初日が明日に迫つてから、急に藝題をつぎ變へなどすると、あれ程までに立つて居た人氣がガタ落ちだからネ。そこは迷惑でもあらうが、一つ引き受けて貰ひたい。」と、椅子に腰を下して居る、でつぷりと肥えた五十年配の男。この劇場主であり、此度の請元である劉順徳は云つた。

「成程、それは請元さんの仰やる通り、私たちが得意にして、到る所で客を呼んで居る革命劇です。演らして戴きたいのは、山々ですが、何しても外の土地とは違ひ、南京では場所が悪うございますよ。」と、請元の前に、テーブルを挟んで掛けて居る三五六位の年頃。色の白い、のつぺりとして、額を剃りあげた辮髪を後に長く垂らして居る細面の男が相手になつて、返辭した。

「だが座長。そんな心配は要らないぜ。そこは俺の方から、それ／＼に筋道へは渡りをつけて置くし、警察の狗どもへはちやんと握まして置くから、お前さんたちがあの芝居を演つたからと云つて、少しも迷惑しないやうにするぜ。」

「それは、さうでせうが。」と、座長の張奎培は、白い額へ皺を寄せて、さも困惑してる風で「あの藝題も、前以て貴方の方からお問合せがあれば、このやうに行き違つたへマを踏まなかつたのですが。何としても此方へ来ると匂々に、初日には「新春怨」を出して貰ひたいぜと云ふお話なので、實は座員の内にも、大變に困つて居るのが居るのです。」

「大丈夫だよ。俺が引きうけるから、一つ思ひ切つて、演つて貰ひたいのだ。」と、劉順徳は何處までも、平気で、強く云ひ切つた。

「それに、今、この南京の都督でお居になる張勳將軍は、無二の清朝方であり、大の革命嫌ひですから、場合によると、城内で革命劇などを演ると、一座の者がどんな目に遇ふか、罪に落されるか分りませんからネ。第一、あの芝居を演るにしても、女主人公にはなり手が無いでせうよ。」

「什麼して？」と、請元は怪訝の眼を向けた。

「御承知でも御座いませうが、あの「新春怨」は、今の清朝を倒さうとする革命黨の青年志士が

清朝の老將軍の手に捕れて、斬罪に處せられて了ひ、その許婚である娘が、壯氣にも單身で、將軍邸に押しかけて革命の由來と彼の頑迷を罵り飽くまで革命黨の爲めに、氣焰を吐く芝居です。この張勳將軍の城下でそんな芝居を演つたならば、殊によると女主人公になる役者は、重ければ、銃殺位は免れませんもの。幾ら何でも、生命がけでは、御免を蒙りませうさ。」

「ふうむ。」と、請元の劉順徳は、面白くなさうに、鼻で扱つて「そこが一か八か、お客が呼べる面白い所だ。お前さんも存外、話の分らねえ人たちだナ。先刻からも云ふ通り、そこは俺が隅から隅まで、利き目くには、餘計な駄目の出ないやうにして置くと、云つてるぢやないか。よしんば將軍府からお咎めを受けたにしても、さうなれば一番に擧げられるのは、誰だと思ふ？この一座を呼び迎へた俺ぢやないか。お前さんたちは、請元が勝手に定めて、無理に革命劇を演らせましたと云へば、濟む事だ。」

「さうですか。それ程までに仰やつて下されば、一つ思ひ切つて演りませう。だが女主人公のなり手が居らないので……。」と、彼の後、壁によせた櫓に腰かけて、二人の話を熱心に聴き耳を立てて居つた三人の女優を見返つたが、誰も私が演りませうとは云はず、ただもじくと尻込みをして居る。

「どうですか、今も請元さんのお話をお聴きでせうが、明日の初日は、革命劇の「新春怨」を出して呉れと云ふ御注文でして、私はお引受けいたしましたやうな次第ですが、貴方たちの内で、誰方か一人この女主人公の役を演つて貰ひたいものです。」と、座長も、氣の毒さうに云つた。本當に、随分迷惑な話である。

この南京の張勳將軍と來たならば、頑固一點ばりで、自分に逆ふ人たちは、片端から銃殺をし、暗殺をしても差支へないと、考へ込んで居る亂暴者である。

この城下で、殆ど彼に當てつけた、彼を罵倒する芝居を演り、その主人公である娘——一番に彼から憎まれ、睨まれる役を引きうけるのであるから、三人の女優たちも、皆もじくと遠慮して居る譯であつた。

「請元さん。什麼ですか？御覽の通り女優さんたちが、このやうに尻込みをするのですからネ。」と、座長の張奎培は、請元の方を見遣つて「如何でせうか。藝題をつき變へて頂きたいものが……。」と、敷衍するやうに頼んだ。

「ちよつ。」と、強く舌打ちを一つした請元は「何て、やいざな一座なんだ。それで革命劇なんかを打つて歩いて居るのか。」と、さういふ餘り、嘲笑する語氣を漏した。

「本當に申し譯がありませんが、どうか此度の所は、御許しを願ひますよ。」と、張奎培は専らに詫びて「その代り、この埋合せには、うんと馬力をかけて、お客を呼ぶやうにいたします。」
 「駄目だ！」と、請元は吐き捨てる口調で「外の狂言を演つて貰ふなら、もつと好い一座が呼んで來られるのだ。何もお前さんたちを、上海から態々招かなくてもよかつたのだ。ただネ。革命劇を演つて貰はうと思ふから、費用を惜しまずに來て貰つたのさ。だがもう一人、女優さんは何處かへ行つたのかい。」と、四邊を見廻して訊ねた。

そこへ、扉口からヒョッコリと、一人の女優。背は餘り高くないが、眼のぱつちりと涼しい、華奢な身附、凄に程に美しくはないが、何所か男を引きつけ惱せる魅力を備へて居つた。

「お師さん、遅くなりまして済みません。」と、ニツと笑ひながら「これでも随分と急いなのですわ。」

「王克琴さん。いい所へ歸つて來て下すつた。今ネ。革命劇の事で、請元さんと、御相談をして居るのですが、實は困つて居るのです。」と、座長はホツとして、かの女を仰いだ。

「お演なさいなネ。そんなビク／＼する事はないわ。」

かの女はケロリとした顔付で、女優たちの掛けて居る榻の方へ行つて、割り込んだ。

そこに居る役者たちは、呆れ返つたやうに、王克琴の姿に視線を投げて、眼をバチクリとする許りであつた。

「では、「新春怨」の女主人公には、貴女が扮して呉れますか。」と張奎培座長は、念を押すやうに訊ねた。

「ええ、お易いことだわ。」苦もなく云つて、ニコ／＼と笑つて居る。

「王克琴さんは本當に豪いナ。」と、請元の劉順徳は、この言葉を聞くと、急に顔の相恰を崩して喜びながら、お世辭でも浴びせる積りか、いろ／＼と彼の女を賞讃し始めた。

女優の將軍府乗込

革命劇と銘を打つて居る「新春怨」通し十三場の蓋を開ける初日となつた。

その日は、午前の十一時からの開場であるのに、朝の内からぞろ／＼と観客は、札賣場へ詰めかけて黒山の人。今にも木戸口でも、叩き碎しさうな喧騒で、わや／＼と素晴らしい人氣であつた。

いざ開場となると、狭い木戸口は押し合ひ、へし合ひ、叫喚の聲の後からどし／＼と新手の觀

客が詰め寄せる勢、恐らくこの劇場始まつて以来の大騒動だ。

これを見て、蔭で喜んで居るのは、請元である座主で、彼の思ふ壺に適つて、パツと立つた此の景氣に押冠せて、新しい狂言の蓋を開ける度に、屹度うまい備けになると、一人で北叟笑んで居つた。

何しても、張勳管下の南京で、革命劇を開けるなどは、随分と無鐵砲な話であるが、そこが興行師としての彼の腹で、日頃から金で什麼とでもなる警察官などは、高をくくつて馬鹿にしきつて居つた。

芝居は、まだ開演もしない内に、階上も階下も客でぎつしり、直に札は止められた。

敵地へ乗り込んで、敵を罵るやうな大膽な芝居を演る一座は、どんな變つた、面白いことをするであらうかと云ふ譯で、一つは好奇心も手傳つての客も多い。

開幕を知らせる銅鑼や太鼓が打ち込まれると同時に、小屋も割れ返る程の拍手が湧き起つた。

丁度、その時刻であつた。

張勳の居る將軍府では、幕僚の一人が彼の居間へ這入つて来て、

「閣下！ 飛んでもない、怪しからぬ奴等が城内へ入り込んで来て居りますのを、御存知でござ

いませんか。」

「それは何だ？」と、張勳はソオフアに寄りながら、水煙管でゆつたりと、煙草をくゆらして居つた面をあげて、幕僚を顧りみた。

「北街の寶永茶園劇場に出動して居ります俳優たちですが……」

「俳優か」何だ詰まらないと云ふ風に、また水煙管を、口へ持つて行つた。

「それが」と、幕僚は一段と聲を高くし、彼の注意を促すやうに「革命黨に連絡のある奴のやうに思はれるのです。」

「ふうむ。革黨の一味ならば、警察の手で檢舉して了へ。何も儂の所へまで、そんな事を一々知らせに来る事はない。」と、不興の語氣を漏らした。

「いや。それが。」と、聊か狼狽氣味になつて「警察は彼等に、革命劇「新春怨」と云ふのを開演するのを許可して、現に今日は其を演つて居るのです。しかも其は、清皇室を罵り、閣下を諷してある、實に怪しからん芝居などです。」一生懸命に焚きつけた。

「何か。それは實際か。」張勳の太い眉がビク／＼と動いた。

「はい。直に彼等の興行を禁止し、相當の處罰をしないと、將軍の威信にも係る事と存じて居り

ます。」

「それを何で、警察では差し止めぬのぢや。」と、不審を打つて訊ねた。

「さア、可怪しい事と存じて居ります。」

「直ぐに、その劇場にまゐり、そのやうな不都合な芝居であつたならば、興行禁止を命じ、その座主と俳優の代表者に、當將軍府まで取調ぶる仔細があるから出頭せえと、同行してまわれ！」

それから。」と、彼は暫く沈思して居つたが、「中央警察府の長官にも、直ぐと此方へ来るやうに、儂が用があるからと、電話でも掛けて置いて呉れ。」

「はッ。」と、幕僚は退いて行つた。

それから半時ばかり経つて、寶永劇場の木戸口では、將軍府からの一小隊ばかりの兵が着いて演劇中止を嚴命した。

頭取らしい男が、舞臺に現れて、その事を言ひ譯をした時は、小屋に一杯の見物は、罵聲怒聲をふり絞り、床を踏み、卓を叩き、いやその喧轟は豪いもので、凄い程の光景を呈したのである。

「やれ〜、構はずに演れ！」

「俺が附いて居るから大丈夫だ。」などと、何所も同じ、人の後から大聲に彌次るのが居るかと思ふと、眞剣な聲で、

「木戸錢を返せ。」と、嗚鳴るのが居る。

こんな譯で、観客はなか〜、小屋を立ち退く氣配が見えない。

やがて、その事は木戸口の士卒たちに話されたと見え、此度は樂屋口から舞臺へ、どか〜と兵士たちが現れて、キラ〜と陽光に輝く劍をつけた銃口を、一齊に客席の方へ向けて、士官の一人が叫んだ。

「お前たちは何時までも、此の怪しからん芝居を見やうとして、此所を立ち去らないで騒ぎ立つて居る、と同罪と見て、打ち殺すぞ。」と、威嚇した。

「わあッ。」と云ふ叫び、劇場もゆらく程に崩れを打つて、われ勝ちに、木戸口の方へと遁げ出した。がその混雑は一通りでない。

何千と云ふ観客が、一度に立つて、狭い口から逃げやうと、あせり、もがいたのだ。

表方が、その大混雑で、死傷者も出きやうかと云ふ騒ぎであるのに、裏の樂屋では、座主で請元の劉順徳を中に、座長の張奎培や外的一座の役者たちが、恐怖と後悔に、顔色を變へて心配を